宗教とはなにか

古代世界の神話と儀礼から

小林　道憲

宗教とはなにか

―古代世界の神話と儀礼から―

小林道憲

目　次

プロローグ　宗教の本質の探求

Ⅰ　大いなるものへの畏怖

1　大自然への畏怖
大自然、この大いなるもの　天と崇高なもの　大地と産出力　天と地

2　死の自覚
死の自覚と宗教感情　埋葬の意味　死者の霊という観念

3　原始宗教
アニミズム　プレアニミズム　呪術　先史時代の芸術

4　宗教とは何か
人間存在と宗教感情　宗教の定義　大いなるものと聖なるもの　聖なるものの顕現

Ⅱ　大地と生命

1　生　成
生成の原母　天と地の結婚

2　豊　穣
狩猟時代の豊穣神　農耕時代の豊穣神　穀物の母　愛の神

3　死
冥界訪問　冥界移動　冥界の女王

4　再生と循環

再生　樹木と洞窟　循環

Ⅲ　死と再生

1　魂と肉体の分離

魂と肉体　葬送儀礼　畏怖と哀惜

2　冥界の諸相

様々な冥界　冥界下りの物語

3　生と死の連続

他界観の源泉　死と再生の隠喩　宇宙生命への帰還

Ⅳ　生成と創造

1　混沌からの生成

混沌の象徴　カオスと無　混沌からの生成　生成としての存在　生成と否定

2　生成の弁証法

一から二への分裂　二から一への結合　戦いの原理

3　創造と再生

創造型神話　創造と破壊

Ⅴ　儀礼と象徴

1　宇宙の循環と農耕牧畜儀礼

宇宙と人間社会の更新　天地のリズムと人の営み　天地の聖婚　動物供儀と人身御供

2　古代の密議
死と再生の儀礼　イシス・オシリスの密議　エレウシスの密儀とオルフェウスの密儀　ディオニュソスの密儀　キュベレとアッティスの密儀　ミトラスの密儀

3　儀礼の意味
宇宙との合一　日常性からの離脱　世界観の表現　儀礼と象徴　大宇宙と小宇宙

VI　罪と悪の自覚

1　混沌と秩序
現世の悪　罪と穢れ　ティタンと人間の堕落

2　罪と罰
プロメテウスの悲劇　人間の二重性とその運命　神への反抗と傲慢　ギルガメシュとエンキドゥ

3　原罪と審判
楽園喪失　原罪と終末論

4　赦しと救い
罪と悪の自覚　ヨブの苦難　高度宗教への移行

エピローグ　宗教と日本人

註

主な参考文献

あとがき

プロローグ　宗教の本質の探究

第二次大戦後の半世紀ほどのわが国の時代思潮をながめてみても、科学への信頼が揺るぎなかったはじめの四半世紀には、宗教などというものは一種の虚構または阿片のようなものだという考えが、多くの知的大衆の心をとらえ、宗教など必要ないという考えが主流を占めていたように思われる。おおまかに言って、この時代は、迷信を軽蔑し科学に信頼を置く啓蒙主義的時代であった。

ところが、その後の四半世紀は、高度化した科学技術や、それによって形成された高度産業社会が、必ずしも人間に幸福をもたらすわけではないということが明らかになるに従って、人々の不安は募り、次第に、宗教の必要性が知的大衆にも認識されてきたように思われる。一般大衆の間では、すでに、それ以前から、宗教の必要性は暗黙のうちに前提されていた。かくて、その結果、宗教、特に新しい宗教が隆盛を極めるに至ったのである。今日では、むしろ、この隆盛を極めるに至った新宗教あるいは新新宗教そのものが多くの問題を抱えていることこそ、問われなければならない。

宗教とは何なのか。今日ほど、宗教について考える必要性のある時代もないであろう。

しかし、一口に宗教と言っても、現代の新しい宗教もあれば、仏教やキリスト教やイスラム教のような旧来の宗教もある。さらに、その源泉である古代宗教や原始宗教もある。宗教は実に幅が広く、多種多様であり、また、科学のように統一ある理論があるわけでもない。宗教はとらえどころがないというのが、現実かもしれない。

とすれば、〈宗教とは何か〉ということを明らかにするのに、現代の新しい宗教はもちろんのこと、仏教やキリスト教やイスラム教などの旧来の宗教をも遡って、その源泉である古代宗教や原始宗教に帰って、宗教が誕生してくる源泉を考察してみるのも、無意味ではないであろう。

本書は、仏教やキリスト教が成立してくる以前の古代宗教や原始宗教に帰り、その神話や儀礼の解釈を通して、〈宗教とは何か〉について考察してみた論考である。源泉に帰れば帰るほど、物事の本質は見えてくるとも言える。しかも、そのようにして見えてくる本質は、意外と単純なものだとも言える。そういう単純な本質を取り出して、原始宗教から古代宗教、高度宗教から現代宗教にも一貫して通じる宗教的真理を見出そうとすることが、本書の目指したところである。

しかし、原始宗教や古代宗教については、すでに、十九世紀以来、今日まで、研究し尽くされてきたとも言える。

十九世紀のヨーロッパに生まれた近代の宗教学は、主に、宗教の起源を求めることから始まった。あらゆる宗教が出てくる原初の起源を追究することによって、〈宗教とは何か〉

ということを明らかにしようとしたのである。タイラーは、アニミズム、つまり、あらゆるものに宿っている精霊に対する信仰に、宗教の起源をみて、すべての宗教はアニミズムという原初形態から進化してきたものだと考えた。また、フレーザーは、宗教の段階の前に呪術の段階があり、宗教は呪術という原初形態から発展してきたものとみた。

この宗教の起源を追究する情熱は、二十世紀になっても受け継がれ、さらなる起源に向かって、その追究の手を伸ばしていった。マレットは、アニミズム（精霊信仰）の段階の前に、あらゆるものに浸透している非人格的な力（マナ）の存在を信じる段階があったとして、これをプレアニミズムと称した。また、ラングは、多神教やアニミズムが出てくる以前に、最高存在に対する信仰があり、それが宗教の始源だと主張した。

しかし、この宗教の起源を求める動きは、結局、諸説が入り乱れて、宗教の原初形態はよく分からないというところに帰着してしまったようである。歴史的にみても、宗教の原初形態を見出すことは困難であり、また、今日の未開社会でも、多種多様の信仰形態があって、どれが宗教の原初なのか分からないというのが現実のようである。もともと、起源を求めることによっては、本質を把握することはできないのかもしれない。宗教の本質を追究する上でも、起源の追究ではなくて、別の方法が見出されねばならない。

しかし、だからと言って、宗教を社会的機能や心理的機能に還元する方法も、宗教の本質をとらえるものではない。このような還元主義的方法も、二十世紀前半以来、今日まで、盛んに試みられてきた。例えば、デュルケームは、特に、未開社会のトーテミズムに注目し、トーテム的信念を氏族の社会的統合に基礎づけ、宗教を社会的機能に還元した。また、フロイトは、原始の家父長制社会における父親殺しに、宗教の起源を求め、宗教を心理的機能に還元した。だが、このような社会学的・心理学的還元主義は、必ずしも、宗教そのものを明らかにするものではないであろう。宗教の社会的・心理的機能は、むしろ宗教そのものの本質から派生してくるものであって、その逆ではない。宗教の本質を明らかにするには、なお別の方法が取られねばならない。

宗教現象は、どのようなものであれ、何らかの宗教的体験の表現である。われわれは、その宗教的表現を通して、そこに表わされている内的体験を理解しなければならない。この表現からの体験の理解が、解釈に他ならない。様々な仕方で表現されている宗教現象は、解釈されることを必要としている。宗教の本質を把握するためには、体験・表現・理解という一連の解釈学的営みがなされねばならない。

例えば、宗教体験は、神話や儀礼という言語や身体を介した象徴の体系として表現されているが、この象徴の体系から、そこに隠されている宗教体験の意味を解釈することによって、普遍的に成り立つ宗教の本質も理解されるのである。神話や儀礼の形で表現されている現象は、一見理解しがたい内容や振る舞いに満ちている。だが、そこから、そこに潜んでいる意味を理解し、時代を越えて共通する宗教体験を取り出すことによって、〈宗教とは何か〉ということが理解されるのである。

神話や儀礼ばかりでなく、多くの宗教現象については、宗教史や宗教学をはじめ、種々

の分野から報告されている。だが、その生のままの資料だけでは、まだ、宗教の本質は理解されたとは言えない。その多くの資料から共通の意味を理解し、全体を綜合してのみ、宗教の本質は理解することができる。古代から現代までのあらゆる宗教現象は、人間を超えるものに対する人間の畏怖と依存の感情を表現しているが、そのような宗教的真実を種々の表現から読み込む作業がなされねばならない。解釈学的方法は、これを可能にする。

もちろん、この場合、人類学や社会学や心理学、哲学や現象学、神話学や民俗学など、多くの分野からの解釈は十分尊重されねばならない。また、これらの分野から、有意義な解釈が今までも提出されてもきたのである。解釈学的宗教理解は、これらの成果を尊重しながら、いろいろな宗教現象から本質的な宗教体験を読み込み、宗教の本質を理解にもたらさねばならないのである。

このような解釈学的方法による宗教の本質理解において、最も広範で最も偉大な業績を残した今世紀最大の宗教学者は、エリアーデであった。エリアーデは、宗教史、宗教学、人類学、社会学、考古学、古代史学、神話学、民俗学、深層心理学など、広範な領域に目を配りながら、そこから出されてくる宗教的現象の資料に対して、西洋人としての先入観を振り捨てて、そのものに入り込み、それとの共感の中で、宗教の本質を取り出した。神話一つをとっても、エリアーデは、その神話が現に生きられている人間の生そのものに身を置き、そこから、その宗教的意味を取り出した。その方法は、体験・表現・理解という一連の手続きを徹底する解釈学的方法であった。彼は、宗教現象についての厖大なデータから、解釈学的方法によって、その宗教的意味を抽出するとともに、宗教そのものの本質を明らかにしたのである。

エリアーデが、先史時代から今日に至るまでの宗教現象の資料から明らかにした宗教の本質は、〈聖なるものの顕現〉という事実に他ならなかった。彼の解釈学的比較宗教学は、この人間と聖なるものとの出会いを解読することに焦点が当てられていた。原始人によって崇拝される一個の石を取り上げた場合でも、彼は、これを単なる物神崇拝として片づけてしまうのではなく、そこに〈聖なるものの顕現〉を読み込んでいった。崇拝される石を一つの宗教的象徴とみて、その石に顕現している聖なるものを、原始人の宗教体験そのものの中に入って取り出してきたのである。そして、多くの宗教的象徴の中に、万物に宿る宇宙的なるものを読み込み、あらゆるものが宇宙的円環の中にあると確信する原初的宗教感情を明るみに出してきたのである。このことは、その著『宗教学概論』から『世界宗教史』まで、一貫して変わっていない。

エリアーデは、解釈という行為も一つの文化価値の創造だとみている。解釈者は、一つの文化を、それの生きた源泉に身を置いて、その意味を再解釈するが、その再解釈そのものが、同時に、新しい文化の創造であると考える。さらに、解釈学は、当の解釈される対象が生きて体験されていた時にはまだとらえられていなかった意味をも開示するから、それは、人間をも変える力をもつと言う。したがって、過去の現象の解釈は、単に過去の解釈にとどまらず、直接、現代的意味をもつ。エリアーデの解釈学的比較宗教学は、そのよ

うな深い意味をもっている。

本書も、古代世界の神話と儀礼を素材にして、〈宗教とは何か〉ということについて解明しようとしているが、その方法は、エリアーデとともに、解釈学的方法に則っている。本書は、エリアーデの業績も参考にしながら、古代世界の神話と儀礼の解釈を通して、今日のわれわれの心の奥底にもなお残っている原初的な宗教感情を浮き彫りにし、自分なりに宗教の本質について考察しようとしたものである。したがって、本書は、宗教の単なる起源を探究しようとするのでもなく、何かある独断的な仮説を立てようとするのでもない。むしろ、本書の意図は、神話や儀礼など様々な象徴によって表わされている宗教的表現の中に、人々がもっていた原初的な宗教感情を読み込み、その意味を解釈することに向けられている。

この原初的な宗教感情は、ここでは、大いなるものへの畏怖と帰一の感情、宇宙の大なる生命への畏怖と帰一の感情にみられている。本書は、原始世界や古代世界の儀礼や神話の解釈を通して、一貫して、そのような原初的宗教感情を読み出そうとするものである。宗教は、宇宙生命への畏怖の感情に始まり、宇宙生命への帰一の感情によって完結する。この時、人間は大宇宙を映す小宇宙となる。本書では、原始宗教や古代宗教の原初に帰ることによって、そこに潜むこのような宇宙論的宗教感情が取り出されてくる。宇宙論的宗教感情は、宗教というものの最も古い層を形成しているとともに、古代宗教から高度宗教を経て現代の宗教にまで一貫して流れる感情でもある。それは、あらゆる宗教に共通する原初的感情である。

そのような宗教の一貫して変わらない本質を理解することは、宗教そのものさえ世俗化し多くの疑似宗教がはびこる現代においてこそ、意味をもつ。それは、現代というこの世俗文明を深いところで包み越える方向をも指差している。現代の対極にある古代世界や原始世界に帰って、その原初的世界観を探ることは、同時に、また、現代を永遠の世界へと包み越えていくことにもなるのである。

Ⅰ　大いなるものへの畏怖

1　大自然への畏怖

大自然、この大いなるもの

人間が人間として大地に立った時、われらの祖先の視界に開けてきたものは、頭上遙か高くに広がる天空と、遠い地平線にまで続く広大な大地であっただろう。天空には、輝く太陽があり、夜空を照らす月があり、瞬く星があった。そして、天空は、一陣の風とともに雲に覆われ、やがて雷のとどろきとともに、大地に雨を降らせた。また、この大地には、草や木が繁茂し、動物たちが蠢き、何より、自分たちを保護してくれる洞窟があった。しかも、大地に屹立する山々は、遠く天空にまでつながっていた。

これら天地に宿る自然万物は、偉大な力をもち、その偉大な力によって人間に豊かな恵みを授けてくれると同時に、恐ろしい猛威も振るった。この大自然の力の前で、人間は無力であった。人間は、ただ、大自然の偉大な力に従う以外になかった。自然の力は人間の力を越え、計り知れない神秘なものであった。人々は、この大いなる自然の力を恐れ、大自然の人智を越えた力に、無限の畏怖の念を懐いた。

この大いなるものへの畏怖の念こそ、宗教の出発点であった。人々が、この畏怖の念から、大いなる力をもった自然を、偉大な生命力をもったものとして崇拝したのも不思議ではない。人々は、天空、太陽、月、星、雷、風、大地、草、木、土、石、海、山、洞窟、水、火など、自然のすべてのものに宿る大いなる生命力の中に神的なものを見、その中に生きていたのである。

天と崇高なもの

原初の人間が、大いなるものへの畏怖の中で、頭上に限りなく広がる天空に見たものは、何よりも崇高さであった。無限に高いものは、人間を越える偉大な力をもつと想像された。原初の人間は、この〈いと高きもの〉を仰いで、人間を越える崇高な力に畏怖の念を懐いた。それは、最も原初的な宗教感情の一つであった。天空は、無限性と超越性、至上性と永遠性の象徴であった。人間は、この崇高なものの中に神を見たのである。

天空は、また、認識をも意味した。太陽の輝く明るい空や、月や星の輝く夜空の中に、原初の人々は、認識の象徴を見、やがて、そこに、すべてを知る至高神を見た。

天空神が、その後、天上の主権者となり、宇宙の秩序の守護者となり、地上の法や契約の制定者となっていったのは、天空神が認識の象徴だったからである。

さらに、天空の神は、大地に雨を降らせ、植物や穀物を育てる繁殖者、生殖者ともなっていく。したがって、それらは、多くの場合、天父としてイメージされた。天上には、この天父神とともに、多くの神々が住むと考えられるようになったのである。

シュメールのアヌやエンリル、古代インドのディアウスやヴァルナ、古代ユダヤのヤハウェ、古代ギリシアのウラノスやゼウス、古代ペルシアのアフラ・マズダ、古代ローマのユピテルなど、古代世界で活躍する多くの天空の至高神が、至上性、全知、主権者、生殖者などを表わしたのは、原初において感得された天空の崇高さと偉大な力からの発展形態であった。

この天空に輝く太陽は、原初の人間にとって、世界を明るくし、生きとし生けるものの命を養う生命力の源泉と観念された。太陽は、認識と生命力の象徴であった。太陽は、月とともに、天空神の息子であり、天空神の眼であり、地上のあらゆる生物を生かす無限の力をもった神として尊ばれた。しかも、この太陽神は、やがて天空神にとって代わって、天空の最高存在者となっていく。さらに、人間社会の発展とともに、共同社会の統率者自身、しばしば太陽神の子として崇拝されるようになっていった。古代エジプトをはじめ、アフリカ、太洋州、日本、古代メキシコ、古代ペルーなどで発達した様々の太陽信仰は、原初の太陽崇拝の発展していったものであった。

月も、天空の眼として、夜を照らし、夜を支配した。特に、月は、時を測定して人に知らせ、月月の区切りを教えた。また、月の満ち欠けは、死と再生を表わし、生命の永遠を表わした。人々は、月の満ち欠けを通して、死が最終的なものでなく、新たな生の始まりだということを知ったのである。この月に対する信仰は、農耕の発見よりも遙か以前の後期旧石器時代のオーリニャック期（およそ三万年前）からすでにあったと言われている。この頃から、人々は、すでに、月のサイクルを利用して、日月を骨などに刻んでいたのである。

雷も、天空の怒り、あるいは意志の表現として、太古以来恐れられた。だが、それは、また、雨を降らせ、大地を潤し、草や木の生育を助けたため、大地を孕ませる繁殖者ともみられた。暴風も、雷と同様、天空の怒りとして恐れられたが、これも、また、雨をもたらし、地上の生物の繁殖を約束したから、豊穣神としても崇拝された。古代エジプトのミン、古代インドのパルジャニアやインドラ、古代パレスチナのバール、古代ゲルマンのトール、ケルトのタラニスをはじめ、天空神は、一般に、雷神や暴風神の性格をもつに至る。

雷や暴風に伴う雨も、大量の水をもたらし、人間の命を養い、動植物を育てる偉大な力をもっていたから、偉大な霊力をもつものとして崇拝された。暴風が吹き、雷が鳴ると、雨が降り、地上は豊富な水に満たされ、生き物は育った。雨によってもたらされる水は、生命を芽生えさせる力をもち、永遠の生命の象徴となった。さらに、そ

れは、あらゆるものの源を表わし、天地創造以前の混沌をも象徴するようになったのである。

大地と産出力

原初の人間が目前に広がる広大な大地に見たものは、何よりも、植物や動物を育む無尽蔵な産出力であったであろう。大地は、この無限の産出力ゆえに崇拝された。大地は、植物、動物、人間、すべての生きとし生けるものを生み出す限りない力であった。大地のもとで、植物、動物、人間は、一つの生命の糸によって結ばれていた。

なるほど、母なる大地という観念が確立するのは、それほど古くに遡ることはできないともみられている。しかし、原初の人間が大地の産出力と女性の産出力を結びつけて、大地を母としてイメージしたのは、その萌芽にまで辿って行けば、後期旧石器時代までは遡ることができるであろう。後期旧石器時代の層から盛んに出土する石や骨や象牙に刻まれた女性の小像は、差し当たり、多産への信仰を表現するものであろうが、それが土の中に埋められているところをみれば、すでに、それは、大地の産出力の信仰と結びついていたと思われる。これらの女性の小像は、胸や腹や尻や性的な部分を特に強調した裸の女性像で、しばしば妊娠した形をとっている。

この女性小像の出土は、新石器時代になれば、ますます増加してくる。この時代の女性小像には、スカートをはいていたり、ベールをかぶっていたり、胸をはだけていたり、胸を押さえていたり、腕を上げ何かを礼拝している形をしていたり、しゃがんでいたり、様々な形のものが見られるが、これらは、何らかの宗教的儀礼を表現したものであろう。しかも、これは、この時代の女性の役割の大きさと女性の優越性を表わすものと考えられる。この時代には、すでに各地で農耕が開始されていたから、大地の女神は、次第に、栽培植物の豊穣を約束する地母神に変わっていった。母なる大地という観念は、おそらく、このころ確立したと思われる。この時代の層から出土する女性像は、この母なる大地の信仰と何らかの形で結びついたものであろう。

この母なる大地への信仰は、青銅器時代でも、大地が鉱物を生み出す母胎と考えられることによって、より深まった。金属の鉱石は、母なる大地の子宮の中で生長する胎児と考えられたのである。その後、鉄器の生産が始まり、農業生産も大規模化してくると、大地の女神への信仰はますます盛んになる。農耕による収穫を得るには、何よりも大地の生産力に頼らざるをえなかったからである。この時代も、大地の偉大な生産力と女性の生殖力が深く結びつき、女性の役割が高く評価された。大地女神が次第に穀母の性格をもつようになっていったのも、この時代である。シュメールのイナンナ、古代バビロニアのイシュタル、古代エジプトのイシス、古代ギリシアのデメテルやペルセポネ、古代インドのプリティヴィーなどは、そのような農耕時代に広く信仰された大地女神であった。

しかし、大地女神への信仰は、大規模な農業が興ってから急に出てきたものではな

く、それ以前の新石器時代、さらに旧石器時代から徐々に発展してきたものである。それは、何より、狩猟採集時代の大地への畏怖の念から出発したものなのである。

この大地に生い立つ草や木にも、原初の人々は、永遠の生命を見て、これを畏敬した。植物は、大地から生え出て生長し、枯れてもまた次の世代の芽を出し、大地に根を張って、その長い生命を維持する。大地から生まれ出てきたものは大地に帰るが、再び大地から生まれ出てもくる。人々は、草や木を通しても、死が最終的なものではなく、新しい生の始まりであることを知ったのである。そればかりか、宇宙そのものが死と再生を繰り返す巨大な生命体であることを、絶えず再生してくる植物の生命力を通して、象徴的に理解した。

大地を這い、大地にねぐらをつくり、子を育てる動物たちにも、原初の人々は神秘な霊力を感じ、これを畏敬した。動物には、大自然から神秘な力が授けられていると考えられていたのである。また、動物と人間の魂は入れ替わることができ、動物と人間の間に生命の深い連帯があるとも信じられていた。特に、旧石器時代以来、狩猟によって自分たちの生命を養っていた人間は、動物と動物の繁殖を助ける大地に対して、深い畏敬の念をもっていた。

動物供犠が行なわれ、その頭骨の保存儀礼などが行なわれたのは、その畏怖の念の表現であった。事実、中期旧石器時代のムスティエ期（七万年前～三万五〇〇〇年前）に属する多くの洞窟の中から動物の骨片が発見されたことは、この時代に何らかの動物供犠や動物の骨片の埋納習慣があったことを推測させる。この時代に、人々が野獣に対してある種の敬意を払っていたことは確かである。狩猟民にとって、動物は神であった。このことは、その後、人間が動物の飼育を始めてからも続いた。新石器時代から農耕牧畜時代に至る動物崇拝や動物供犠の多くの儀礼は、動物の霊力や大自然の大いなる力に対する旧石器時代以来の畏怖の念から発展したものであった。

大地の岩陰にある洞窟、これは、原初の人間にとって、何よりも、自分たちを保護してくれる大地の家であった。洞窟は大地の子宮であり、人々は、この大地の子宮に守られ、大地の子として生活していた。特に、洞窟の奥深くは、聖なる場所であり、永遠の生命の象徴であった。

後期旧石器時代の洞窟遺跡に見られる動物や狩りの様子などを描いたおびただしい数の彩色画や線刻画、彫刻は、必ずしも特定の状況だけに対応するものではなく、ものの遊びや何らかの記録のために描かれたものから、深い宗教的な意味をもったものまで、様々であっただろう。そこに描かれているものは、ビゾンや猪、馬や鹿、熊、動物の仮面を被った人間などである。だが、これらが、しばしば、洞窟の奥深くの狭い壁面に描かれているところをみれば、それが何らかの宗教的意味をもっていたことは疑いえない。洞窟そのものが大地の子宮を意味していたとすれば、そこに描かれている動物たちは、おそらく、生産儀礼のために描かれたものであろうと思われる。人々

は、狩りの獲物の多いこと、動物たちが多く生まれ出てくることを、偉大な大地の力に祈ったのであろう。

洞窟は、また、死者の埋葬にも使われたが、これも、洞窟が永遠の生命の象徴だったからである。死者は、洞窟の穴から、その通路を通って母なる大地の胎内に安らぎ、祖霊として永遠の眠りにつく。だが、洞窟は、同時に、そこから母なる大地の霊力が噴出してくる通路でもあったから、洞窟は、死者が再生してくる出口でもあり、生命力の泉とも考えられた。洞窟において生と死は一つであった。

クレタ島のよく知られたクノッソスの迷宮も、旧石器時代以来の洞窟の模倣であった。迷路に入ることは、冥界へ下降し、死して再生してくることを意味した。子供が洞窟から生まれてくるという世界各地に残っている伝承も、洞窟が、無尽蔵な生産力をもった地母神の子宮と考えられていたからである。女性が近づくと妊娠する洞窟とか、子のない女性が子宝に恵まれるために願い事をする洞窟が、聖地として各地に残っているのも、旧石器時代以来の遠い記憶を伝えている。

原初の人々は、石にも大いなる生命を見て、これを畏敬した。特に、巨石は、大地の女神の象徴であり、生命の永遠を表わした。新石器時代のヨーロッパに残された巨石文化も、大地の象徴としての石への畏敬に根差している。数多く残されているドルメン（支石墓）は、正確に言えば墳墓であり、ここで葬送儀礼が行なわれ、数世代にわたって同じ氏族が葬られた。ドルメンの内側にしばしば描かれている人物や出土する肖像は、祖先の霊を表わすものであろう。そして、メンヒル（立石）は、祖霊の身体を象徴する。そこに、祖霊の永遠の生命が宿ると考えられたのである。巨石は、永遠不滅の象徴であった。人間が石から生まれてくるという神話や、安産を約束する石に対する信仰は、母なる大地の生産力が石に集中して現われるという古い記憶に発している。

一般に、大地と大地から生まれくるもの、および大地に存在するものに、原初の人々が見たものは、永遠の生命、再生、そして豊穣という観念であった。大地に生い立つ植物や動物、大地に存在する洞窟や巨石、いずれも、永遠の再生、永遠の生命を象徴した。また、それらを生み出す大地自身も、女性や母と同一視され、永遠の生命と豊穣性を象徴した。それは、旧石器時代以来、新石器時代、農耕牧畜時代を通じて続けられた死者祭祀や豊穣祭祀によって持続された観念であった。大地は、死者がそこへ帰り行き、再生してくる場であり、植物や動物が無尽蔵に生み出されてくる生命の源だと考えられ、畏敬されたのである。

天と地

だが、大地がその豊穣な生命力を発揮するにも、それを引き出す働きが必要であった。天は、その働きをすると考えられた。天から降り注ぐ雨は、大地を潤し、大地の生殖機能を引き出すとみられた。天父と地母の結婚という観念が生まれたのは、この

ような考えからである。

天父と地母の聖なる結婚という観念が生まれたのは、いつのころであったか、定かではない。この観念は、農耕が始まってから特に盛んになった考えではあるが、その源泉は、それ以前にまで遡ると思われる。人類の原初的観念には、万物が生まれ出てくるには、天地が分かれる以前の宇宙の偉大な生命力が必要だという観念があった。この天地の未分の状態を、原初の人は、天父と地母の聖婚という観念に求めたのである。天地の聖婚は、天地未分の宇宙の根源的生命力にあずかることを意味し、宇宙の根源への回帰を表わす。この根源的生命への合一の感情、宇宙感情こそ、人類が人類として誕生した時以来懐かれ続けてきた感情であり、大いなるものへの畏怖から出発した宗教感情の帰り行くところでもあった。あらゆる宗教は、大いなるものへの畏怖と大いなるものへの帰一の感情にその源をもつ。

人間が人間として大地に立った時以来、人間は、天にあるもの、天から与えられるものに、崇高なるもの、神聖なるものを感得し、大地と大地から生まれくるもの、大地に存在するものに、永遠の生命と豊穣性を感得し、これを畏敬した。天と地が生み出すあらゆる自然物に大いなる力と生命を見、これを畏敬した原初の人々は、天と地の間に立って、その大いなるものへの畏怖の情の中で、人たりえたのである。

2　死の自覚

死の自覚と宗教感情

自然への畏怖とともに、死の自覚は、宗教感情の発生にとって大きな意味をもっていた。原初の人々が、親や子や仲間の死を前にして、その不可解さを自覚した時、宗教感情は、より深い陰影を帯びながら、大きく飛躍した。

人は、死に近づくと、意識は失われ、苦しげな呼吸を繰り返し、やがて心臓の鼓動が間欠的になり、ついに止まる。死が確定すると、死者の体温は急速に下がり、死後硬直が始まり、やがて腐敗が始まる。放置しておけば、その腐乱した屍体を、鳥や獣や虫が食い散らし、蛆がわき、数ヶ月で白骨化する。その白骨さえ、長い時間では風化し、跡形すらもとどめなくなる。人の死は不気味である。

死、つまり、生きていた者がいなくなるということ、存在していた者が存在しなくなるということ、このことは、原初の人間にとって、極めて不可解なものとして永遠の問題を投げかけた。人はなぜ死ぬのか。人はどこから来て、どこへ去るのであろうか。死後の世界は果たしてあるのであろうか。昔も問われ、今も問われ、なお答えられないこの永遠の問いは、人間が人間として大地に立った時以来の問いであった。と同時に、この死の自覚とともに、世界もまた巨大な問いと化した。この世界はどこから来て、いかにして存在するに至ったのであろうか。自らの死を自覚するということ

は、同時に、自分自身を超える大いなるものを自覚することであった。宗教は、人類誕生以来、これら、人間の死と世界の存在についての問いに、多くの神話や儀礼を通して答えてきた。宗教というものの大きな出発点が、この死の問題であった。

しかも、人間にとって死は不可避の現実であった。誰もが必ず死なねばならない運命にあり、誰も死を避けることはできない。死は確実に到来する。この避けることのできない死の自覚が、また、見えない世界への思いを掻き立てた。それでいて、死はいつ訪れるか知ることができない。死はしばしば偶然にやってくる。この死の確実性と偶然性から、すべての虚しさが自覚されてくる。死はすべてを無にする。この世に生まれ出た者は、すべて死すべき定めにあり、すべては無常である。この人生のはかなさの自覚も、また、見えない世界への想念を呼び起こしたであろう。

埋葬の意味

埋葬という行為は、死の自覚の表現である。死後の世界という観念も、埋葬という行為によって表現される。人間は、意味世界に生き、その意味世界を行為によって表現する存在である。埋葬という儀礼が始まった時、人間は死の明確な自覚に達したと言える。

手厚い埋葬の習慣があったことが確認されるのは、後期旧石器時代のネアンデルタール人においてであった。よく知られているように、イラクのシャニダール遺跡で、体を曲げた状態で埋葬された人骨のまわりに大量の花粉が発見されたことは、この時代に、死者を花束とともに手厚く埋葬する習慣のあったことを推測させる。この時代のネアンデルタール人は、すでに、死者への哀悼と尊敬の感情、さらに、目に見えない世界に対する関心をもっていたと言えよう。また、目に見えない世界へ旅立った死者と、目に見える世界に生存している生者との間に、なお深い関係を持続していこうとしていたとも言えよう。ここに、最も原初的な宗教の萌芽が見られる。

後期旧石器時代には、すでに、死者に石の枕をさせて埋葬したり、死者を貝殻の上に乗せて埋葬したりした跡が見られる。この厚葬の習慣は、明らかに、死者への哀悼や尊敬の感情を表わしている。さらに、これは、目に見えない死後の世界に対する観念も生まれつつあったことを推量させる。

必ずしも一般的ではないが、死者を種々の副葬品とともに埋葬する習慣も、すでに、後期旧石器時代から見られる。動物の骨や貝殻、山羊の角、牙製のビーズや装身具、石器などを伴った埋葬例は多く見られる。その中には、血と生命の象徴と思われる赭土（赤土）を装身具に塗った埋葬例もあり、死者に赤色オーカー（黄土）を振りまいて埋葬した例もある。これらのことを考えれば、すでに、後期旧石器時代に、死者への哀悼や尊敬の感情ばかりでなく、死者が旅立って永遠に生活する〈死後の世界〉の観念があったことが予想される。

死者が埋葬される場所も多様であるが、死者が住居としていた洞窟や家屋の炉の下に死者を埋葬する例も、後期旧石器時代以来、新石器時代後期まで、長い間行なわれてきている。ここには、すでに、死者の霊という観念が見られるとともに、生者は常に死者の霊と共に暮らし、深い関係を結んでいたことが推測される。生者は、死者の霊に守られて生きていたのである。ここでは、死者の住むあの世とこの世の間に、明確な境界はない。

死者が埋葬される姿勢も、旧石器時代以来様々で、伸展葬もあれば、屈葬もある。だが、このうち、腕を胸に組み膝を曲げてうずくまった姿勢での埋葬、屈葬の習慣は、旧石器時代から新石器時代までの長い期間、各地に見られる。

この屈葬の意味をどう解釈するかは、よく知られているように、相反する二つの解釈があって、断定できない。一方の考えでは、死者の霊がこの世に戻ってきて、生者に危害を加えないように、体を折り曲げて埋葬したのだと考える。確かに、屈葬に付された遺骸がしばしば縄や紐でくくられていたり、胸や腹に大きな石を乗せられていたりするのがあるのを見れば、この死霊恐怖説も否定することはできない。しかし、たとえそうであったとしても、この場合でも、すでに死者の霊魂という観念があり、それへの畏怖の感情があったことにはなる。それは、人間を越える大いなる力への畏怖の感情、つまり宗教感情の現われには違いないのである。

他方、よく知られているように、この屈葬は、大地のもとに胎児の姿勢をとらせて埋葬したのだという説もある。意図的に死者に胎児の姿勢をとらせた埋葬例は、数多く知られているからである。もしもそうだとすれば、ここでは、死者は、母なる大地の子宮に戻って、再びいつの日か再生してくるという観念があったことになる。なるほど、大地に支えられた生命の永遠という観念、つまり、大地のもとでの死と再生という観念は、一般に、農耕文化、それもかなり高度な穀物栽培が普及してからの観念だと言われている。しかし、そのような大地への信仰の萌芽が、それ以前の狩猟採集時代に全くなかったとは断言できないであろう。狩猟採集時代にも、豊富な木の実や豊かな獲物は、ただひたすら大地の恵みによってのみ与えられたからである。死者がこの恵み豊かな大地のもとに帰って行き、そして再び植物や動物のように生まれ変わってくるという観念が生じるのに、それほど長い期間を要したとは思われない。

一般に、原初の人々にとって、死は、相反する二重の感情によって受け止められている。死は、原初の人間にとって、恐怖の対象であるとともに、また、深い哀惜の対象でもあった。人々は、死者を恐れ避けようとすると同時に、この上もなく悼み哀しんだ。死霊の祟りをことのほか恐れるとともに、同時に、死者との絆をいつまでも保っておきたいと念願したのである。屈葬という長い間続けられた習慣の相反する二重の意味の起源は、おそらく、原初の人々の死に対する二重感情にあるであろう。どちらにしても、そこには、目に見えない大いなる世界への畏怖の感情がある。宗教感情は、この大いなるものへの畏怖から出てくるものであった。

死者の霊という観念

死者の遺骸を、埋葬なり風葬なりで処理した後、頭骨などを再び取り出し、これを祀る習慣は、中石器時代には、世界各地ですでに見られた。この複葬の風習は、その後もますます盛んになり、新石器時代はもちろんのこと、古代社会でも、近代社会でも行なわれていた。この複葬には、死後の世界という観念はもちろんのこと、死が魂と肉体の分離に他ならないという考えがすでにある。一次葬は、いわば死者の肉体を大地や天空など、大いなるものへ帰す儀礼であり、二次葬は、死者の肉体の一部を保存するとともに、霊魂を安置し、その供養をしようとするものである。保存される骨は、霊魂の象徴という意味ももっている。ここには、人間存在は肉体と霊魂の合体したものであり、死はその分離であり、肉体は滅んでも霊魂は不滅であるという考えがある。古代世界では、生はこの世だけで終わるのではなく、肉体から離れた霊魂は死後も永遠に生きると考えられていたが、この観念の萌芽は、すでに中石器時代には生まれていたことになる。

火葬の風習が始まったのは、新石器時代後期と言われ、青銅器時代には広く普及したと言われるが、ここでも、死体を火葬に付してから後、もう一度骨を埋葬する習慣が見られた。これも複葬の一種であり、死者の肉体の一部を保存するとともに、その霊魂を祀るものである。ここにも肉体と霊魂の分離という考えがある。

この複葬の習慣とも深く連関するが、頭骨の保存とその崇拝の習慣も、相当古くまで遡ることができる。頭骨のみが孤立して発見される例は、旧石器時代を通じて見られる。特に、後期旧石器時代からは、頭骨に装飾や加工がなされているものが見出され、これは、中・新石器時代になると、より盛んになる。これらの頭骨は、住居内または居住区内の特定の場所に祀られ、崇拝された。頭骨は、死者の肉体の一部とも考えられるが、同時に、また、死者の霊魂の象徴とも考えることができる。死者の霊は、頭骨の祭場にいて、家族や村の生者をいつまでも見守ってくれるものと考えられていたのである。ここには、すでに祖霊という考えが出てきている。

祖先の霊という観念がいつごろ発生したのかははっきりしない。だが、もしも、後期旧石器時代の洞窟壁画に描かれている屋舎型と言われる家屋の形をした図形が、普通解釈されているように、祖霊の住みかとみることができるとすれば、祖先の霊という観念は、少なくとも後期旧石器時代にはあったことになる。祖先の霊の崇拝は、このあたりを出発点にして、中石器時代には支配的になり、新石器時代になるとますます盛んになる。新石器時代には、死体の埋葬や副葬品の埋納や頭骨の保存ばかりでなく、死者の安定した住居の保障という観念が現われてくる。そのため、死者は、家型や舟型をした石室や石棺に収められ、巨大なドルメンや石塚など巨石墳墓が盛んに作られたのである。これらの石室や石棺や墳墓は、祖霊の館であり、住みかとみられた。死者の肉体は滅んでも、その霊は、祖霊となって永遠に存続するものと考えられ、そ

れに対する礼拝や儀礼が組織的に行なわれるようになったのである。

宗教は、大いなるものへの畏怖から出発した。この宗教感情の発生にとって、死の自覚は大きな意味をもっていた。原初の人は、死を恐れ、死霊を恐れたが、この恐怖の感情にも、目に見えない偉大な力への畏怖の感情が現われている。そして、人は、埋葬という行為によって、人間の死が大いなるものへの帰一に他ならないことを表現した。人間の死は、大自然の懐（ふところ）に帰ることであった。大いなるものへの畏怖と帰一の感情、宇宙生命への畏怖と帰一の感情こそ、宗教独自の感情である。死に対する恐怖と哀惜という原初の人がもった二重感情も、この宗教独自の感情から出てくる。

人間は、宇宙の大いなる根源から来て、宇宙の大いなる根源へ帰る。死とは宇宙生命への帰一に他ならない。大いなるものへの帰還、それが死である。人間が人間として大地に立った時以来、人間の魂の中に胚胎してきた死の自覚は様々な死の儀礼となって表現されてきたが、それらは、死が大いなるものへの帰一、宇宙生命への帰一に他ならないことを語ってきたように思われる。

3　原始宗教

アニミズム

原始宗教という言葉は、今日では、未開社会の宗教を意味するようになってしまったようであるが、言葉の本来の意味に戻って、そこに先史時代の宗教をも含めて考えるとすれば、この原始宗教の諸概念に、あらゆる宗教の出発点を見ることができるであろう。

原始宗教の本質は、アニミズムだと言われる。アニミズムとは、人間ばかりでなく、動物や植物、さらに無生物に至るまで、それぞれがそれぞれの霊魂をもち、作用を及ぼしていると考える考え方である。しかも、霊魂は、そのものと離れても存在することができ、それ自身死滅することはないとされる。今日の未開社会の人々はもちろん、太古の先史時代の人々も、この世のあらゆるものに精妙な霊力が宿っていると感じていた。太陽や月や星、雷や風や雨、水や火、山や川、海、森や木、動物や植物、石や洞窟、さらに弓矢などの道具にまで霊魂が宿っていると感じ、これを畏敬したのである。

よく知られているように、タイラーは、十九世紀末に、あらゆる宗教は霊魂崇拝に由来しているとして、この信仰を、霊魂を意味するラテン語のアニマ（anima）という言葉から、アニミズム（animism）と名づけた。タイラーによれば、動物も植物も無生物もあらゆるものが生きているという考えが原始時代の人類の考え方であった。しかも、万物が生きているのは、霊魂をもつからであり、その霊魂はそのものから離れ

ても存在できるという考えから、精霊の観念が生じた。さらに、その精霊の観念から多神教の神々の観念が生まれ、この多神教から一神教へ、人類の宗教観念は進化してきたとみたのである。[1] そこには、その当時の思潮を反映して、かなり単純な進化主義が見られる。

この単純な進化主義は、二十世紀に至って乗り越えられ、今では、タイラーの説をそのまま採用することはできない。しかし、それでもなお、タイラーが、宗教を〈霊的存在への信念〉と定義し、アニミズムは原始人の世界観、人生観を形づくったものであり、それは原始人の中にあるばかりでなく、その後のより高度な宗教の中にも潜んでいると見た点は、評価することができるであろう。タイラーは、アニミズムを、宗教の起源と考えるばかりでなく、宗教そのものとみて、あらゆる宗教の土台に据えたのである。

タイラーは、アニミズムの本質に生命原理を見ていた。万物が生きており、生命をもっているとする考え方が、アニミズムの基本にあると考えていた。この万物に宿る生命力の表現がアニマであり、原始人は、これを霊魂と呼んだのである。

今日の未開人にしても、先史時代の人々にしても、いずれも、万物にことごとく生命力が宿っていると感じ、この横溢する生命力を霊魂と呼び、それが種々の働きをすると考えていたのである。そして、その万物に宿る生命力、霊魂は、正しく対処すれば、恩恵を与え、守護してくれるが、正しく扱わないと、逆に、災いをもたらし、祟ると考えた。そのため、人々は、災厄を避け、恩恵を得るために、種々の儀礼を行なったのである。そこには、この世の森羅万象すべてにあまねく生命力が宿っているという考えがあり、その生命力への深い畏怖の念がある。個々別々のあらゆるものに宇宙の生命力は宿り、この生命力は宇宙の根源的生命力に通じている。アニミズムも、また、大いなるものへの畏怖、他ならぬ宇宙生命への畏怖の感情から出てきているのである。

プレアニミズム

タイラーは、アニミズムを、あらゆるものに生命が宿ると考える信仰と定義したり、あるいは、霊的存在つまり精霊に対する信仰と定義したりしている。この二つの定義は、正確に言えば、異なった面をもつ。一方は、精霊信仰が出てくる以前の活力に注目しており、他方は、その活力から出てきて独立した存在となった精霊に注目をしているからである。タイラーにおいては、この二つの理解は、必ずしも区別されてはいなかった。もちろん、未開社会にしても、先史時代にしても、両者がはっきりと区別されていたわけではないから、区別しない方がむしろ実態に近いのかもしれない。

タイラーの中にあった活力説と精霊説の二面を区別し、活力説の方に重きをおいて、

これをアニマティズムと呼んだのは、マレットであった。アニマティズムは、あらゆるものが生きているという感覚の方を重んずるが、それは、何らかの形で、万物に宿る力を前提している。

メラネシア人が、自然や人間において異常な出来事や行為を起こさせる力をマナと呼んで、これを畏怖していたのも、万物に宿る力への信仰からくる。このマナは、多くの精霊や霊魂の中に宿り、半ば人格的で、半ば非人格的な力である。その力は、物理的な力とは全く異なった潜勢力であり、よい方向にも、悪い方向にも働く。それは、事物から取り去ったり付け加えたりすることができ、他のものに伝染することもある。霊力とか霊威と言われるものに当たるのが、マナである。われわれの通常の感覚ではつかみえない神秘的力があらゆるものに内在すると考えるのが、マナイズムである。マレットの言うアニマティズムは、このマナイズムをひな型にして取り出されてきた。

もっとも、そのような神秘的な力だけでは十分ではなく、それに対する畏怖の感情が伴わなければ、マナイズムも、アニマティズムも、そして宗教一般も成立しない。マナとは、異常なもの、怪異なもの、不思議なものに対する驚異の感情、畏怖の感情を観念化したものである。何事につけ、偉大なもの、力強いものに畏怖を感ずるところに、宗教が発生する。宗教は、すぐれて情緒的な反応である。そこには、世界と万物の存在に対する驚きの感情があると言わねばならない。

いわゆるタブー（禁忌）は、大いなるもの、神秘なものへの畏怖の感情の消極的な現われである。大いなるもの、神秘なものは、それ自身力をもっているために、また、タブー視される。例えば、新しい生命の誕生、病気、死、死者、妊婦、王、神聖な場所など、神秘なもの、異常なもの、異例なもの、不吉なもの、未知のもの、さらに、それに接触した者には、ある種の力が宿っており、それは避けられねばならないと考えられたのである。

霊魂観念以前の〈力〉に宗教の本質を見るプレアニミズムには、マナイズムやアニマティズムばかりでなく、物事に宿る生命力を強調するヴァイタリズム、神秘的・超自然的な呪力に宗教の成立を見るディナミズム、自然の威力に重きをおくナチュリズムなど、様々な立場があるが、どれも、ある種の神秘的力への畏怖の念を宗教の本質にみている。このようなプレアニミズムが、先史時代の人々の宗教感情の中にあったかどうかは、資料の制限もあって定かではないが、われわれは、一応、未開社会の事例から、それを推測する以外にないであろう。

宗教は、万物に宿る偉大な力、大いなるものへの畏怖から出発する。万物に宿る宇宙の不思議な力への畏怖こそ、宗教の本質なのである。

呪　術

未開社会で広く行なわれている呪術は、何らかの目的のために、神や精霊や呪物な

どの力を借りて種々の現象を起こさせようとする行為である。この呪術も、万物に宿る大いなる力への信仰に基づいている。それは、特定の呪物、現象、および状態に、物理的な力とは異なった神秘的な力、つまり呪力があると考える。マナイズムにおけるマナの観念も、その一つである。もちろん、この呪力は、多くの場合、全く別個に存在するのではなく、多かれ少なかれ、精霊や霊魂や神の観念と関係している。人々は、特定の人間や自然物や人工物に通常の力を越える偉大な力が宿っており、それが、災いをもたらしたり、恵みをもたらしたりすると考えたのである。そこで、その力を何らかの形で制御し、自分たちに幸福をもたらすよう特定の行為や儀礼を行なった。これが呪術に他ならない。

この呪術は、幼稚な考えのようにも思われるが、原始時代や未開社会から今日の文明社会に至るまで、根強く存在している人間の行動様式でもある。しかも、それが自然界の中に人智を越える大いなる力を感知しているかぎり、これも、宗教というものが出発する原初的な感情に基づいていると言える。

未開社会でも、古代社会でも、そして、おそらく先史時代にも行なわれていた呪術は、一般に、万物に宿る偉大な力を制御することのできる呪術師が、種々の儀礼的な行為を行なって、収穫の豊穣、天候の好転、戦闘の勝利、病気の治癒、さらに個人的な望みの成就などを約束しようとするものであった。

よく知られているように、フレーザーは、この呪術を、類感呪術と感染呪術に分類した。

類感呪術の方は、類似という原理に基づく呪術で、雨乞いのために水を振りまいたり太鼓をたたいたりする呪術などが、それに当たる。感染呪術の方は、離れているものでも、つながりがあれば、一方から他方に作用が及ぶという考えに基づくもので、例えば、他人を傷つける目的で、その人の髪の毛や爪などを焼く呪術が、それに当たる。呪術師は、自然の中に潜む力を、人間の目的に合わせてどのようにして制御するかを究めようとする人であり、間違った因果関係に基づいてはいるが、原始社会で一種の科学者に近い役割を果たしている者だと、フレーザーは考えた。したがって、フレーザーは、この呪術と宗教とを厳格に区別した。宗教は、精霊や神々や超自然的存在に対して、その力に帰依する態度に他ならないが、呪術の方は、逆に、この自然界に存在する偉大な力を、特殊な人間の行為によって利用し、そこから、人間にとって有利な現象を引き出そうとするものである。呪術は宗教の前段階をなし、呪術では無力であることを知った時、絶対的力に帰依する宗教が生まれたのだと、フレーザーは考えた。[3]

確かに、呪術は、超自然的な力を統御したり、操作したり、利用しようとするのに対して、宗教は、超自然的な力の前に跪拝（きはい）し、それに懇願し、依存する。この点では、呪術と宗教には、明確な違いがあるように思われる。しかし、呪術も宗教も、どちら

も、宇宙に存在する大いなる力への畏怖の念に基づいていることでは、共通している。また、実際にも、呪術と宗教は互いに入り組んでおり、それほど明確に区別できるものでもない。神々や精霊への崇拝の観念をもたない呪術の事例は、それほど多くあるわけではない。呪術的要素を含む宗教も、古代宗教にせよ、高度宗教にせよ、多く存在する。呪術も、大いなるものへの畏怖や畏敬、感嘆や驚異など、宗教的な原初感情に基づいている。呪術の起源も、単なる実用的なものではなく、儀礼的なものであり、宇宙の根源的な力への畏怖の念から出た宗教的なものにあったのだと言わねばならない。

また、マリノフスキーが主張したように、呪術は、恐怖や不安を取り除く役割を果たしている[4]。遠洋航海に伴う恐怖にせよ、旱魃による食料不足の恐怖にせよ、戦闘に伴う死の恐怖にせよ、病気による苦痛にせよ、それを起こす原因については、呪術によって何ら除去されないとしても、その恐怖や不安や苦痛を耐え、事態の好転を待つ上において、神々や精霊や宇宙の偉大な力を借りようとする呪術は、それなりに有効である。この点では、呪術はほとんど宗教的な意味をもっている。人間は、苦痛や恐怖に耐えることはできるが、意味のない苦痛や恐怖には耐えることができない。呪術は、この苦痛や恐怖に意味をもたせる働きをする。そして、その意味は、ただ、神々や精霊など、宇宙の偉大なるものによって与えられるのである。

呪術でしばしば用いられる呪物も、そのものゆえにではなく、そのものに宿っている力への崇拝から出てきている以上、すぐれて宗教的なものと言わねばならない。呪物は、呪術的儀礼においてのみ使用されるばかりでなく、そのような儀礼を伴わない場合もあれば、もっと高度な宗教儀礼において使われる場合もある。いずれの場合も、それは宇宙の偉大な力の象徴である。その力とつながろうとする願望が呪物崇拝（フェティシズム）である。これは、目に見えるものを通して目に見えないものを表象している以上、すぐれて宗教的な情緒から出てきているものである。呪物には力が宿り、精霊が宿り、神が宿ると考える呪物崇拝は、自然崇拝や祖先崇拝、精霊崇拝や多神教など、宗教的なものから峻別することは、ほとんど不可能である。未開社会や先史時代の人々が、例えば、死んだ祖先の骨を呪物として腰に下げていたとしても、そこには、現象として目に見えるもの以上に、大いなる力への畏怖の念に基づく宗教的世界観が潜んでいる。これを、未開なもの、野蛮なものとして退けることはできない。

先史時代の芸術

後期旧石器時代の洞窟壁画も、何らかの呪術的な意味をもっていたであろう。多くの壁画のうち、通常人が入ることのできない洞窟の奥深くの暗黒の空間に種々の動物たちが描かれているのを見れば、その絵は何らかの呪術的な意味をもっていたと考えねばならない。そこは聖なる場所だからである。特に、表現されているものの大部分

が食用になる動物であることを考えれば、それは、食用動物の数の増加や、食用動物の捕獲のしやすさや、捕獲量の多さを願って描かれたものであろう。

つまり、それらは、増殖呪術と狩猟呪術に関係していたであろう。しかも、それは、それらを描くことによって当のものに影響を与えることが出来ると考える類感呪術に属するものだったであろう。なかでも、いくつかの動物の塑像に穴が開けられていたり、描かれている動物の目や耳が慎重に除去されたものがあるのは、狩猟呪術をうかがわせる。また、壁画に描かれている動物が次々と重ねて描かれている点も、何らかの増殖呪術に連関していたであろう。さらに、雄の動物に追随された雌の妊娠した動物が描かれているのも、何らかの増殖呪術をうかがわせる。

現に、これらの多くの洞窟壁画の中には、数は少ないが、動物の毛皮と仮面をかぶった奇妙な人物像が描かれているものがあり、これは、一般に呪術師と呼ばれている。もちろん、何らかの精霊を表わしているのかもしれないとも言われているが、もしも、これが呪術師だとすれば、人間と動物との関係についての深い意識を表わす何らかの呪術的・宗教的なものを予想させる。この呪術師のもとで成年儀礼が行なわれていたとも言われている。

また、これらの洞窟壁画の中に見られる性的部分を強調した人間の女性の図式化された絵も、子供の増加や獲物の増加を願った増殖呪術に属すると思われる。女性は、いつの時代も産出力を表わし、豊穣多産の象徴であり、生命の源泉だからである。

それどころか、壁画の描かれている洞窟そのものが、宗教的な意味をもっている。洞窟は、旧石器時代人にとって、何より、自分たちを庇護する大地の子宮であった。さらに、洞窟内の奥深くや窪みも、子宮を表わしている。洞窟の中に描かれる動物は、いわば大地の子である。とすれば、洞窟内に描かれるものすべてが、多かれ少なかれ、豊穣や多産や増殖など、呪術的意味をもっていたとも言える。

後期旧石器時代の洞窟芸術には、当時の狩猟民の周囲の世界についての想念が描かれており、何らかの形で当時の狩猟民の願望を表現している。この時代に、洞窟の中で呪術的儀礼が行なわれていたことは、否定することはできない。そして、この呪術的儀礼が宇宙の大いなる力への畏怖の念から出た宗教的儀礼であることも、否定できない。

4　宗教とはなにか

人間存在と宗教感情

人間が人間として大地に立ったその時から、人間は、世界の中に組み込まれたあり方から離脱し、世界の中にありながら、世界の外に立つことになった。そして、人間は、世界を、自己自身の外なるものとして認識すると同時に、自己自身を、世界の外

なるものとして認識した。人間が世界から開かれるとともに、世界が人間に開かれたのである。

しかし、世界から開かれ、世界が開かれてあるということは、人間に大きな不安をもたらした。人間が人間として大地に立った時、何よりも先に迫ってきたものは、大自然の力に対する自己の無力と不安であった。世界に開かれた人間は、世界に不安定な状態で差しかけられたままであった。この時、人間は、自己自身の存在の根拠の不確かさを自覚した。世界と自己の分裂は、むしろ、人間存在の不安定性を露呈したのである。

かくて、人は問う。世界はどのようにして生まれてきたのか。人間はどこから来てどこへ行くのかと。人間は、世界の中にあるとともに、世界の外にあって、世界を問う者である。人間は、世界を自覚するとともに、その世界における自己自身を自覚した。この時、人間にとって、世界と自己は限りない謎として迫ってきた。世界は、人間の力の及ばない驚異であり、自己は、そこに根拠を失ったままで投げ出されていた。こうして、人間は、世界という大いなるものに深い畏怖の感情を懐くとともに、自己自身に対する深い不安を懐いたのである。このような場面の中で、宗教感情は生まれる。人間が世界の中における自己自身の状況を自覚した時、宗教は生まれる。人間による世界の自覚と自己自身の自覚、これが宗教の出発点である。

宗教が出発する原初の感情が、大いなるものへの畏怖に他ならぬとみられたのも、このことからくる。人間は、人間自身の力を超えた偉大な宇宙の力を恐れた。この畏怖の念は、原初の人間であればあるほど大きかった。彼らが、異常なもの、不思議なもの、災いをもたらすものを、特に恐れた背景には、宇宙に宿る偉大な力への無限の畏怖の念があった。大自然は、その偉大な力によって、人間に多くの恵みを与えるとともに、同時に、災いももたらした。人々は、この人智では計りがたい自然の力を、神秘なものとして畏れたのである。宗教的感情は、この大いなるものへの畏怖の念から一挙に出てくる。

しかも、この宗教感情は、人間が偉大な力をもった宇宙の中に属しているという感情によって完結する。大自然の偉大な力によって自己が生かされているという感情、自己と万物が一つの大いなる生命によって貫かれて、共に大いなるもののうちに生かされているという感情、それが宗教的感情の帰結である。宗教は、大いなるものへの畏怖の感情から出発し、大いなるものへの帰一の感情で完成する。

この大いなるものへの帰一の感情の中で、人間は再び世界と合一することができる。人間が世界の外に立ち、世界と自己が分離したところから、大いなるものへの畏怖も、自己自身への不安も起きてくる。しかし、大いなるものへの帰一の感情において、再び世界と自己は結びつき、自己の安定した場を得ることができる。互いに外にある世界と自己を大いなるもののうちで再び連関づけ、自己を支える根源的基盤を求めることこそ、宗教に他ならない。この時、人は、世界と自己の不安定性を突き抜けて、再

び世界と自己の安定した基盤を得ることができる。存在の根拠の不確かさの自覚を越えて、再びより深い存在の確かな根拠を見出すことができる。宗教の求めるところは、そのような確かな根拠である。

宗教の定義

「宗教」を意味するラテン語の **religio** という言葉のもとの意味は、超自然的な出来事に邂逅した人を襲う畏怖感、さらに、それに対処するために執り行われた儀礼を意味すると言われる。と同時に、その語源解釈の一つでは、宗教（**religio**）は「再結合」という意味をもつとも言われている。この解釈は、宗教の本質をよく表わしていると言える。宗教は、自己と世界の分離からくる畏怖の感情から出発して、大いなるものと深く結びつくことによって、この分離された自己と世界を再び結びつけるからである。しかも、それを、宗教は、儀礼という形でも表現する。

四世紀から五世紀にかけての古代ローマ最後の哲学者、アウグスティヌスが、宗教（**religio**）の意味を、〈再び結びつける〉（**religare**）という意味にとったラクタンティウスの説を採用して、宗教は、神に向かって探求を進め、自己の魂を唯一の神に結びつけることに他ならないと解釈したのも、宗教の本質をよく理解していたと言わねばならない[5]。

宗教は、大いなるものへの畏怖と帰一の感情である。十八世紀から十九世紀にかけてのドイツの宗教哲学者、シュライエルマッハーが、宗教は、宇宙を直観しようとする感情であり、宇宙の中に聞き入ろうとする敬虔の念であり、宇宙の直接の影響に全くの受け身の態度でとらえられ、満たされようとする感情だと考えたのも、宗教の本質をよく見ていたと言える[6]。人間は、人間を超える大いなるものに出会う時、自らの無力を知り、恐れとおののきを感ずる。そして、この大いなるものに自己自身が属しており、全面的に依存していることを自覚する時、深い安心感を得ることができる。そのような宇宙感情と宇宙的なものへのひたすらな依存感情を、シュライエルマッハーは特に強調した。

原始宗教の研究に先鞭をつけ、精霊信仰をあますところなく追究したタイラーは、宗教を、霊的存在への信仰と定義した。この単純な定義にも、それなりに深い意味合いがある。タイラーの言う霊的存在とは、万物に宿る精霊や霊魂や神霊を意味するが、それは、また、万物は生きているという信念と深く結びついていた。万物に宿る生命は、宇宙の偉大な生命に通じている。タイラーが原始宗教の本質に見た精霊信仰は、また、生きとし生きるものすべてにあまねく宿る偉大な生命力への信仰に裏づけられていると言わねばならない。タイラーの言う霊的存在への信仰としての宗教も、万物に宿りながら万物を越えた大いなる生命への信仰に支えられている。タイラーが原始

宗教に見たものも、大いなるものへの畏怖と帰一、宇宙生命への畏怖と帰一という宗教の本質に他ならなかった。

大いなるものと聖なるもの

大いなるものは、オットーやエリアーデがとらえたように、また、聖なるものとしても顕現する。人間が世界の中にあって世界を自覚した時、世界とその根源は、まず、人間自身が住む世俗世界から隔たった大いなるものとして立ち現われてくる。そのため、それは、世俗世界から超越したもの、聖なるものとして、受け取られる。そして、聖なるものは、俗なるものから隔離され、触れてはならないものとして、畏敬の対象となる。それは、原始宗教のタブーの中にも現われ、古代宗教や高度宗教での聖なる神像などにも現われる。

しかし、また、人は、聖なるものに対した時、単にそれを畏敬するだけでなく、翻って、自分自身がその聖なるものに引き寄せられ、取り込まれていることも経験する。聖なるものは、世俗を超越しており、日常経験から離れているのだが、人は、それに面した時、世俗の日常性にとどまっていることはできず、日常性を離れ、自己を脱し、聖なるものにとらえられ、これに属す。この聖なるものによってとらえられるという経験も、また宗教の本質的経験である。それは、原始宗教の成年儀礼の体験、古代宗教の密儀体験、高度宗教の神秘的体験まで、すべてに通じている。

宗教は、大いなるものへの畏怖と大いなるものへの帰一の感情に他ならなかったが、それは、また、聖なるものへの畏敬と聖なるものとの合一という形でも現われるのである。このような宗教感情をとらえなければ、宗教の本質をつかんだことにはならない。確かに、宗教にはすぐれて社会学的機能があるが、それは本質から派生してきたものであって、本質そのものは社会学的機能にのみ還元してしまうことのできないものである。

オットーは、この聖なるものを純粋にとらえなおすために、〈神性〉という意味を表わすラテン語のヌーメン（numen）という言葉から、ヌミノーゼ（Numinose）という言葉をつくり、これを宗教の本質をとらえるものとして用いた。ヌミノーゼ（神聖なるもの）は、概念や論理によってはとらえられず、言い表わし難く、規定できないもの、神秘で、人間を超越した絶対の他者である。それは、荘厳で、力をもち、崇高で、巨怪で、不気味である。人は、これに対して、何よりも、戦慄と畏怖とを引き起こす。それは〈戦慄すべき神秘〉である。これに面すると、人は、自己の存在のちっぽけさを自覚して、被造物感情にとらえられる。だが、この神秘は、また、神秘であるがゆえに、それは魅惑するものでもある。それは、人間を不思議な力で引きつけ、それとの交わりや一体化を希求させる。それは〈魅する神秘〉でもある。[7]

ヌミノーゼの体験には、畏怖と魅惑の相反する感情が同時に存在している。畏怖は、

人に戦慄を覚えさせ、退かせるが、魅惑は、人に接近させ、希求させる。ヌミノーゼには、戦慄と魅了、反発と吸引、離間と結合という相反する要素が、矛盾しつつ統一されている。この相反する作用が対立しつつ調和しているところに、聖なるものの本質構造がある。このオットーのヌミノーゼという概念の出てくる背景には、ユダヤ・キリスト教的な超越神信仰があり、仏教なども含めた宗教一般を十分には把握できない面がある。しかし、それでも、それが、聖なるものに、戦慄と魅了、反発と吸引、離間と結合の相反するものの合一構造を見た点は、宗教の本質をよくとらえていたと言わねばならない。大いなるものへの畏怖と大いなるものへの帰一の感情として宗教をとらえた場合にも、そこでは、畏怖の感情からくる離間と、帰一の感情からくる結合の、相反するものが同時に緊張関係を保ちながら存在しているのである。

聖なるものの顕現

このオットーの考えを受け継ぎながらも、逆に、聖なるものの俗なるものへの顕現をあらゆる宗教の本質に見たのは、エリアーデであった。聖なるものは、聖なるものであるがゆえに、俗なるものを越え、俗なるものから離れるが、しかし、同時にそれゆえにこそ、聖なるものは、俗なるものに顕現してこなければならない。エリアーデは、この宗教の逆説的現象を、ヒエロファニー（hierophany）と呼び、これを、原始宗教や未開宗教、古代宗教や高度宗教、あらゆるところに見たのである。聖と俗とは質的に異なるが、しかし、聖はまた俗の世界のどこにでも現われてくる。その時、俗なる世界のものは、聖なるものの顕現（ヒエロファニー）を通して、聖化される。それは、神の受肉や化身、神像などとなって現われたりするばかりでなく、聖なる石、聖なる木など、自然物の形をとっても現われる。聖は俗に、精神は物質に、永遠は生成に、絶対は相対に、自己を限定して立ち現われてくる。この聖の弁証法をエリアーデは見たのである。[8]

人間は、世界の内にあると同時に、世界の外に立ち、世界を自覚する。この時、世界は、人間にとって、一つの大いなるものとして立ち現われ、人間は、これに対して、畏怖という感情によって応える。しかし、この大いなるものは、ただ単に、人間から隔絶したものとしてのみみられているだけでは、十分ではない。人間は、また、この大いなるものを、世界の中にあるものによって表現する。聖なる石や聖なる木、神像や聖画、神殿や寺院、教典や聖人、それらは大いなるものの象徴である。この象徴を通して、人間は、大いなるものにつながり、大いなるものと帰一する。エリアーデは、これを、聖なるものの顕現として把握したのである。

原始宗教においても、古代宗教においても、高度宗教においても、例外なく行なわれていた様々の宗教儀礼は、人間が大いなるものを畏怖し、大いなるものに帰一しているという宗教感情の表現であり象徴である。未開社会においても、原始社会におい

ても、古代社会においても行なわれてきた動物供犠一つをとっても、それは、人間を越える大いなるものへの感情の表現であり象徴であった。人間は、世界の中にあって世界を問うとともに、世界を理解することによって、世界とのつながりを回復する。大いなるものへの畏怖と帰一を本質とする宗教も、世界の理解と世界とのつながりの表現である。宗教は、これを、儀礼によって象徴的に表現する。人間は、儀礼を通して、大いなるものに通じるのである。

原始宗教も、古代宗教も、そして、高度宗教さえももっている神話、これも、また、人間の世界理解の象徴的表現である。神話は、この世界はどのようにして成り立ち、人間はどこから来てどこへ去るのかについて語る。それは、人間の世界自覚の表現なのである。しかも、神話は、その中で、人間と人間を囲むものが大いなるものによって支えられ、生かされてあることを教える。人間は、また、神話を通して、原初的な大いなる力を経験し、自己自身がその中に属していることを知る。神話も、また、大いなるものへの畏怖と帰一という宗教感情の表現であり、象徴なのである。

宗教とは、大いなるものへの畏怖と帰一、他ならぬ宇宙生命への畏怖と帰一の感情である。諸宗教が立てている精霊、霊魂、神々、神、絶対者、仏などは、宇宙の根源的生命の表現である。諸宗教の儀礼や神話は、宇宙の根源的生命と人間とのつながりを象徴的に表現している。

人類が宇宙の根源的生命の自覚に達したということは、それ自身、また、地球上に長い歴史をもつ生命の一つの飛躍であり、覚醒であった。宇宙の根源的生命への畏怖と帰一の感情は、先史社会から農業社会、都市社会から古代文明社会、そして近代文明社会を通じて、あらゆる宗教がもっていた宗教の本質であり、すべての宗教に通じる共通感情である。

人間をはじめ、あらゆる生きとし生けるものが、大宇宙の一部であり、大宇宙を映す小宇宙であることを、諸宗教は、儀礼や神話を通して象徴的に表現している。人間、動物、植物、物質の個体の一つ一つが宇宙の命の表現であり、その中に全宇宙が働き出ていること、したがって、また、すべてが宇宙全体とつながっており、宇宙の根源的生命に帰一するということを、宗教は、無数の表現形式を通して、語り続けてきたのである。

Ⅱ　大地と生命

1　生　成

生成の原母

かつて、どの文明においても、その文明が生い立ってきた原初には、ほとんど例外なく、大地を母とし、それを一個の女神として崇拝する信仰があった。人間が大地に立った当初から、人間にとって、大地は生きとし生けるものを生み出す源泉と観念された。人間がまだ山野に野獣や木の実を求め、川や海に魚介を捕って生きてきたころから、大地はさまざまな恵みを生み出してくれる源であった。大地は、そこから多種多様な草や木を繁らせ、さらに、そこに多くの動物を住まわせる土台であった。大地は、無限の産出力であり、あらゆる生命とその豊穣の源泉であり、それ自身が無尽蔵な生命体であり、生成そのものであった。とすれば、これが万物を生み養う偉大な母と観念されたのも不思議ではない。母性の出産能力と、大地の産出力が結合され、大地が多産の女性像によって象徴されたのである。

ヘシオドスの『神統記』によれば、古代ギリシアでも、大地は広い胸をもった女神ガイアとして崇拝され、万物の生成の原理、カオスから生まれた最初の神とみられた。したがって、ガイア自身、万物を生み出す生命の源泉とも考えられた。現に、ガイアは、処女生殖によって、天ウラノスと海ポントスと高い山々を生む。また、天ウラノスや海ポントスや地底タルタロスとの結婚によって、ティタンやキュクロプスという神々や巨人、海の神や怪物たちを生み続けた。次々に生んでいくこの生成の力こそ、大地の本質であった。

さらに、ウラノスがキュクロプスや怪物たちを地底に幽閉してしまった時、ガイアがその子クロノスの力を借りてこれを助け出そうとしたところには、ガイアの母性原理が働き出ている。また、クロノスが、同様に兄弟のキュクロプスや怪物たちを冥界のタルタロスに閉じ込めたり、さらに、姉レアとの間に生まれた子供たちを次々と呑み込んでしまった時も、ガイアは、レアの生んだ最後の子ゼウスを策略を用いて救い出そうとしている。ここにも、同じ大地の母性原理が働き出ている。また、クロノスとゼウスたちの十年にわたる長い戦争の結果、勝利を収めたゼウスが、同じように父クロノスやティタンたちをタルタロスに幽閉してしまった時も、ガイアはこれをとがめている。これも同様の原理によっている。ガイアが奇蹟の植物を生み、その汁で巨人のギガスたちに不死の命と無敵の力を与え、ゼウスに反旗を翻させようとしたのも、

母なる大地の無尽蔵な生成力、無限の産出力、永遠の生命を象徴している。大地は、生み出すものであり、育むものであり、守るものであり、したがって、それは母なるものと観念されたのである。

天と地の結婚

ウラノスとガイアの結婚から様々のものが生み出されてきたように、天と地の結婚から万物が生み出されるという観念は、世界の多くの神話に見られる。日本神話のイザナキ・イザナミ二神の島生みの物語は、この天父と地母の聖婚譚の一つである。

イザナキ・イザナミ二神は、天の沼矛で下界を掻き回し、矛の先からしたたる海水が積もってできた島、淤能碁呂島に天降りして、互に交わって、日本の多くの島々を生む。さらに、石や土、海や河口、風や木、山や野、最後に火の神など、多くの神々を生む。イザナミは、また、聖婚によってばかりでなく、火の神を生んで御陰が焼かれて病気になってからも、金属や土器、水や生産に関する神々を生み続ける。それに対して、イザナキは、火の神を切った剣から日や雷の神を生み、さらに黄泉の国から帰って禊をし、日神や月神など天空にかかわる多くの神々を生んでいる。イザナキは父なる天の神、天父神であり、イザナミは、無尽蔵に万物を生み出す生成の原母であり、母なる大地の女神、地母神であった。

古代インドの最古の聖なる讃歌を集めた聖典、『リグ・ヴェーダ』（一・一六〇）に出てくるディヤウスとプリティヴィーも、通常、ディヤーヴァープリティヴィー（天地二神）と両数の形で表現されるように、インドの多くの神々の父母である。ディヤウスは天や日を表わし、多くの神々の父と言われ、牡牛によって象徴される。プリティヴィーは大地を表わし、神々の母であり、牝牛によって象徴される。両神とも老いることなく、常に美しく、一切の存在の親としてあらゆるものを保護し、豊富な栄養を生み、限りない恩恵を与える。プリティヴィーに捧げられた讃歌（五・八四）でも、大地女神プリティヴィーは、山々を担い、樹木を支え、豊穣をもたらすものとして讃えられている。

古代ギリシアのクロノスとレア、ゼウスとヘラの結婚による諸神の誕生という物語も、ウラノスとガイアの天地二神の聖婚譚を原型として出てきた物語であり、その模倣と反復と考えられる。レアもヘラも、もとは地母神であった。なかでも、レアはクレタの太女神であり、エーゲ海の宇宙の母であった。

天父と地母の聖婚による万物の生成という観念は、世界中の至るところで、文明の

発生期には見られる観念である。この原初的観念には、万物が生成してくるには、天地が分離する以前の宇宙の偉大な力が必要だという想念があった。それを、古代の人々は、天なる男神と地なる女神の結婚という観念で象徴したのである。人間の男女や動物の雌雄の結合による生殖という行為も、この天父と地母の聖婚による万物の生成という原型を模倣するものだと考えられた。

太古、人間が大自然の中で暮していた頃、天から日光が射し込み、雨が降ると、草木は芽を出し、生長し生い茂り、虫たちは蠢き、獣が駆け巡り、人間に豊富な恵みを与えた。大地は、これら多くの生き物を生み出す源泉であり、母胎と考えられた。ただ、大地がそれらを無尽蔵に生み出すにも、天からの光や雨を必要とした。それが、天父と地母の聖婚という観念によって象徴されたのである。実際、天からの雨は、地母を受胎させる天父の精液とも考えられていた。

太古の人々にとって、大地は、何よりも、そこからあらゆる生命体の生成してくる場であり、そこに万物が根を下ろす土台であり、そこを通して宇宙の無限の生命力が無尽蔵に発現してくる源泉であった。それは、あらゆる生き物の生死を超えた永遠性をもっていた。この永遠の生きた大地が、神として、しかも、偉大な母神として崇拝されたのである。人間はこの大地にしっかり根を下ろし、この大地を通して宇宙の根源的生命につながっていた。

太古の人々が大地を通して予感していたこの宇宙の根源的生命力こそ、精神と物質の一つになるところであり、そこから精神と物質が分かれ出てくる根源である。したがって、精神と物質は別々のものではなく、われわれの身体がそうであるように、精神の中にこそ物質があり、物質の中にこそ精神があるのでなければならない。物質も決して死んだものではなく、生きたものであり、この中に魂と生命力を宿しているものと考えなければならない。太古の人間は、生命の源泉としての母なる大地を通して、このことを把握していた。

2　豊　穣

狩猟時代の豊穣神

大地が、植物や動物や人間など生きとし生けるものの産みの母であり、生成そのものの原母であるという信仰は、人類の歴史の中でも最も古い層に属し、すでに旧石器時代に始まる。旧石器時代後期の遺物として出土する裸体の女神像は、母なる大地の神、地母神を表わすものであろう。それが、新石器時代になると、野や山の木の実や動物、川や海の魚介を恵む豊穣の女神として崇拝されるようになる。世界中に見られる新石器時代の大きなお尻とお腹をした女性の土偶は、そのような多産と豊穣を約束する女神であった。さらに、穀物の栽培が始まり、農業が開始されるに及んで、この

豊穣女神への崇拝は一層盛んになる。母なる大地の神は、すべてのものを生み出す生成の原母であるばかりでなく、特に、穀物を育て稔らせ、豊かな収穫を約束する豊穣神となっていく。この豊穣神としての地母神の祭祀は農耕文化の発展と併行して大きくなり、それとともに、様々な地母神の生活史が神話として語られるようになる。

山野を駆け巡り狩りを楽しむ古代ギリシアのアルテミスは、狩猟時代の面影を残す大地女神であった。大地は、草や木を生長させる産出力の源泉であるばかりでなく、山野を跋渉（ばっしょう）する動物たちを豊富に生み出す原母としても観念された。アルテミスが野生の動物の守護神とされたのは、そのためである。エペソスで崇拝された多くの乳房をもつ女神像がアルテミス像と考えられたのも、アルテミスがもと古代ギリシアの先住民の地母神であり、動物や人間の多産と出産を擁護する神であると考えられていたからであろう。

しかし、また、アルテミスは、狩猟と弓術を司る女神でもあり、お供の精霊、ニンフたちを連れて狩りを楽しんだという。野生動物の守護神が野生動物を殺す神になっているのは、一見矛盾した観念のようにも思われるが、必ずしも矛盾しているわけではない。多くの野生の動物を産出する大地神は、また、それゆえにこそ、多くの動物の生贄を要求すると想像されたのであろう。アルテミスは、これらの生贄を得ることによって、狩猟の豊穣や戦闘の成功を約束したのである。

アルテミスは、古代ギリシアでは、若き処女神と考えられ、純潔を守る女神とされていた。そのため、その職掌を侵害する者を厳しく罰する極めて残忍な面をも持ち合わせていた。巨人のティティュオスが母のレトを犯そうとした時、アルテミスは弟のアポロンと協力してティティュオスを弓で射殺し、地獄のタルタロスへ落として、禿鷹に肝臓を食わせる永遠の罰を与えた。また、二人しか子をもたない母レトを侮った子沢山のニオベを罰するために、アポロンと一緒に、ニオベの子供たちのほとんどを弓で射殺した。また、アルテミスの沐浴する姿を見たアクタイオンは、鹿に姿を変えられ、彼の猟犬の餌食となってしまったという。このようなアルテミスの物語は、アルテミスが狩猟時代の地母神であったことから想像されたのであろう。

もとは小アジアのプリュギアの女神であったキュベレも、アルテミスと同様、狩猟時代の面影を残す地母神であった。キュベレは、子供たちと野生動物の守護者であり、ギリシアでは神々の母レアと同一視され、母なる大地を象徴した。

ゼウスの精液から生まれた両性具有の不思議な生き物に驚いた神々は、その男根を切除した。その生き物が生長してキュベレ女神となった。切除された男根の方は地に落ちてアーモンドの木となり、その実の一粒がサンガリオス河神の娘ナナの胎内に入り、男子アッティスが生まれる。アッティスはすぐに山中に捨てられたが、不思議にも牡山羊が乳を与え、美青年に成長した。キュベレは彼に恋した。大地女神キュベレは、その繁殖力と産出力を維持するには、自分のもとの片割れである若い愛人を必要

としたのである。

だが、狩猟時代の大地女神は、アルテミスがそうであったように、極めて残酷な面をもっていた。現に、キュベレに冷淡であったアッティスは、彼女の激しい嫉妬によって発狂させられ、自らを去勢し死なねばならなかった。アッティスは、キュベレ女神への生贄とされたのである。だが、キュベレは自分の残酷さを悔い、アッティスの死体を決して腐らせないという約束をゼウスから取り付けた。葬られたアッティスの小指は動き続け、髪は伸び続けたという。

ギリシアでは怪物扱いを受けているメドゥサも、もとは異国の地母神であった。彼女は、顔は美しかったが、頬は死人のように青ざめ、額には苦痛の皺を刻み、唇は蛇のように薄く毒々しかった。髪の毛は一本一本毒蛇の姿になって、こめかみのあたりにとぐろを巻きながら、ひらひらと枝の出た舌を吐いていた。メドゥサは多くの怪物の母親であった。その目によって見られると、だれもが石に化してしまわねばならなかったという。ペルセウスは、長旅の末、このメドゥサの首を切って持ち帰り、アテナ女神に捧げ、悪玉を滅ぼした。

メドゥサは、ギリシアではゴルゴン（怪物）のひとりに数えられているが、もとはリビュアのアマゾン女人族の太女神であり、あらゆる神々の母であった。メドゥサの髪の毛が一本一本蛇の形をしているのも、強力な生命力と産出力を表わしている。蛇を伴う女神の像は、メドゥサばかりでなく、古代以来世界各地に伝えられているが、この蛇は男根の象徴でもあり、水の象徴でもあった。それは、大地女神を妊ませる霊力をもったものと考えられていたのである。

農耕時代の豊穣神

母なる大地への信仰は、農耕社会の登場とともに、麦や米その他の穀物を豊かに稔らせてくれる豊穣女神への崇拝という形をとって、より盛んになる。特に、穀物の栽培が始まると、その栽培に携わったであろう女性の力が大きくなり、母なる大地への信仰は、この強まった母性の力を反映するようになる。女性のもつ産出力と養育力が大地の生産力の観念と結びつく。こうして、母なる大地は、偉大な産出の霊力をもつ母神として、盛んに崇拝されるに至ったのである。大地は母であり、命を与えるものであった。

古代バビロニアのイシュタルの物語も、この豊穣女神の物語である。もっとも、イシュタルは、天の女王と言われているから、それ自身が直接、母なる大地の神とは必ずしも言えないかもしれない。しかし、このイシュタルの様々の職掌を考えれば、もとは母なる大地の神、地母神だったのであろう。もともと、イシュタルは、バビロニア人によって、この世界および人間をつくった母神として崇拝されていた。『イシュタル讃歌』でも、彼女は、すべての人間の生命を形づくった荘厳な世界の女王と讃えられている。

イシュタルは、また、次々に愛人をつくっては捨てていく極めて多淫な女神とされてもいる。その愛人の中でも、農業の神タンムーズは最も有名な神で、おそらくイシュタルの分身とみてよいであろう。現に、タンムーズは、人間どもに作物を作り、果物を栽培することを教えた。彼は、一年のある期間を、この地上に牧神や農業の神として生活し、愛人として、イシュタルの限り無い寵愛を受けている。その期間は、人間が飼育する羊は増え、耕作する麦は豊富に稔るという。イシュタルは、また、病気を治す神でもあり、瀕死の病人を生き長らえさせ、病を癒す神として讃えられている。

古代エジプトの太女神イシスも、地母神から発展した豊穣神のひとりである。冬になり、草や木が枯れ萎(しお)んでいっても、春になれば、大地は、再び草や穀物の芽を出させ、それらを育てあげる生命力をもっている。それと同じように、古代エジプトのイシスも、古代バビロニアのイシュタル同様、病人を治し、不死の命を与え、死者を復活させる生命力を備えたものと考えられた。イシスのイメージには、そのような生命力の根源としての母なる大地のイメージが重なっている。

テーベの町に来降したイシスは、病人を癒し、子供を慰撫し、夫のオシリスは、人民に農耕技術を教え、収穫を増やす工夫をした。その後、オシリスはエジプトの国王となったが、弟セトの策略で黒檀の箱の中へ閉じ込められ、ナイル川に捨てられてしまった。愛する夫を失ったイシスは、夫の柩を探し出すために、ナイル川の岸をあてどもなく放浪した。その漂泊の旅の中で、オシリスの柩がビブロスの王宮の柱になっていることを知る。ビブロスの王宮に着いたイシスは、王子の病気を見る間に治し、王子の乳母となった。そして、王子に不死の命を与えようとして火の上に乗せたが、妃が驚いて王子を助け出してしまったため、その子は普通の人間以上には生きられなくなってしまったという。その後、柱の中の柩を得たイシスは、夫の遺骸を守りながらエジプトに帰ったが、セトの探索が厳しく、イシスと夫の忘れ形見ホルスは、再び全国を彷徨しなければならなかった。その間に、オシリスの死骸は無残にも切り刻まれて、ナイル川へ投げ捨てられてしまっていた。イシスは、ホルスを抱えながら、幾年の辛苦の末、エジプト全国からバラバラの遺骸の部分部分を集めて回った。ところが、男根だけは見つからなかった。イシスは、オシリスの男根を粘土で作り、完全なものに復元し、ミイラにした。かくて、オシリスは、この世界ではなく、地下の世界、つまり冥界の王として復活したという。

イシスはもと、〈席〉あるいは〈玉座〉を意味し、エジプトの王は、このイシスの膝に座ることによって王権を獲得した。つまり、エジプトでは、大地の上に座り、大地に抱かれることが王権の条件だったのである。それによって、王は、大地の豊穣を約束する霊力を身につけることができたのである。

この母なる大地の女神イシスの崇拝は、その後地中海全域に広がり、紀元前後からは、古代ローマ世界に広範に広まった。四世紀には、キリスト教によって追放された

が、しかし、このイシス崇拝は形を変え、聖母マリア崇拝となってキリスト教の中に吸収されていった。イシスがわが子のホルスに授乳する姿を描いた肖像は、聖母マリアと幼児イエスの肖像の原型となった。聖母マリアが幼児イエスを連れてエジプトを彷徨し、様々な出来事に遭遇したという聖書外伝の記録は、イシスとホルスの漂泊譚を元にしている。マリアとイエス、イシスとホルスばかりでなく、各地に伝わる母子像は、人間が大地の子であり、大地に依存する無力な幼児であることを象徴している。

古代ギリシアのデメテルも、地母神から発展した豊穣女神であった。デメテル（demeter）という名前自身、母なる大地を意味しており、これは、何よりも、大地の生産力の守護神であり、穀物の豊穣を約束する女神であった。ガイアも無限の生産力を象徴する地母神であったが、これはより古い大地神の面影を宿しているのに対して、デメテルは、農耕が盛んになってきてからの大地神であり、豊穣神であった。

デメテルは、人間の姿をして地上を彷徨し、親切に扱った者には収穫の恩恵を与え、不親切に扱った者には不作の罰を与えた。エレウシスに到着したデメテルは、ケレオス王一家の親切が身に染みて奉公を申し出、生まれて間もない王子デモポンの乳母になった。デメテルは、彼を不死にしようとして、昼は彼の体に香油を塗り、夜は火中に入れて育てたため、デモポンは急速に成長した。しかし、これを聞いた王妃メタネイラは、恐ろしさのあまり悲鳴をあげた。デメテルは腹を立て、子供を床に投げつけたという。この話は、古代エジプトのイシスの物語からの流れである。

かくて、デメテルは神としての本性を現わし、エレウシスの地に彼女を祀る神殿を建てることをケレオス王に命じ、秘儀を行なう方法を教えた。また、デメテルは、世界に豊穣の恵みを与えるために、彼女の恵みである穀物の穂をトリプトレモスに与え、これを人間に伝達させた。このトリプトレモスが旅を終えてエレウシスに帰ってきた時、王位をトリプトレモスに譲るようケレオスに命じたのも、デメテルであったという。少年トリプトレモスが豊穣を約束する王となりえたのも、母なる大地の力によってであったことになる。小麦の種を分け与えているトリプトレモスの乗る車が竜と蛇によって動かされているのは、そのためである。竜と蛇は大地の霊力の象徴であった。

トリプトレモスに農業技術を伝えたことからも分かるように、デメテルは農耕時代の豊穣女神であった。古代のギリシア人たちは、この女神の機嫌・不機嫌によって、大地の肥沃や不毛が支配され、穀物の豊作・不作が決定されると信じた。彼らは、年ごとに訪れる穀物の作・不作に、大地の活力の消長を感じていたのである。それゆえ、彼らは、この大地女神の機嫌をよくするために、様々の儀礼を行なった。エレウシスの祭りは、その最も大きなものであった。

スコットランドの夏の王アングスの妃ブライドも、豊穣女神のひとりであった。彼らは、多くの人々から、豊穣で幸福な日をもたらす神として敬愛されていた。美しく若いブライド姫は、冬の間、冬の女王ベーラの虜になっていた。しかし、春が近づくと、夏の王アングスの季節がやってくる。ブライド姫は、夢でアングスが助けに来て

くれることを知り、嬉しさに思わず一滴の涙を落とすと、その場所に一本のスミレが咲き出たという。それから間もなく、ブライドと白馬にまたがったアングスが出会い、やがて森の中から仙女の群れが出てきて、二人を祝福した。仙女の女王が杖を振ると、今までのブライドの貧しい身なりは美しい着物に変わり、彼女の金髪には美しい春の花が飾られ、右手には金の穀物の絡んだ白い杖を持ち、左手には豊穣の角笛と呼ばれる金の角笛を持っていた。二人が仙女の宮殿から出て、アングスが呪文を唱え、ブライドが手を振ると、にわかに草は生長した。人々は、この王と王妃を誉め讃え、ものみな芽吹き生長する春がやってきたことを知った。そして、この春の最初の日をブライドの日と呼んだ。地上には太陽が輝き、花が咲き始め、穀物の種は蒔かれ、人々はブライドに豊作を祈ったという。

アイルランドのケルト族の伝えた神話に出てくる神々のうちでも、例えば、ダーナ女神やエスニャ女神は、豊穣を約束する母なる大地の神であった。ダーナ女神は、アイルランドのあらゆる神の母と呼ばれている。このダーナ女神を母とする神族は、光と知識の力の具現者と考えられ、地上を豊穣にし繁殖させるという観念と結びついて、広く信仰されていた。エスニャ女神も、ダーナ一族の娘であり、人間たちに激しい情熱を吹き込む愛の神であると同時に、豊穣を約束する大地神でもあった。エスニャは、その息子ゲラルド伯を産む時、たった一夜のうちに丘に豌豆をすっかり植えつけてしまったという。その丘は、〈エスニャの丘〉として、マンスターのグル湖の付近に今日も伝えられている。

古代インドの天父神ディヤウスと一対で呼ばれる大地母神プリティヴィーも、もちろん豊穣女神という資格を得ている。プリトゥ王が国を治めている時、恐ろしい飢饉が起こり、地上の人々は困窮してしまった。プリトゥは、プリティヴィーを追い詰めて、収穫を生み出させようとする。プリティヴィーは、破壊させてしまった穀物や野菜を彼女のミルクによって蘇生させることを約束した。それによって、今人々が食べている穀物や野菜が生まれたのだという。

穀物の母

デメテルがトリプトレモスに穀物の種を与えたと言われるように、また、プリティヴィーが人間世界に穀物を広めたと言われるように、豊穣の大地女神は、また、穀物の母の役割をも果たす。わが国のオホゲツヒメやウケモチ、カムムスヒの神などは、そのような穀物の母という形をとった豊穣女神である。例えば、穀物の起源を語っているオホゲツヒメの物語は、大地の生産力への信頼を語って余すところがない。

下界へ降(くだ)ってきたスサノヲに食物を求められたオホゲツヒメは、鼻や口や尻からいろいろの物を出し、料理をして差し出す。その仕業を覗いたスサノヲは、汚いことをして食べさせると思い、ヒメを殺してしまう。殺されたオホゲツヒメの屍体の頭から

蚕が、目から稲種が、耳から粟が、鼻から小豆が、陰部から麦が、尻から大豆が生まれてきた。これをカムムスヒの御祖の命が取って種としたという。

この穀物の起源を物語るよく知られた死体化生説話は、人間と大自然の関係をよく物語っている。スサノヲから求められれば、それに応じて、次々と食物を無尽蔵に出してくるオホゲツヒメは、人間に種々の生きる糧を与えてくれる大地の恵みを象徴している。オホゲツヒメも、もとは母なる大地の神だったのであろう。このオホゲツヒメがスサノヲに殺されるという話は、人間が農耕を覚え、多くの穀物から豊かな食糧を得られたのは、大地の犠牲と恩恵あってのことであるということを反映するものであろう。この恵み豊かな大地への敬慕の念が、オホゲツヒメの死体化生説話には語られている。

ウケモチ神の物語も、同じ穀物の起源を語った死体化生説話であり、同様の思想を表現している。地上に降り立ったツクヨミがウケモチのもとに着くと、ウケモチは、首を巡らして、口から、国の方に向かって飯を出し、海に向かって鰭の広もの・鰭の狭もの（大小の漁獲物）を出し、山に向かっては毛の麁もの・毛の柔もの（粗毛・柔毛の獣）を出し、そのくさぐさのものをすべて供えて御馳走した。ツクヨミは怒って、剣を抜いてウケモチを打ち殺してしまった。その屍体の頭からは牛と馬が化りいで、額からは粟が生まれ、眉の上には蚕が生まれ、目の中には稗が生まれ、腹の中には稲、陰部には麦と大小豆が生まれたという。

ウケモチは食べ物を主宰する神であり、やはり生産力の神であった。オホゲツヒメの物語にせよ、ウケモチの物語にせよ、そこには、大地の犠牲によってのみ人間は豊かな糧を得ているという思想が語られている。いずれも、母なる大地の無限の生産力への畏敬の念を語っている。母なる大地の犠牲こそ、豊かな収穫や生命の豊穣を約束してくれるものと信じられていたのである。

出雲系の神々とかかわりの深いカムムスヒの神も、万物の生命の母神という性格をもった生産神であった。カムムスヒは、八十神に殺されたオホアナムヂ（オホクニヌシ）を、その母神の願いで蘇生させている。カムムスヒは、死者を復活・再生させる力をもった生命を司る女神であった。カムムスヒは、また、オホゲツヒメの屍体から化生してきた穀物を取ってきて、それを種とした母神で、穀物の生成の役割をも果たしている。ムスヒという言葉が、すでに生産の霊力という意味である。それゆえ、カ

ムムスヒは、蔓芋の種とも粟の種とも言われる小さな穀霊神スクナビコナの母でもあった。

オホクニヌシが出雲の御大（みほ）の御前（みさき）に来た時、波の上をやってくる神がいたが、名を名乗らないので、天下のことをすっかり知っている案山子（かかし）の神クエビコに聞くと、「これはカムムスヒの神の御子で、スクナビコナの神です」と答える。カムムスヒの神も「まことにわたしの子であり、わたしの手の股からこぼれ落ちた子どもだ」と言い、「アシハラシコヲ（オホクニヌシ）と兄弟となって、この国を創り堅めよ」と命じたという。ここでは、カムムスヒは穀霊神の母となっており、生産力を象徴する神という性格をもっている。オホクニヌシがスクナビコナと二人で国土を創成できたのは、この農業の生産力によってであったことも、この説話から読み取ることができる。

穀母から穀霊神が生まれるという観念は、古代メキシコのアステカにも見られる。シペ・トテックは、トウモロコシの女神チコメコアトルの息子で、豊穣をもたらす穀霊神であった。だが、この神は、人間の生皮を身にまとった姿で現われ、毎年の豊穣をもたらす見返りに多くの生贄を要求した。そのため、毎年春に行なわれていたシペ・トテックの祭りでは、生贄の心臓を抉り、生皮を剥いで、その生皮を司祭が身にまとう儀式があったという。皮をまとった司祭はトウモロコシの女神の息子であり、穀霊神シペ・トテックの再生を意味する。トウモロコシは発芽するときも殻を破って出てこなければならないし、取り入れるときも皮をむかねばならなかった。この豊穣祈願祭は、それを象徴するものだったのであろう。

愛の神

一方、母なる大地の神は、多くの男神と交わってその産出力を発揮したとも観念されたから、地母神は、また、愛の神という形もとった。古代ギリシアのアフロディテはその代表である。

アフロディテは豊穣と美と愛の女神であり、多くの神々に恋をさせる力をもっていた。ヘシオドスによれば、アフロディテは、クロノスがウラノスの男根を切って海へ投げた時、そのまわりに集まった精液の泡から生まれたという。ホメロスによれば、愛欲を司るアフロディテは、極めて淫乱な女とみなされていた。彼女は戦争の神アレスと裸で抱き合っているところを、夫で鍛冶師のヘパイストスに見つけられ、目に見えない網でベッドごととらえられたが、海神ポセイドンのとりなしで二人は救われる。アレスとの間には、ディモス（恐怖）、ポボス（狼狽）、ハルモニア（調和）など、何人かの子が生まれたという。アフロディテは他の男神とも多く交わり、酒と陶酔の神ディオニュソスとの間には巨大な男根をもつプリアポス、ポセイドンとの間にはエリュクス、伝令使ヘルメスとの間に男女両性のヘルマプロディトスが生まれた。彼女は、

また、多くの人間とも情交を結んだが、特に美少年アドニスとの愛はよく知られている。アドニスが野猪に突かれて死んだ時、悲しんだアフロディテは、少年の流した鮮血から赤いアネモネの花を咲かせたという。

アフロディテにとってのアドニスは、古代バビロニアのイシュタルにとってのタンムーズに当たる。アドニスやタンムーズは植物や作物の神であって、大地のもとで死して再生する神と考えられた。タンムーズと交わるイシュタルも、アドニスと交わるアフロディテも、ともに大地女神であり、同時に多淫な愛の女神と思われていたのである。

よく知られた北欧の女神フレイアも、美と愛を司る豊穣神であった。夫オズルが旅に出てしまったため嘆き続けたフレイアは、ついに、夫を探すため、数匹の猫が引く車に乗って、あてもない旅に出る。猫はフレイアが最も愛好した動物で、媚愛と肉感と多産の象徴であった。どこでもオズルを見つけることができず、行く先々で流した涙は、各地の地底にある黄金となった。南の国に入った時、ようやく出会った二人は、手に手を取って、神々の世界アスガルズに帰ることになる。フレイアの足取りは軽く、一足ごとに大地の草が緑となり、木々が花をつけ、鳥も喜びの歌を歌ったという。フレイアは、愛の神であると同時に、もともと大地の豊穣を具現する豊穣神だったのである。

インドのパールヴァティーも、ヒマラヤの神の娘ウマーと同様、地母神から発展してきた愛の女神である。パールヴァティーとは山の娘の意味で、ウマーと同じく、シヴァの神妃であった。パールヴァティーは、修行に夢中になって彼女に気づきもしない夫に、我慢ができなくなる。愛欲の神カーマデーヴァが、彼女に注目させようと、シヴァ神にキューピッドの弓を放した時も、シヴァ神は、額の第三の目から出る閃光によって、カーマを焼き殺した。パールヴァティーは、無限に継続するシヴァ神の修行に飽き、隠遁してしまった。ある日、若いバラモン僧が訪ねてきて、彼女を俗世間に連れ戻すために、シヴァ神の悪口を言った。しかし、パールヴァティーはシヴァ神を信じて疑わなかったので、バラモン僧はシヴァ神の本体を現わし、彼女の愛を求めた。二人はヒマラヤのカイラーサ山に行き、愛の生活を送ったという。

3　死

冥界訪問

春となれば、大地には草が生え、花が咲き、木は芽吹き、穀物は育ち、野山には獣が這いまわり、小鳥たちがさえずり、あらゆる生命が復活してくる。大地は、生きとし生けるものを生み出し育む生命の源泉であった。この大地の無尽蔵な生成力が、人間や動物の母の産出力と結合され、大地女神として想像された。

しかし、冬になれば、草花は枯れ、木々は葉を落とし、穀物も取り入れられ、野山の獣や鳥たちもねぐらに籠り、虫たちはその短い一生を終えて大地に帰る。大地は、また、あらゆる生命がそこへと帰り、そこへと死し、そこへと衰えていく懐でもあった。

かくて、あらゆる生命の源泉であり、無限の生成力の源と考えられた大地は、同時に、あらゆる生命がそこへと帰っていく死の場所とも考えられた。人間も、動物も、植物も大地から生まれ、そして大地に帰っていく。そのため、古（いにしえ）の人々は、地底に、生きとし生けるものが帰って安らう死の国、冥界があると想像した。無限の産出力を司っていた大地女神が、愛人や愛し子を訪ねて冥界を訪問したり、あるいは冥界へ移動したり、あるいは冥界の女王になったりするという神話や伝承が生まれてくるのは、そのためである。

古代バビロニアの大地女神イシュタルの冥界訪問の神話は、その代表である。この地方では、命あるものが枯死する季節は、冬ではなく夏であった。

イシュタルは、愛人タンムーズを失った時、来る日も来る日も嘆き悲しんでいた。地上の人間たちも、太陽の極熱が厳しい乾燥をもたらす時、タンムーズの哀悼を続けた。農業神タンムーズが冥界に連れ去られたため、地上では野原も牧場も枯れ、穀物は実を結ばなくなり、家畜の数も少なくなっていった。居ても立ってもいられなくなったイシュタルは、冥界へ降り立ち、七つの門を通過して、ようやくのことで冥界の女王エレシュキガルのもとに辿り着き、タンムーズを返してくれるよう頼む。だが、エレシュキガルは承知せず、逆に、侍従ナムタルに命じて、イシュタルを邪気で叩きのめした。イシュタル女神の死は大地の豊穣の終末を意味したから、地上の神々はあわてて相談し、人獅子アスシュナミルを遣わす。アスシュナミルは、イシュタルを解き放つべしという地上の大神の命令をエレシュキガルに伝え、エレシュキガルはそれにしぶしぶ従い、かくて、イシュタルに生命の水をふりかけ、地上に帰した。

このよく知られたイシュタルの冥界下りの神話は、シュメールの大地女神イナンナが、年に一度冥界下りをするという神話に源泉をもち、その後、古代ギリシアの神話、例えば、デメテルとペルセポネ、アフロディテとアドニスの話にも影響した農耕神話である。大地女神の冥界下りは、灼熱の太陽のもとで命あるものが枯渇する真夏の砂漠の風土を背景に想像されたものであろう。

古代ギリシアの豊穣女神デメテルが、冥界の王にさらわれた娘ペルセポネを探すというよく知られた神話も、母なる大地の観念と死の観念とが深く結びついていることを示している。

シケリア島の森で花を摘んでいたペルセポネは、冥界の王ハデスに連れ去られ、冥界に着いてからも嘆き続け、食物に手を触れようともしなかった。母デメテルは、娘を探し求め、飲まず食わずでさまよい歩いた。娘が誘拐されたことを知り、半狂乱と

なった彼女は、裏切ったシケリアの地に旱魃と飢饉の災いを与えた。デメテルが神々との交わりを避け、エレウシスの神殿で過ごした間、大地は稔りをもたらさず、不毛となった。そのことを心配したゼウスは、ペルセポネが冥界で何も食べていなければ、彼女をデメテルのもとに帰すことにした。冥界で一度でも飲み食した者は、永遠にそこに留まらねばならない掟があったからである。ところが、ペルセポネは、ハデスが間際になって勧めたざくろの実を幾粒か食べていた。そこで、ゼウスの仲介で、彼女は、一年の三分の一は、ハデスの妻として冥界の女王となり、死と復讐を司り、後の三分の二は、デメテルのもとで暮らし、母とともに大地の豊かさを司ることになった。それゆえ、一年の三分の一の暑い夏には、大地は渇ききって不毛となり、後の三分の二の秋から初夏にかけては、麦が蒔かれ、生長し、取り入れが行なわれるようになったのだという。

デメテルとペルセポネは、母娘として、生命の産出、養育、保護という女性の原理によって深く結びついている。そのため、男としてのハデスは、この女性の深い結びつきから娘を奪う者と観念されたのである。デメテルがペルセポネを取り返したという観念は、この女性原理つまり産出力の回復を意味している。それゆえに、この回復によって穀物の豊穣が約束されたのである。

ペルセポネはデメテルの分身であり、その母と同じく、豊穣女神であった。そのため、デメテルやペルセポネが不機嫌で、食物を口にしなかった時には、大地は不毛だと考えられた。その豊穣女神ペルセポネが同時に冥界の女王ともなっているということは、無尽蔵な産出力をもった大地が、同時にあらゆる生命体を呑み込んでしまう力をもっているという観念を象徴している。

冥界移動

大地と死のイメージは、豊穣女神の冥界訪問という形ばかりでなく、すでにペルセポネの話にも表現されているように、女神そのものが冥界へ移動し、冥界の女王となるという形でも表現される。

古代エジプトの豊穣女神イシスも、冥界の王オシリスの妻として、冥界の女王となっている。イシスは、長い漂泊の末、夫オシリスを冥界の王として復活させ、その玉座の側に就く。死者の霊魂は、太陽神ラーの船に乗り、冥府（ツアト）の五つの国を経て、六番目のオシリスの法廷に出向き、地上で行なった行為を審判される。

わが国のイザナミも、多くの島々や神々を生んだところをみれば、明らかに、万物を無尽蔵に生み出す母なる大地の神であった。しかし、同時にまた、イザナミは、火の神カグツチを生んだために御陰（みほと）が焼かれて死に、地下の黄泉の国の神ともなっている。

イザナキに帰ってくるように説得されたイザナミは、ギリシアのペルセポネと同様、

黄泉の国の食物を食べてしまったので帰れないと言う。それでも、イザナミが黄泉神に相談してくる間、待ちきれなくなったイザナキは、見るなの禁に反して覗いてしまう。すると、イザナミの身体には蛆がわいて、身体の各部位に八種類の雷が出現していた。雷は、天と地を結んで雨をもたらし、大地に豊穣をもたらす神であった。大地の神イザナミの身体に雷が居座っていたのも、そのためである。

イザナミの恐ろしい姿を見て驚いて逃げ帰ったイザナキを、イザナミは追ってくる。そして、黄泉比良坂で、別離の言葉を交わした時、イザナミは、「わたしはあなたの国の人間を一日に千人殺してしまいます」と言う。かくて、イザナミは、黄泉津大神、冥界の女王として、死者の国に住むことになった。

ここでも、イザナミは、あらゆる生命を生み出す母なる大地の神であると同時に、それゆえにこそ、また、すべてのものに死をもたらす神ともなっている。生と死、生成と消滅は、大地を通して深く結びついていたのである。

冥界の女王

生きとし生けるものが大地から生まれ大地に帰るという信仰は、かなり古くからあった。命あるものを次々と生み出す大地女神が、同時に死者の世界の女王ともみられたのは、その表われである。大地の子宮は、死者の安住する所であり、休息する所であった。死とは、大地の母の懐に帰ることであり、母なる大地の胎内に回帰することであった。そのような観念は、死者の屍を集落近くの野や山に埋葬した頃以来の観念であった。それ以来、大地は死者が永遠に眠るところと考えられ、大地の女神はその死者の世界を支配する神と考えられたのである。古代インドの祭式集『アタルヴァ・ヴェーダ』(一二・一・一四)でも、「大地は母、われは大地の子、……汝より生まれし有情は汝に帰る……」と言われている。

大地は、生きとし生けるものすべてを呑み込んでしまう偉大な力と考えられていたから、大地女神は、また、人間や動物を次から次へと殺していく残忍な女神としても想像された。古代エジプトの大地女神ハトルはその例である。

自らの治世が長くなり、人間が次第に従わなくなったことを嘆いた天上の神ラーは、人間を滅ぼすため、自分の目をハトルの女神に変え、人間を次々と殺させた。ハトルは、国中を駆け回り、自分の仕事に熱中した。その有様をみたラーは後悔し、せめて生き残った人間だけでも助けてやりたいと思い、薬草と大麦と人間の血で作ったビールを用意し、復讐の女神ハトルが一日の殺戮を終えて休む場所へ置いた。ハトルは、それを喜んで飲むうちに、酔いがまわってきて、人間のことなど忘れてしまった。その時、ラーは、彼女に、そろそろ帰るようにと声をかけ、引き取ってもらったという。

古代エジプトで、新年の第一日に、ビールを作ってハトルの女神に供え、人々が踊り明かす祭りがあったのは、このハトルの帰還を記念してのことであった。元日は、弱まっていた太陽の力が再び息吹き返してくる日であり、そこからやがて春が訪れ穀物が育つ境目の日であった。この日を境にして、人間の生命力も長い衰弱から甦ると考えられていたのである。人間の殺戮を事としたハトルの女神が帰って行くという空想は、そのような観念から生まれている。

冥界の神という側面が強調される古代ギリシアのヘカテも、もとは豊穣を司る小アジア由来の大地女神であった。ヘシオドスの『神統記』（四一―四五三）によれば、ヘカテは、ゼウスがいかなる神よりも崇拝する重要な女神であり、天、地、海にわたる支配権をもつという。ヘカテは、また、牛や山羊の群れを増やし、子供を養育する神で、ヘカテに祈る者には福運が訪れると言われる。しかし、同時に、ヘカテは、そのような地母神的性格をもっていたから、ペルセポネと同様、地下の冥界の女主人ともみられた。さらに、ヘカテは、この冥界から出てきて、闇夜を支配し、好んで墓地をさまよい、魔法と妖術を守護し、怪奇な事象を引き起こし、多くの者を滅ぼしたともいう。夜道を支配し、運命を司るとも考えられたヘカテは、アルテミスと同様、十字路の守護者とも考えられ、死者を地下に導く月の神ともみられていた。

北欧の冥界の女王であり死の神であるヘルには、もはや豊穣神の面影はなく、もっぱら地下の地獄を支配する女神となっている。ヘルは、最も邪悪な神ロキと悪の権化で女巨人アングルボダとの子であったから、様々な災いをなす邪悪な神と想念されている。ヘルは、氷のように冷たく、狼のように恐ろしい顔をして、体の半ばが鉛のように青白く、半ばが血のように真っ赤であった。神々の王者オーディンは、このヘルを、後の災厄とならないようにと、氷寒世界の底に押し込めた。だが、ヘルは、この地底で死人のための地獄をつくった。死人は、この地獄に達するために、悲惨な旅を続けねばならなかった。死人の中で邪（よこしま）な行ないをした者は、この地獄で、言いようのない苦しみを味わわされたという。冥界の女神ヘルは、時折、三脚の白い馬か箒（ほうき）に乗って、人間世界に出てくることがある。そして、大きな熊手を振り回して人間を掻き集め、地獄に連れ去る。ヘルは、地獄で死人を支配し、世界破滅の光景を夢見ながら、神々に復讐することのできる時を待っているという。

あらゆる生きとし生けるものを呑み込んでしまう大地の観念から、北欧の人々は、厳しく暗い風土を背景にして、たくましい想像力によって、おどろおどろしい地獄とその女王像を想像したのである。

スコットランドのベーラは、冥界の女王ではないが、地上の草や木や穀物すべてを枯らし、萎えさせ、不毛にしてしまう冬の女神であった。老婆の形をしていたベーラは、背丈は高く、一つ目で、視力は氷のように鋭く、鯖のようにめざとく、顔色は陰

鬱で、どす黒い青色だった。ベーラは、世界の四つの赤い国に君臨していたが、支配の及ぶ期間は冬の間だけで、春が訪れると、ものみな彼女に反抗するようになる。それでも、ベーラは、最後まで全力を尽くして、植物の生長を妨害した。冬の間中、虜にされていたブライド姫が、春近くになって自分の息子アングスに連れ去られていった時も、ベーラは、八人の醜い召使の鬼婆に後を追わせ、自らも嵐と霜で荒れ回り、魔法の槌で大地を打ち続け、土を氷結させようとした。そのため、国中に不幸と災害がもたらされ、羊や山羊や馬や牛が死んでいったという。

このように、冬の女神ベーラは、スコットランドの荒涼とした冬の気候を反映し、恐ろしい老婆として想像されているのだが、しかし、彼女も、もとは、大地の豊穣を司る女神だったと思われる。もともと、ベーラは、スコットランドのすべての神々の母と考えられていた。実際、ベーラの子孫には、光の精や海の精、緑の魔女など多くの種族が生まれ出ている。しかも、彼女は、何百年も生き続けて不死であったという。また、ベーラは、スコットランドの河や湖水、山や谷、島をつくったとも伝えられているところをみれば、大地を形成する造化神であったとも思われる。豊穣の女神ブライドやその夫で夏の王アングスは、むしろ、この大地女神ベーラの分身だったとも考えられる。豊穣の神がベーラから分かれ出てしまったために、その後のベーラは、不毛をもたらす醜い冬の女神に落ちぶれてしまったのであろう。そのように考えることができるとすれば、ここでも、生成・豊穣を司る大地女神が、同時に、すべてを呑み込み、枯れ、萎えさせてしまう不毛の女神になるという二重性が暗示されていることになる。

インドの大地女神カーリーも、血を好み殺戮を喜ぶ破壊神に転じている。カーリーは、ヒンドゥー教でも最有力の神で、第一の右手に血のついた剣を、第二の右手に三叉戟（さんさほこ）を、第一の左手に切り取った生首を、第二の左手に血を受ける頭蓋骨を持ち、首には人頭をつないだ輪をかけた神像として表現されている。カーリーは、特に動物の血を好むと考えられたので、その祭りには、無数の山羊が首をはねられ、その血が犠牲として捧げられた。

恐ろしい破壊神として想像されているカーリー女神も、もとは、太女神から生まれ出てきた神であった。昔、シュムバとニシュムバという兄弟の魔神に支配されようとした神々は、太女神に助けを求めた。すると、太女神は、シヴァの神妃ドゥルガ（パールヴァティー）の姿をとって現われ、魔神の手下と戦った。この時、この女神の怒りの顔から恐ろしい顔をしたカーリーが生まれ、口を大きく開き、目を血走らせて、魔神たちと戦い、その首を取った。カーリーは、魔神たちの血から生まれた邪悪な神たちも大きな口で飲み込み、その血も飲み尽くして殺した。

カーリー自身もシヴァの神妃とみられているが、彼女は時間と黒色の女神とも考えられていた。ギリシアのクロノスと同様、すべてを呑み込んでしまう神と考えられた

のも、そのためでもある。カーリーは、生きとし生けるものに命を与えると同時に、すべてのものに死と消滅をもたらす大地の母だったのである。

4　再生と循環

再　生

命あるものが大地から生まれ大地に帰るという〈生から死〉への方向は、また〈死から生〉、つまり大地に帰ったものが再び大地から生まれてくるという再生の思想へと発展していく。

冬が来て、大地のもとに萎え枯れていった草も、春になれば、芽を吹き、花をつける。すっかり葉を落とし、死んだかに見えた樹木も、春になれば、若々しい緑の葉をつけ、繁茂する。秋になって刈り取られた穀物も、種となって冬を越し、春に蒔けば、田畑から再び芽を出し、豊かに実をつける。野山の木々の下に生息する虫たちも、冬の訪れとともに死し、死骸を大地の中に埋め、土くれとなって消えていくが、虫たちの生んだ卵は、長い冬籠もりの後、草花の芽吹きとともに再び生まれ出てくる。

これら植物や動物の死と再生を司っている四季の移り変わりも、いわば太陽の死と再生によってもたらされる。十二月、冬至の日、太陽の力は最も弱くなり、太陽は大地の果てに沈んでいくが、しかし、この日は再び太陽が甦ってくる日でもある。古来、この太陽の再生を祈って、多くの祭りが行なわれてきた。

大地は、生きものが死し、死したものがそこから再生してくる場であり、母胎であった。生とは大地の胎内を離れることであり、死とは大地の胎内へ帰ることである。とすれば、その大地の胎内から、再び命あるものが生まれ出てくると太古の人々が考えたのも、不思議なことではない。

インドのヒンドゥー教の考え方でも、世界は創造と破壊、死と再生を繰り返すものと考えられていた。生なくして死はない。死なくして生はない。だからこそ、シヴァ神にしても、カーリー女神にしても、徹底的にこの世のものを破壊する強大な力と考えられていると同時に、あらゆるものを生み出す偉大な力でもあった。破壊は同時に再生につながる。大自然は、暴風雨や洪水、旱魃や地震などによって、人間に災厄と破壊をもたらすとともに、植物を育て、穀物の豊穣を約束し、山野の動物を繁殖させてもくれる。大地は、災厄や破壊をもたらすと同時に、恩恵と創造の偉大な力でもある。インドの神々の観念には、この大自然の相反する二重性が反映している。大地は、死と再生、破壊と創造を繰り返し、かくて永遠の生命を維持する偉大な原動力と考えられていたのである。

古代バビロニアの太女神イシュタルが、死んだ愛人タンムーズを求めて冥界に下り、彼を連れ帰ったという話も、大地の生命力の死と再生を象徴している。イシュタルが

タンムーズを求めて冥界に下った時には、地上では作物が稔らず、家畜も増えなかった。しかし、イシュタルがタンムーズを連れて地上に帰って来た時には、万物の生気は再び甦ったのである。このイシュタルの冥界下りからタンムーズの復活までを聖なる劇にして行なわれた儀礼は、新年祭に続いて行なわれ、タンムーズの復活する歓喜の日に大団円を迎えた。そして、これを境にして新年が始まった。古代バビロニアの人々は、新年の始まる月（三〜四月）を、イシュタルとタンムーズが床を共にする月と考えた。この新しい月を境にして、草や木や穀物の生命力も甦ってくると考えられていたのである。

イシュタルとともに中東地方の最古の太女神のひとりに数えられるアスタルテは、古代フェニキアのビブロス出身の月の神であった。各地に残るアスタルテ像は、乳房を押さえたりあらわにしたりしているが、それは、乳房が生命の養育の象徴だったからである。シリアやエジプトでは、毎年十二月二十五日になると、アスタルテの聖なる劇を演ずることによって、天界の処女アスタルテから太陽神アドニスが再生してくるのを祝っていた。これは、冬至の祭りである。アドニスはアスタルテの息子でもあり同時に恋人でもあった。アドニスは冬の動物である猪に突かれて死ぬが、半年の間だけ地上に戻り、愛する人と一緒に過ごすことが許される。このアスタルテとアドニスの信仰は、レバノンからアレクサンドリア、アテナイからローマにまで広まり、特に、女性に人気があったという。彼女たちはアスタルテと自分を同一視し、アドニスのために泣き、アドニスの復活を喜び、祝った。聖母マリアが神の子イエスを産んだというキリスト教の言い伝えの原型の一つは、このアスタルテとアドニスの祭りにあると言われる。アドニスもイエス同様、不幸な最後を経て復活したのである。

古代ギリシアのエレウシスの祭儀は、豊穣神デメテルが娘のペルセポネを取り戻したことを記念するものであった。毎年秋に行なわれる本祭は、一日におよぶ行列で始まり、黄金時代の古式に則り、デメテルを祀る各聖堂に地域の産物を供え、巡礼していくものであった。さらに、ペルセポネの失踪と帰還の物語が、音楽と舞踊付きで演じられた。

小麦の種は、夏の間、暗い地中に埋められて保存され、秋になって蒔かれ、再び芽を出してくる。この穀物の死と再生が、ペルセポネの冥界への誘拐と冥界からの帰還の神話に象徴される。エレウシスの祭儀は、これを盛大に再現するものであった。この祭儀で行なわれる秘儀では、女神の再生にちなんだ儀礼が行なわれ、その儀礼への参加者の再生を約束した。人々は、この秘儀に参加することによって、自分たちが、そこへと死し、そこから再生する大地の子であることを体験したのである。

古代エジプトの大地女神イシスも、バラバラに斬り刻まれたオシリスの体の断片を集めて、夫を復活させている。「見よ、われ、汝がそこに横たわるを見つけたり、偉大なる者は力萎えたり、…… オシリスよ、汝、横たわりおる不幸なる者よ、立ち上がりて生きるべし、われはイシスなり」と唱えると、オシリスは立ち上がり、命を得て、

イシスと交わり、かくて生命は途切れることなく続いたという。エジプトの人民に多くの知恵や技術を教えた英雄神オシリスも、母なる大地の女神イシスの力によって再生してきたのである。ここにも、大地のもとでこそ死したる者も再生し、かくて生命は永遠に続くという思想が反映している。

フィンランドの伝承『カレワラ』に出てくる放埒な自然児レミンカイネンも、母親の力で死から生へと甦っている。姿の見えなくなったレミンカイネンを、半狂乱になって尋ね歩いた老母は、息子が冥界の黒い河水の底に死に絶えていることを知る。彼女は、名工イルマリネンに巨大な鉄の熊手を作ってもらって、はるばると死の河に赴き、その熊手でわが子を見つけ出すが、体の各部はバラバラになっていた。それをつなぎあわせ、生命の香油をわが子の体に塗りつけると、レミンカイネンは甦ったという。

わが国のオホクニヌシも、八十神（やそがみ）たちに火で焼いた大きな石で殺された時、母神や女神の力で甦っている。オホクニヌシの死を悲しんだ母神が天上のカムムスヒに相談したところ、カムムスヒは、キサガヒヒメとウムガヒヒメを遣わして、オホクニヌシを生き返らせてくれた。キサガヒヒメが貝殻を掻きけずり、その粉を集め、ウムガヒヒメがこれを母の乳汁として塗ったという。オホクニヌシが、二度めに殺された時にも、母神が助け出して生き返らせ、スサノヲのいる根（ね）の堅州国（かたすくに）に迷がしている。

レミンカイネンもオホクニヌシも、ともに、生命の香油や母の乳汁によって生き返っている。しかも、どちらも、母の配慮や、母の願いを聞いた女神の配慮によって復活している。それは、ガイアの生んだ奇蹟の食物の汁によって、巨人のギガスたちが不死の命を与えられたのと同じである。いずれも大地女神の再生力を象徴している。

また、レミンカイネンにしても、オホクニヌシにしても、種々の苦難に会って死し、そして復活している。これは、成年儀礼を反映したものであろう。成年儀礼は、少年の魂が死して、成年の魂へと再生する儀礼であった。ここにも、死と再生のテーマがある。この時いつも母神の助力があるのは、おそらく、大地に根差した女性の偉大な生命力に加護されなければ、英雄はその任務を全うできないという観念があったからであろう。

樹木と洞窟

命あるものは大地から生まれ大地に帰り、そして、また大地から再生してきて、かくて生命は永遠であるという思想は、多くの神話の中の死と再生の物語の中で語られるばかりでなく、古代世界では、樹木や洞窟などに託してもイメージされた。

樹木は、大地から生え出て生長し、大地に根を張って長い生命を保ち、枯れても、また次の世代の芽を出し、かくてその生命を維持させる。それは、大地における生命

の永遠、死と再生を象徴するものであった。

北欧の古代人も、伝承された神話『エッダ』（グリームニルの歌　三一―三五）の中で、世界樹イグドラシルについて語っている。樹冠を高く掲げるこの聖なる木のもとには大地があり、三本の根は深く地底の冥界（ミズガルズ）に伸び、その根には生命の源であるミズガルズの蛇が無数にからんでいる。蛇も木も、死と再生の象徴であった。この聖なる樹木から、人々は絶えず啓示を受けていたのである。

ギリシア人も、デルポイでは、アポロンの月桂樹に助言を仰ぎ、ドドナでは、ゼウスのオーク樹に願をかけた。古代ケルトのドルイド教の神官たちも、オーク樹から神託を得ていた。

ヨーロッパのクリスマス・ツリーも、もとはキリスト教以前のゲルマン人の樹木に対する信仰に発している。太陽が死して復活する冬至に常緑樹を飾るのは、樹木が再生と永生の象徴だったからである。これが後、キリスト教と結合され、聖母マリアからのイエスの生誕を祝う木になっていったのである。また、十字架に架けられたイエスが死して復活したという信仰も、この樹木の信仰と深くつながっている。メイ・ツリー（五月の木）にも、同様な再生祈願の意味があった。

洞窟も、死と再生、そして生命の永遠の象徴であった。世界の各地で、太古に、洞窟が死体を埋葬する葬場に使われていたのも、そのためである。死者は、冥界の入口である洞窟の穴から、母なる大地の子宮に帰り、再びそこから再生してくるものと考えられた。

イエスが聖母マリアから生まれてきた場所は、ベツレヘムにある馬屋ではなく、洞窟であったという別の言い伝えがあるのは、キリスト教以前の古代信仰からきている。そこには、子供が、母なる大地から、処女精霊の子として、洞窟、つまり大地の子宮から生まれるという信仰があったのである。

循　環

大地には、何よりもまず草や木が生え、そこを獣たちが這い回り、この草木や獣とともに人間たちが生活している。しかも、これら大地から生まれ出てきたものは、また同じ大地に帰り、これを繰り返す。大地のもとでは、植物と動物と人間の間に、生命の連鎖があり、連帯性があった。大地の霊力、生命力は、大地から出て、あらゆる生きものの中を通って、大地に帰り、これが永遠に繰り返される。この生命の永遠回帰、永遠の循環こそ、原初の人々が信じて疑わなかったことであった。この世界に存在するものがどんなに変転しようとも、宇宙の目に見えない生命力は果てしない循環の中で保存される。

このような生命の永遠の循環の中では、時間も循環するものととらえられた。時間は、近代のように直線的に前へ前へと進むのではなく、ちょうど四季が移ろうように、あるいは月が満欠を繰り返すように、絶えず始源に回帰して再生し、円環を描くもの

と考えられた。去年村はずれで啼いて初夏の訪れを告げた郭公は、今年もまた同じように啼いて初夏の訪れを告げる。どの植物もいつも変わらぬ周期を描いて、忘れずに花を咲かせ、実を結ぶ。太陽も、冬至にせよ、夏至にせよ、いつの年も、同じ山の端から顔を出す。すべては繰り返し、回帰してくるのである。

ギリシアの時の神クロノスが、自分の生んだ子を呑み込んでしまったという神話も、時間の円環性を語っている。時は、創造する力も、すべてを無化する力をもっているからである。インドのカーリーが、創造女神であると同時に、すべてを破壊し呑み込んでしまう恐ろしい破壊神と想像されたのも、彼女が時の神でもあったからある。時はすべてを無化して、始源の混沌に帰し、そこから再びすべてを生み出す。カーリーは生成そのものであり、永遠の流動である。万物はそこから生まれて、そこへ消滅し、永遠の循環を繰り返す。ここでは、存在は生成に還元されている。生は死であり、死は生である。

大地女神の数多くの神話が語る生成・豊穣・死・再生・循環の物語は、宇宙の根源的生命の再生と循環を象徴的に語りながら、宇宙生命の永遠を物語っている。われわれの死も、宇宙生命への回帰にほかならない。肉体も魂も、ともに死を通して宇宙生命へと帰還し、再生してくる。この宇宙の根源的生命への帰一の感情こそ、宗教がその発生以来求めてやまなかったものであった。

Ⅲ　死と再生

1　魂と肉体の分離

魂と肉体

古代世界では、どこでも、人間は魂と肉体が合体したものと考えられてきた。肉体は、いわば魂の宿る器であった。そして、死とは、この魂と肉体が分離することに他ならなかった。死とは、肉体の器から霊魂が去っていくことだと思われたのである。しかも、霊魂が離脱した肉体は滅びるが、霊魂は滅ぶことはない。人は死ねば霊魂になり、この世とは別の世界へ旅立つものと想像されていたのである。

古代エジプトでも、人が死ねば、その霊魂は肉体から分離すると考えられていたが、この分離する霊魂に、〈カ〉と〈バ〉という二種類の霊魂があると思われていた。〈カ〉の方は、その人が誕生するとともに備わっていた個性をもった人格霊であり、その人が死んでも、この個人霊は墓の中でミイラとともにとどまっている。だが、時折、墓から出てきてさまようこともある。また、被葬者の彫像や肖像画の中にも宿る。この霊は、特に、供物が供えられることを切望しているという。他方、〈バ〉と言われる霊魂は、人間を心身ともに動かしている霊力であり、これは、人間が死ぬと、天上の太陽神ラーや地下のオシリス神のもとに旅立つ。この霊魂は、大抵、人間の頭をもった鳥の姿で表わされ、墓の中にはとどまらずに、あの世に飛び去るものと想定されていたのである。

古代中国にも、これとよく似た考えがあった。ここでも、死は霊魂と肉体の分離と考えられていたが、この肉体から遊離する霊魂に〈魂（こん）〉と〈魄（はく）〉の二種類を考えた。〈魂〉の方は、肉体から完全に分離した無形の霊を意味し、これは、人が死ねば、肉体から離脱して天に帰るとされていた。他方、〈魄〉の方は、肉体に付随した霊魂であり、これは、人が死んでも、死骸とともに墓の中に住み、土に帰っていくとされていた。ここには、天と地を万物の父母とする古い考えがある。だが、この魄の方は、ぞんざいに扱ったりすると、鬼（き）となって地上に現われ、生者に害を及ぼすという。

古代インドでも様々な霊魂が考えられているが、一般に、霊魂は、通常、肉体の中にあって、肉体が傷つけられても傷つくことなく、肉体に関わりなくあらゆるところに出かけていくことができると思われている。霊魂は、生きている時には心臓にある

と想像されているが、人の死とともに、この霊魂は肉体から離脱していくと考えられた。

古代ギリシアでも、例えば、ホメロスでは、魂（プシュケー）は、生命の源と考えられているが、死とともに、すぐに肉体を離れ、薄暗い冥界へ旅立つとされている。ホメロスの段階では、まだ、この魂と肉体の関係は、単純素朴なものであった。だが、その後の、例えば、オルフェウス教では、これに倫理的・宗教的意味合いが加わり、その霊魂観や肉体観はより体系的なものになっていった。オルフェウス教の考えによれば、肉体（ソーマ）は魂の墓（セーマ）であり、魂はこの肉体という牢獄から解放される必要がある。したがって、肉体からの魂の離脱、つまり死は、むしろ魂の解放であり、解脱であると受け取られた。この肉体からの魂の解放を、生きているうちから訓練するために、オルフェウス教は、魂の浄化のための種々の儀礼や修行を行なったのである。

葬送儀礼

古代世界の各地で行なわれていた葬送儀礼は多種多様であるが、どれも、それぞれ、以上のような魂と肉体についての考えに基づいている。

古代メソポタミアでは、一般に、家の床下あるいは共同墓地への埋葬が主だったようである。死体は、手足を折り曲げて横向きに寝かされ、葦の敷物に包まれたり、木製あるいは土製の棺に入れられた。王や主だった人物に対しては、より念入りな埋葬が行なわれたが、エジプトと比べた場合には、メソポタミアは、どちらかというと薄葬だったようである。それでも、死者は、死者が使っていた貴重な持ち物や地下の神々への供え物とともに埋葬され、哀悼の儀礼が行なわれた。しかも、この場合、死体が正しく埋葬され、その後、その埋葬場所近くで追悼儀礼が途絶えることなく行なわれる必要があった。そうでなければ、死者の霊は、この世に迷い出て、生者に取り憑き、災いをもたらすとされていた。

逆に言えば、敵の墓を破壊しこれを暴くことは、敵の霊を不穏にし、供養できぬ状態におくことであったから、それは敵に対する最大の恥辱であった。このことは、古代エジプトでも、古代ギリシアでも、古代中国でも、どこでも同じである。

古代メソポタミアや古代ギリシアばかりでなく、世界各地に分布している土葬の習慣は、旧石器時代以来の極めて古い埋葬儀礼であるが、これは、生きとし生けるものは大地から生まれ大地に帰るという考えに基づくものである。大地は、そこからあらゆるものが生まれてくる母胎であり、人は、死ねば、再び母なる大地の胎内に帰るのだと観念された。とすれば、また、大地のもとに葬られた死者も、再び大地から甦ってくるものとも考えられていたことになる。

古代エジプト人が、死体をミイラにして保存することに異常なばかりの情熱を傾けたのは、何が機縁になったのか、よくは分からない。だが、これは、もとは、乾燥し

た砂漠の砂の中に直接死体を埋葬することから始まったようである。乾燥した気候のために、死体は自然にミイラ化した。ところが、埋葬が次第に手厚くなり、墓の中に埋葬されるようになると、この自然乾燥が効かなくなり、人工的な保存法がとられるようになった。かくて、エジプト人は、ミイラ作りに熱中し、その技術を極限にまで発達させていったのである。

古代エジプトでも、人が死ねば、その魂は肉体を離れ、天上あるいは地下に移り行くものとされていた。しかし、また、その魂は、いつの日か戻ってきて、死者は復活するとも信じられていたのである。そのために、魂が戻ってくる容器としての肉体を保存しておく必要があった。エジプトでは、このミイラとともに、死者が現世において使っていたものや食べ物など、いろいろなものが埋められた。

一方、古代インドの葬制は複雑であって、時代とともに大きく変化している。アーリア民族が北西インドに進入する以前には、彼らは遊牧を生業としていたから、その葬法は、おそらく、今日の遊牧民同様、地上に横たえた死者の亡骸に土を覆うだけの薄葬だったであろう。ところが、アーリア民族が北西インドに進入してくると、彼らは、土着の原住民を征服したとはいえ、栽培農業を覚え、土着の習俗を取り入れ、自身の習俗を変えていった。葬法についても、彼らは、初め土葬を原則としていたようであるが、やがて、インダス文明を築き上げた先住民族の習俗にならって、火葬に切り換えていったようである。

『リグ・ヴェーダ』の葬送の歌でも、異なった二つの葬法が歌われている。「汝のために、われ、大地を、汝の周りに高く支う。われこの土塊（つちくれ）を置くとき、危害を蒙（こうむ）らざることを、祖先が汝がため、この柱を支持せんことを」（一〇・一八・一三）という葬送歌は、明らかに土葬、しかも、死者に土をかけるだけの塚葬だったことを反映している。

「他方アグニよ、彼を焼き尽くすなかれ、過熱するなかれ、皮膚を焦（こ）がすなかれ、その身体を。汝が彼を調理し終りし時、彼を祖先に送れ、ジャータ・ヴェーダスよ」（一〇・一六・二）という葬送歌は、明らかに火葬を反映している。アグニは火の神であり、ジャータ・ヴェーダスはアグニのあだ名だからである。この葬法の変化は、古代インドにおける土着文化の吸収過程を反映しているものであろう。かくて、火葬の習慣は、インドを中心として次第にアジア一帯に広がっていった。

古代ペルシアのゾロアスター教の鳥葬の習慣は、世界の葬制でも珍しいものとして、比較的よく知られている。ゾロアスター教でも、人が死ねば、その霊魂は、死者の肉体からあの世へと旅立っていくものと考えられた。ところが、エジプトとは違って、ペルシアでは、後に取り残された死者の肉体は、死後の運命とは無関係であるばかりか、災いをもたらすものとさえ考えられたために、死骸をできるだけ速やかに処理する必要があった。鳥葬の習慣は、そのためのものであった。人が死ぬと、その死骸は

沈黙の塔と言われる無蓋の塔に運ばれ、死体は禿鷹などによって瞬く間に食い尽くされた。

畏怖と哀惜

古代世界でも、生者の死者に対する態度は、相反する二重の心理に支配されている。一方では、死者の遺骸や死者の霊は、畏怖すべきもの、忌避すべきものとされ、他方では、また、それらは、哀惜すべきもの、悲しく愛しきものと受け取られた。生者は、死者を避けようとすると同時に、死者を悼み悲しんだ。人々は、放っておけば腐敗していく死体に恐怖の感情を懐くとともに、その死体をいつまでも確保しておこうともした。死霊に対しても、世話をせず追悼されなかった霊は災いをもたらし、生者に祟るものとして、恐れた。だが、また、逆に、よく世話をし追悼すれば、生者を守護し恩恵を施すものとも考えられたのである。ここにも、死者に対する畏怖と哀惜の二重感情が働いている。

古代の葬法でも、死者に対する二重の態度が見られる。一方には、死体の速やかな処理があるかと思えば、他方には、死体の極端なばかりの保存があり、一方では、死霊に対する恐怖があるかと思えば、他方では、死霊へのねんごろな世話が見られる。古代世界で、死者の亡骸に土を覆うだけの塚葬が行なわれたり、火葬や鳥葬による死体の速やかな処理が行なわれたのには、霊魂が離脱していった後の死骸に対する畏怖の感情が見られる。他方、死者の使っていた持ち物や食べ物とともに丁寧な埋葬をし、哀悼の儀礼が繰り返し捧げられたところには、死者に対する深い哀惜の感情が見られる。

古代バビロニアでも、埋葬されずに放置された死者の霊は、悪霊となって生者に害を及ぼすとされた。それは、安らかに眠る場所を見つけることが出来ず、水も食べ物もなく、飢餓にかられて地上に迷い出、生者に取り憑くと考えられた。その他にも、子孫がなく供養してもらえない死者の霊、変死者や恨みをのんで死んだ者などの霊も、悪霊となって人々に取り憑く。また、そのような不幸な霊でなくとも、何につけあの世からさまよい出た亡霊は、夜道をうろつき、荒れ地で人を待ち伏せ、取り憑く。取り憑かれた人は、病気や災いなど、必ず不幸に陥るとされた。そのために、古代バビロニアでは、悪霊を払う儀式や呪文が重要視されたのである。

しかし、死者の亡骸を正しく埋葬し、死者の霊を正しく世話した場合には、その霊は、逆に、生者を守ってくれた。古代バビロニアでも、死者に対しては、毎月新月の日に食べ物や水が供えられ、死者の名が唱えられ、熱心に追悼儀礼が行なわれた。

古代エジプトでも、例えば、「テーベの谷の祭り」では、その祭りの間、家族たちは川を渡って向こう岸に行き、墓の扉を開けて中に入り、そこで死者たちとともに食事をした。さらに、聖別された花を手にした祭司がこれに加わって、死者たちに花を捧げ、彼らに象徴的な命を授ける儀式を行なった。古代エジプト人が熱中したミイラ作

りも、死体そのものを永遠に保存し、死者の霊が帰ってこられるように世話をすることに他ならなかったから、ここにも、死者に対する深い哀惜の念があると言わねばならない。

葬送儀礼は、どこでも、死者の亡骸を葬り、死者の霊をこの世からあの世へ送る通過儀礼である。したがって、他の通過儀礼同様、葬送儀礼も、死というものを一定の時間的な経過をもった過程としてとらえる。ファン・ヘネップによれば、一般に、通過儀礼は、当事者が社会的な母体から引き離される「分離」の期間と、試練を経て心の状態を変容させる「移行」の時期と、変容した当事者が再び共同社会に統合される「統合」の時期の三つの局面を備えていると言われる。死の儀礼も、死者の埋葬の儀礼と、死者の霊のまだ迷っている時期の儀礼と、死者の霊が最終的にあの世に住む時期の儀礼と、三段階に分かれる。だから、死の儀礼では、死者の埋葬ばかりでなく、死者の霊のあの世への旅立ちを助け、死者が無事にあの世へ到着するように、生者が死者に配慮をすることが必要になってくる。

古代インドでも、儀礼行為は、死者を救うための儀礼として重要視された。『ヴェーダ』に基づいた正しい儀礼行為は、死者があの世に無事辿り着き安らうために必要不可欠なものとされた。そのため、今日のわが国同様、死者が火葬に付された後も、遺族によって、死者の霊や祖先の霊に食べ物が供えられ、死者をあの世に送り届ける儀礼が行なわれたのである。

2　冥界の諸相

様々な冥界

だが、一体、死者の霊の行くあの世、冥界はどこにあるのであろうか。

古代世界でも、死者の霊の辿りつくところ、つまり冥界のありかは、様々に想像されてきた。だが、その中でも、冥界は地下にあるとする地下他界観は、かなりの程度普遍的に見られるようである。

古代エジプトでも、死者の霊は、太陽の沈む西の果ての国に行くものと信じられていた。死者の霊は、舟でナイル川を西の方に渡り、日没後の太陽が通過する十二の区域によって構成される冥府（ツアト）へ旅立つと想像されていた。古代エジプトのファラオの墓（ピラミッド）から庶民の墓に至るまで、多くがナイル川の西岸の砂漠中にあって、東側には少ないのは、死者の霊が太陽の没する国に行くという考えが広く普及していたからであろう。通常、地下他界と言えば、死者を埋葬した地中のことを意味するから、夜の太陽が運行する十二の区域をもったエジプトの冥府は、厳密に言えば、地下他界の中には入れることができないかもしれない。しかし、それでも、古

代エジプト人は、大地の遙か遠い下方に冥界があるとは信じていたのである。

しかも、よく知られたエジプトの『死者の書』（九九）によれば、この世とあの世の間には大きな川があって、そこの舟や渡し守の名を知らなければ、死者の霊は川を渡ることができない。冥界の十二の地域は、それぞれが、夜の太陽の運行する一時間に当たっている。そして、各地域には門があり、三人の守護神が守っている。死者の霊は、燃え盛る火の中をくぐり抜け、怪物や奇怪な動物に脅されたから、呪文によってそれらに打ち勝たねばならなかった。怪物の中でも恐ろしいのは、太陽神の大敵で巨大な蛇の姿をとったアポピという大蛇である。この大蛇は、オシリスの弟セトの化身と言われ、常に太陽を呑み込もうとして待ち構えている悪の権化で、冥界の女神たちに取り囲まれて、穴の中にとぐろを巻いている。死者の霊は、このような恐ろしい怪物に脅されながら、最後に、オシリスの法廷に臨む。

古代バビロニアでも、冥界は夕日が沈む西の方の地下にあり、人は、死すれば、死霊となって、この冥界へ旅立たねばならないとされていた。冥界には、七人の門番に守られた七つの門があり、死者の霊は、これを一つずつくぐって行かねばならなかった。冥界の国は暗く、死者たちは埃や土を食べて暮らしている。この冥界を支配しているのは、冥界の女王エレシュキガルとその夫ネルガルである。エレシュキガルは、もとは大地の女神であり、特に、すべてを呑み込み死に至らしめる大地を象徴する地下の女神となった。また、ネルガルは、もとは太陽神で、特に、地平線に沈んだ後の太陽を表わす闇の世界の神であり、この世に戦争や疫病や荒廃をもたらす神と信じられていた。死者の霊は、この冥界の神々とその家来の悪魔たちによって監視され、地上に出られないようにされている。よく知られた『ギルガメシュ叙事詩』（Ⅶ・四・三四―三九）の中でも、冥界は出ることのない家、戻ることのない家、光を奪われた家とみられ、そこでは、死者たちは埃や土を食べ、鳥のように翼のついた着物を着けて、暗闇の中に住んでいると想像されている。冥界は陰惨で、嘆くべきところと思われていたのである。

古代ギリシアでも、死者の霊は、多くの場合、墓の中または地下に生活しているとされているが、しかし、その死者の霊の住む冥界が西の果ての遠いところにあるとされている場合もある。死者の霊は、亡霊となって、この薄暗い冥界に住んでいる。しかも、ホメロスの『オデュッセイア』（Ⅹ・Ⅺ）によれば、この冥界は、ステュクス、アケロン、コキュトス、プュリプレゲトンの四つの川に囲まれた場所にあるという。この冥界の国には、ゼウスの兄弟ハデスとその妻ペルセポネが君臨している。トロヤ戦争の戦友アキレウスの霊がオデュッセウスに語っているように、死者の間の王となるよりも、生きて、暮らしの糧もあまりない土地を持たぬ農奴の方がましだと嘆いているほど、この冥府は、暗く陰惨なところと想像されている。

この点では、古代ギリシアの冥界観は、古代中国に似ている。古代中国でも、死者の霊は、地下にある黄泉の国に行くことになっていたが、この黄泉の国は、ほの暗く

寂しいところで、人は必ず死して赴かねばならないところだとされていた。

古代北欧の諸族でも、冥界は、陰鬱で味気ない世界とみられ、氷寒世界の奥底にあると想像されている。そこには、地底から天に突き貫け世界を世界樹、イグドラシルの根の一つが突き刺さっており、誉れなき死者は、誰もがこの冥界（ヘル）へ行かねばならない。死者は、山々を越え、森を抜け、川を渡り、霧と暗闇を経て、やがて、この世とあの世を区別する門に出合い、それを越えて行かねばならない。あるいは、また、この世とあの世の境にある川、ギョル川に架かる橋を渡らねばならない。この冥界には、冥界の女王ヘルが住み、死者を閉じ込め苦しめているという。

古代ペルシアのゾロアスター教でも、この世とあの世の間にチンワト橋という橋が架かっており、ここで善人と悪人の運命が分かれるとされる。四つ目の犬がこの橋を守っており、この世とあの世の境を守護している。死者は、この橋を渡らねばならない。しかも、この橋の下には悪魔が待っていて、死者を引きずり落とそうとしている。善人の場合は、この橋が広くなって、難なく渡って天国に行けるが、悪人の場合は、この橋は鋭い歯のように狭くなり、渡れずに地獄の底に落ちるという。

中央アメリカの古代マヤでも、死者の霊は、地上から、九つの階段をもつ梯子を伝って、冥界に降りていくと想像されている。そして、ここでも、死者の霊は、黄色い犬に守られた川に着く。そのため、マヤ人は、死を、カヌーに乗って川を渡るがごとくに考えている。さらに、死者の霊は、山を越えて、安らぎの場へ行く。冥界には、神人や獣人や骸骨だけの生き物などが棲み、この冥界を、ナキフクロウの頭飾りをつけた冥界の神が、五人の女神に囲まれて支配しているという。

一般に、死者の眠る冥界が地中深くにあると考える地下他界観は、死者を葬る墓のイメージから他界を想像し、そこを現世の喜びもなく暗い世界だと想定している。しかし、この地下他界観は、本来は、大地こそ死者の眠り安らう故郷だという考えに源泉をもつものであろう。草や木や虫と同じように、人間も、また、大地から生まれ大地へと死していくものと考えられていたからである。生が大地からの出現であるとすれば、死は生の根源である大地の懐に帰ることであった。とすれば、大地に生える植物と同じように、人間も、また、大地から再び甦ってくるものと期待されていたと解釈することもできる。

冥界下りの物語

このことは、世界各地の神話に残されている神々や英雄の冥界下りの物語が、もと、大地の豊穣神の死と再生の観念から発展してきたものであることからも分かる。

シュメールの豊穣女神イナンナの冥界下りの物語は、世界各地の多くの冥界下りの物語の中でも最も古いものである。愛と豊穣の女神イナンナは、冥界に下っていく決意をする。冥界に下ったイナンナは、門番と押し問答をしながら、七つの門をくぐって行かねばならなかった。しかも、冥界の掟に従って、門を通る度に王冠や首飾りや

衣服などを次々と取り上げられ、七つ目の門をくぐった時には、全裸にされていた。イナンナは、裸のまま、彼女の姉にあたる冥界の女王エレシュキガルのもとに引き出され、死の判決を受ける。そのとたん、イナンナは磔れ、その死体は釘に掛けられた。冥界でのイナンナの運命を心配したエンキ神は、二人の人物に生命の食物と水を与え、冥界に赴かせ、イナンナを救い出す。こうして、イナンナは甦り、地上に戻ることになった。だが、そのためには、イナンナの身代わりが必要であった。地上に戻ったイナンナは、あれこれ吟味した末、彼女に哀悼の態度を示さなかった夫の若い牧神、ドゥムジを身代わりに立て、彼を冥界に追放したという。

イナンナは愛と豊穣の女神であり、金星の女神であると同時に、大地母神の性格を備えていた。したがって、イナンナが冥界に下り死んだ時には、地上の植物も枯れ、家畜も獣も子を産まなくなった。イナンナが再び地上に帰ってくると、大地は再びその生命力を回復し、穀物は稔り、家畜や獣も子を産むようになったという。シュメールでは、おそらく、冥界でのイナンナの死やドゥムジの冥界下りを嘆き哀悼する儀礼が行なわれていたのであろう。植物や穀物が芽を出し生長する春が過ぎると、焼けつく日照りの夏が訪れ、植物は枯れ、家畜も子を産まなくなる不毛の季節が始まる。そのようなメソポタミアの風土を背景にして、人々は、大地女神の死と再生の物語を作り出したのである。大地女神の冥界下りと冥界からの帰還の物語は、そのような農耕生活から生み出されたものであった。

このシュメールのイナンナの冥界下りの物語は、バビロニアのイシュタルの冥界下りの物語に伝承されていった。ただ、ここでは、豊穣女神イシュタルが、死んだ夫のタンムーズを求めて、冥界へ旅立つ話に変形しているのが大きな違いである。しかし、冥界に七つの門があり、女神が装身具や衣服を奪われ、冥界で試練に合い、冥界から再び甦って、世界に秩序がもたらされるという筋立てにおいては、シュメールとバビロニアの物語はほとんど変わらない。イシュタルが冥界に下った時、大地は不毛になり、冥界から戻ってきた時、大地の生命力が回復すると想定されていた点でも、同じである。

世界各地にある英雄の冥界下りや冥界訪問の物語は、この大地女神や穀霊神の死と再生の物語を起点にして、より豊かな想像力を交え発展していく。地下の冥界に関するイメージも、この死と再生の物語を出発点にして、様々に想像されていったのである。

古代ギリシアのホメロスの『オデュッセイア』（XI）におけるオデュッセウスの冥界下りの物語は、中でもよく知られている。オデュッセウスは、自分の故郷へ帰る途上、テーバイの盲目の予言者テイレシアスの霊に会うために、冥界に下る。まず、船に乗って西の果てまで行き、岸に上がって穴を掘り、その穴から、蜜に乳と水と酒を混ぜて注ぎ、羊を生贄として捧げる。すると、亡霊たちがその血を吸うべく闇の中から集まってくるが、彼は、テイレシアスの霊に会うまでは、死者たちが血に近づくことを

許さない。やがて、オデュッセウスは、テイレシアスの霊と会う。そして、幾多の困難を重ねつつも、故国に帰り、息子や妻と再会し、静かな晩年を迎えるであろうという予言を聞く。その後、彼は、亡き母の霊や、戦友だったアガメムノンやアキレウスの亡霊と会うが、母の霊は幻のようにふわふわしており、アガメムノンの姿もやせ衰えて見る影もなかったという。ここでは、冥界は、亡霊が住む幽暗な世界として想像されているが、その復活は語られていない。

竪琴の名手オルフェウスも、妻を求めて冥界に下っている。彼は、マムシに噛まれ死んだ愛妻エウリュディケーの後を追い、冥界に下りていった。冥界の川の渡し守や冥界の門の守衛・猛犬ケルベロス、さらに冥界の王ハデスまでも、音楽の魅力で感動させ、エウリュディケーを連れ帰った。ところが、オルフェウスは、太陽の光を仰ぐまではエウリュディケーを振り返ってはならぬという禁忌を破ったために、妻と永遠の別れをしなければならなくなった。一説によれば、オルフェウスは、絶望のあまり世捨て人となり、すべての女性を近づけようとしなくなったために、女たちに恨まれ、八つ裂きにされて死んだと言われる。オルフェウスの竪琴は、後、天に昇って、琴座リュラとなったという。

古代日本のイザナキ神も、火の神カグツチを産んだため死んだ妻イザナミを訪ねて、冥界に下る。そして、イザナミにこの世に帰ってくるよう説得する。だが、オルフェウス同様、イザナキは、妻の姿を見てはならないという禁忌を侵したために、永遠の別離になってしまう。イザナキは、追跡してきたイザナミと黄泉比良坂（よもつひらさか）で別離の言葉をかわし、千引（ちびき）の岩を置いて、この世とあの世の境としたという。

ローマの建設者である偉大な勇士アエネアスも、夢で見た父の命に従って、冥界に下っている。冥界への入口と伝えられる洞窟を通ると、悲嘆、辛苦、疾病、老衰、恐怖、飢餓、死などの名のついた亡霊たちがいる。そこを抜けると、真っ黒な水の流れるコキトス川の岸に着く。そこでは、渡し守が、舟に乗ろうとする亡者を振り分け、正しく葬られた人間の魂のみを乗せようとしている。川を無事に渡ったアエネアスは、冥府の門の番犬ケルベロスに菓子を与えて眠らせ、さらに進むと、生まれてすぐ死んだ幼児や冤罪で殺された人や自殺した人の霊の群がるところがあり、さらに、戦死した勇士たちの霊の集まっているところもある。そこを左に折れると、地獄に入り、そこでは、罪人が種々の罰を与えられ苦しんでいる。アエネアスは、そこから戻って、冥府の王ハデスと女王ペルセポネの前に進み、贈り物をして、右に回って、極楽エルュシオンの野に到ったという。

北欧の勇士ヘルモッドも、オーディンの命令で、冥界に下っている。オーディンの子で、光明と清浄の太陽神バルドルは、邪悪な神ロキの悪巧みによって非業の死を遂げ、冥界の住人となった。このバルドルを連れ戻すべく遣わされた勇士ヘルモッドは、

八本の足をもつオーディンの馬スレイプニルに跨がって、死者の国に旅立った。九日九夜、真っ暗な谷を通り抜けると、あの世とこの世の境にあるギヨル川に達し、橋守りの乙女を説得してこの川を越え、冥界の女王ヘルの城に到着した。その城門を馬で飛び越えると、バルドルは、死者とともに饗宴を開いていた。ヘルモッドは、冥界の女王ヘルに会見し、神々の国アスガルズへバルドルを返して欲しいと嘆願した。だが、ヘルは、世界中のすべての者が彼の死を嘆いているなら返すが、ただの一人でも嘆かぬ者がいれば返さぬと答えた。アスガルズに戻ったヘルモッドは、ヘルの言葉を伝え、神々、人間、動物、草木、金石、すべてがバルドルの死を悼んで涙を流した。ところが、ただ一人、洞窟の中にいたトクという醜い老婆が、ロキのそそのかしでその伝令を拒んだため、バルドルはアスガルズに戻ることができなかったという。

北欧では、夏至を境にして日は次第に短くなり、やがて長い冬がやってくる。北欧の人々は、この夏至を、太陽神バルドルに捧げる祭りとして祝った。ヘルモッドの冥界訪問神話は、太陽の死という想念から生み出された物語であった。

古代メキシコ、アステカの英雄神、ケツァルコアトルも、冥界を旅している。ふとしたはずみで近親相姦を犯したケツァルコアトルは、自分に厳しい修行を課し、まずすべての財産を投げうち、四日四晩石棺の中に籠もった。そして、火葬用の薪の山を築き、炎の中に身を投じて、火で焼き尽くされ、肉体が無くなると、彼は、犬の姿をした双子の片割れショロトルを伴って、死者の国ミクトランを旅した。彼は、死者の王ミクトランテクトリから、男と女の骨を首尾よく得て、暗黒の悪魔チチミメスや、彼を殺そうと脅かす憤怒の神々などと戦い、多くの試練の後、その骨を携えて逃げ帰った。彼は、自分の血をもって男と女の死を贖い、こうして、人間の始祖がこの世に住むことができるようになったのだという。

世界各地の神話に残っている大地神や英雄神の冥界下りの物語には、死んだ夫や妻などを求めて、それを連れ帰るべく、冥界に旅立つという設定が多い。しかも、その冥界は、大概は地下にあり、洞窟などの入口を通って、あの世とこの世を区別する川を越えて、ようやく至り着くと想像されている。冥界には、多くの怪物が棲み、冥界の王や女王が君臨し、死者を支配していると考えられている。この冥界のイメージは、もとは、大地に生える草木の死や、大地の果てに沈む太陽のイメージから想像され、死者を埋葬する墓のイメージとも重なり、たくましい想像力によって、より豊富にされていったものであろう。とすれば、この冥界下りの物語も、大地を通しての生命の循環という考えに起源を発しているものと理解することができる。

3　生と死の連続

古代世界では、大概の場合、この宇宙は、天上・地上・地下の三層構造をなしていると考えられていた。地上世界には、人間をはじめ動物や植物が生き、山上遙か遠くの天上世界には、太陽や月や星の神々が住み、足下深くの地下世界には、隠れた神々が住んでいると信じられていた。それは、古代人の精神の秩序でもあった。

しかも、古代世界でも、時代が遡れば遡るほど、霊魂は、天上・地上・地下の世界を融通無碍に往来できるものと思いなされていたようである。死者の霊は、地下の世界を通って再び地上に再生し、天上に帰った死者の霊も、生者を守護する祖霊として、しばしば地上に降りて来て、行き来することができた。そこでは、この世とあの世、現実世界と他界とは連続し、生と死の境も必ずしも明瞭ではなく、相互に転換するものであった。天上世界と言っても、近くの山や丘から梯子などで昇って行けるし、地下世界と言っても、近くの洞窟や墓穴から自由に下りていくこともできると想像されていたのである。この現世と他界の連続観は、先史時代以来懐かれていた観念だったのであろう。ここでは、死は、生の単なる終末ではなく、生の一種の中断であり、生命そのものは永遠に循環すると信じられていたのである。このことは、原始宗教においても、古代宗教においても、変わりはない。

死と再生の隠喩

生きとし生けるものは死してもなお再生し、生命は永遠であるという考えを、古代人は、太陽や月、星や大地のイメージから学んだ。

例えば、太陽は朝、東から昇り、日中空を横切り、夕べには西に沈んで、夜の地下を通って、再び東の方に現われる。そして、それを繰り返し、永遠である。この太陽から、人々は、大自然の命の死と再生、循環と永遠を知った。とすれば、大自然の子である生きとし生けるものも、また、同じように、死と再生を繰り返して、その永遠の生命を保つと考えられたのも、不思議ではない。

古代エジプトでも、太陽神ラーは、日中は、船に乗って天界を渡り、夜は、十二の地域に分かれた冥界ツアトで、悪魔と戦いながらそれに打ち勝ち、朝になると、暗黒の谷から新たに出現してくると信じられていた。また、死者の霊も、この太陽神ラーの船に乗り、冥界を旅すると想像されていたのである。西方の山々の穴の中に消えていった死者の霊は、太陽神ラーとともに、冥界ツアトの多くの危険な場所を、悪魔や忌まわしい怪物に脅かされ、暗闇や火炎に悩まされながら、それを乗り越えて、翌朝再び東の空に生まれ変わってくる。夕べには西に沈んだ太陽も、翌朝、また、新たに東の方に現われ、太陽は永遠不滅である。ちょうど、それと同じように、死者の霊も、死してもなお再生し、その生命は永遠だと考えられたのである。古代エジプト人が、太陽の沈むナイル川の西の方に死者を埋葬したのも、太陽と同様、死者もまた再生してくるという願いが込められていたからである。

人々に死者の霊の永遠の生を教えたのは、太陽だけではない。月も、また、同様の

ことを教えた。月は、満月の後、次第に欠けて、闇のうちに消え失せていくが、しかし、新月を過ぎれば、再び満ちて夜空を照らす。それと同じように、死者の霊も、死してもなお再生してくるものと信じられたのである。

星も、また、死と再生の象徴となった。星も、一時、天上から消えても、再び現われ、滅びることはない。現に、大地女神と太陽神との間に生まれ、金星の神と言われるアステカのケツァルコアトルも、冥界を歴訪し、多くの試練を経て後、天界に昇り、暁の王として、明けの明星に変身した。この金星の神、ケツァルコアトルの物語も、古代アステカ人に、死と再生の範型を提供したのである。

大地も、また、死が最終的なものでなく、永遠なる生の一過程にすぎないことを教えた。冬にもなれば、大地は、草花や虫の死骸を呑み込み、地上のあらゆるものの生命力を衰えさせる。しかし、長い冬の後、春になれば、草木は再び芽を吹き、虫たちは蠢き出して、新しい命の営みが始まる。それと同じように、死者も、大地に死し、大地から再生してくると信じられた。大地から生まれ大地に死す生きとし生けるものは、また、大地に死し大地から生まれ出、これを永遠に繰り返し、生命は永遠だと観念されたのである。

シュメールのイナンナやバビロニアのイシュタル、エジプトのイシスやギリシアのデメテルなど、母なる大地の女神の物語が、その夫や息子や娘の死と再生の神話によって構成されていたのは、大地のもとでの死と再生の思想を語ろうとするものであった。

大地に育つ樹木や草花、穀物なども、死と再生の象徴となった。木々も草花も穀物も、冬の訪れとともに葉を落とし、枯れ、種となって、死したかのように見える。だが、長い冬が過ぎ春が訪れると、木々は芽を出し、草花は花を咲かせ、穀物は芽を出し、生長する。そして、あらゆる植物は、これを繰り返して、永遠の生命力を保つ。これと同じように、死者も、また、死しても、なお、再び植物のように再生してくると考えられたのである。

豊穣の神で穀霊神とも言われる古代エジプトのオシリスも、殺され、切り刻まれたが、冥界の王として復活している。このオシリスの死と再生も、古代エジプト人に重要な範型を提供した。太陽神ラーの船に乗って冥界を旅する死者の霊は、冥界の王オシリスの法廷を無事切り抜けることによって、地上に再生してくる。古代エジプトの長い歴史の過程で、次第に、冥界の王オシリスと天上の太陽神ラーが同一視されるようになったのも、両者とも死と再生の象徴だったからである。昼から夜へ、夜から昼へと、一日は太陽とともに回転していく。ラーは昼の支配者であり、オシリスは夜の支配者であった。死者の霊は、このラーとオシリスを巡って、永遠の生を得た。そこには、古代エジプトの長い歴史によって培われた壮大な神学体系があったのである。

穀物や植物の死と再生が神話となって、人々の世界観の範型を提供したのは、こればかりではない。古代ギリシアの豊穣女神ペルセポネも、本来、穀霊神である。彼女

も、また、死と再生を繰り返すことによって、一方ではハデスの妻として冥界に君臨し、他方では、デメテルの娘として大地の豊穣を司った。このペルセポネとゼウスの間に生まれたと言われるディオニュソスも植物神であるが、彼も、ティタンたちに八つ裂きにされ、死して後、再生している。これら植物神の死と再生の神話は、あらゆるものの死と再生の範型となり、人間も、また、植物と同様、死してもなお再生し、永遠の生を獲得しうるものと考えられたのである。

太陽、月、星、大地、植物など、自然のイメージは、古代人の世界観や人生観を基礎づけた。沈んでも昇る太陽、欠けても満つる月、消えても現われる星、滅ぼすと同時に甦らせる大地、死しても甦る植物は、人々に死と再生の哲学を教えた。死は終わりではなく、新しい生の始まりであることを教えたのは、大自然の循環であった。人間の生死も、自然と連続しており、大自然の循環の中に組み込まれたものであった。生は死であり、死は生である。自然の永遠の循環に加わることによって、死者も、永遠の生を受け、不死となる。人間も、永劫に回帰する宇宙の生命力と一つである。宇宙生命への畏怖の念から出発した古代宗教は、宇宙生命への帰一の感情に、その最も深い基盤を見出したのである。

宇宙生命への帰還

古代宗教は、人間の死を大自然の循環の中でとらえた。そして、人間の死を、人間を超える大いなるものへの帰還としてとらえたのである。人間を超える大いなるものの自覚は、人間自身の死の自覚から出てくるものであるが、この人間の死の問題は、また、大いなるものとの合一の自覚によってのみ解決されうる。太陽、月、星、大地、植物、それらは、この人間が帰っていく大いなるもの、宇宙の根源的生命の象徴であった。死とは宇宙生命への帰還に他ならない。

しかも、人間は、死を通して宇宙生命へと回帰し、またそこから再生してくる。人間は、そこから生まれそこへ死し、そこへ死しそこから生まれる。人が死んで行くところと生まれ来るところとは、同一である。それは、生の終着点であると同時に、生の源でもある。死ぬことと生まれることは一つである。死は生であり、生は死である。生から死、死から生への無限の循環の中に、人は生まれ人は死し、その根源的生命は永遠である。老荘思想では、「宇宙は陰陽の相補的な交代によって成り立ち、生と死は一つである。人は混沌から生まれ混沌へと帰り、死は別の局面に入ることにすぎない」と考えた[10]。だが、このような考えは、すでにそれ以前の遠い神話の中で暗黙のうちに語られていたことでもある。

ソクラテスも、死をある場所から別の場所への魂の移動、または、夢のない眠りとしてとらえ、いずれにしても、それは喜ばしきことだと言っていた[11]。だが、これらの

ことも、それよりもっと古い神話時代にすでに語られていたことなのである。死は永遠の休息なのである。とすれば、死は何ら恐るべきものでもなく、怪しむべきことでもない。むしろ、死は、祝福されるべきものであり、神聖なものである。このことを、古代人は、日や月、大地や植物の大自然の循環やリズムから学んだのである。

原始古代人は、霊魂は肉体が滅んで後もなお存続すると信じ、しかも、死者の霊と生者とは常に交流し連続していると考えた。その後の古代宗教も、同じように、死後の霊魂の存続を信じ、それは、地下の冥界を通って再び地上または天上に再生してくると考えた。これらは、どれも、生と死の連続性の思想を前提にしている。死は、生命の絶対的終焉ではなく、再生への過程であった。人は、死と再生を繰り返し、永遠の生命を持続する。ちょうど、動物や植物の個体が死と再生を繰り返しながら生命を保存していくように、人間も、また、宇宙の大いなる循環の中で、絶えずその生を更新しながら、永遠の生を保つ。

今まで、プラトンをはじめ、多くの哲学者たちが、魂の不死を説いてきた。プラトンによれば、死によって肉体の牢獄から解放された魂は、他の肉体に転生するにしても、永遠の楽園に住むにしても、魂は不死であるという。しかし、これら哲学が主張し続けてきた魂の不死の思想は、それ以前の古代の諸宗教がすでにもっていた思想でもあった。死者の霊の再生を説くにしても、転生を説くにしても、永生を説くにしても、身体を身体たらしめていた生命力の根源つまり魂は永遠だと信じられていたのは、原始古代以来のことであった。個々の生命力は宇宙の生命力に通じており、この宇宙の生命力は永遠であり、永劫に回帰してくるものと考えられていた。この永劫に回帰する宇宙生命とともに、人間の魂も、絶えず更新されつつ生き続け、不死である。個々の生命はより大きな宇宙的生命に連なり、宇宙的生命は個々の体内に宿っている。人間は宇宙生命と一体であり、生命は永遠である。そのような世界観が、古代宗教以来説かれてきた魂の不死説にはあったのだと言わねばならない。

人は、死と再生を繰り返しながら、偉大な宇宙の循環の中で、その根源的生命力を維持する。それどころか、一般に、古代宗教では、宇宙そのものも死と再生を繰り返して、常に更新されるものと考えられてきた。太陽は、夕べに死して、夜の世界を通って、翌朝、再び甦ってくる。太陽は、また、冬至に向かって次第にその力を弱めていくが、冬至を境にして再びその生命力を回復する。この太陽の死と再生が、また、宇宙そのものの死と再生の観念を呼び起こしたのであろう。この太陽の循環によって起きる季節の移り変わりも、宇宙の死と再生、絶えざる更新の象徴となった。冬の訪れとともに、万物はまるで死んだかのようにその生命力を衰えさせるが、春の訪れとともに、自然は再び生命力を取り戻し、甦ってくる。太陽や季節をはじめ、月や大地や植物など、多くの循環するものが、宇宙そのものの死と再生、周期的な更新という観念を生み出した。宇宙は、毎年、周期的に死と再生を繰り返し、一旦原初に帰って更新される。

宇宙も、周期的更新を繰り返して、永遠の生命を保つ。古代宗教は、このような根源的宇宙生命への合一の感情を語ってあますところがない。宇宙感情は、人類が人類としてその営みを始めた時以来懐かれてきた感情である。それは、宗教そのものがそこから出発した感情でもあった。宇宙生命は、この宇宙に存在するあらゆるものに宿って、それに生命を与えている。われわれ人間も、この宇宙生命に参加し、肉体が滅んでも、なお、その生命力は根源に帰って存続する。古代宗教が、魂の不死、あるいは再生、あるいは転生を説いたのも、深い世界観に裏づけられてのことであった。

古代人は、宇宙の生命力は永遠であり、永劫に回帰するものと感じていたのである。この宇宙は、永遠の生成であり、不断の流動変化であり、無限の創造である。宇宙の根源的生命は、万物を通して自分自身を現わし出す。万物は、宇宙の根源的生命に貫かれて、常に生成変化している。ここでは、人間も、動物も、植物も、すべて、宇宙の根源へ帰属している。人間をはじめ生きとし生けるものの死は、この根源的宇宙生命への帰還に他ならない。古代世界の多くの死と再生の物語は、この根源的生命への帰一の感情に根差している。

Ⅳ　生成と創造

1　混沌からの生成

混沌の象徴

古代バビロニアの詩篇『エヌマ・エリシュ』（I・一―一三）では、世界創成の原初には、まだ天も地も名づけられることなく、ただ一面の海があるのみであったと想像されている。この原初の海は、アプスーとティアマトという二神の名で呼ばれている。アプスーは淡水を表わす男神で、ティアマトは塩水を表わす女神であった。天と地は、この二神が合流した時、生まれ出てきたという。

原初に海または水があって、そこから万物が生じたという伝承は、世界創成を説く古代神話の中では広く見られるものである。このバビロニアの世界創成伝承も、さらに遡って、シュメールの伝承に起源をもつと思われる。シュメールの女神ナンムは、原初の海を表わし、天と地とすべての神々を生んだ母と呼ばれていた。とすれば、この種の伝承は、相当に古い記憶を伝えているようである。これらの伝承にでてくる原初の海または水は、世界の万物がそこから生成してくる混沌を象徴している。それらは、万物が多様に分かれ出てくる前の未分化状態の象徴なのである。

古代エジプトでも、この天地創成以前の混沌状態は、果てしない海によって象徴されている。天地創成以前には何一つ存在するものはなく、ただ、暗黒の闇の中に、波も起こらない果てしない海だけがあった。その名をヌウと言った。この原始の混沌は、男神は蛙、女神は蛇の形をしたヘルモポリスの八神によって概念化され、それぞれ、深淵、無限、暗黒、不可視性を表現した。それらは、相互に影響し合い、やがて太陽を生み出す力となった。

古代ギリシアでも、ホメロスによれば、口で尾をくわえた蛇のように地と陸を取り巻いている広大無辺の大河オケアノスが、万物の本源であり、すべての神々の父と考えられている。古代メキシコのアステカの世界創成伝承でも、太初には何もなく、ただ果てしなく広がった水の中から大地が現われると想像されている。古代日本の神話でも、天地の創成は、水の上に出来立ての国土が油やクラゲのように浮遊しているという印象によって描かれている。これらの伝承に出てくる大河や水は、どれも、世界創成以前の混沌状態を表わしている。

また、同様に、古代日本の神話で、イザナキ・イザナミ二神が、天の浮橋に立って、天の沼矛（ぬぼこ）で海水を掻き回して引き上げた時、矛の先からしたたる海水が固まって出来

上がったのが淤能碁呂島であったと想像されているのにも、原初の混沌の観念が残されている。同じような伝承は、古代インドにもある。そこでは、神々が魔族とともに大海を掻き回したところ、大海の水は乳に変じ、泡立った海の中から、月や酒、駿馬や宝石、医師や幸運の神々が現われ出てきたと言われる。また、ヒラヌヤ・ガルバ（黄金の胎児）と想定される神が、水を受胎させたところ、そこから火が生まれたとも言われている。また、ヒンドゥー教で崇められているヴィシュヌ神も、暗黒の中に広がる原初の大洋の上に、巨大な身体をアナンタという大蛇の上に横たえて眠っていたという。これらの伝承の中の海や水は、いずれも始源の混沌の象徴である。原初の水または海の中に、人間や悪魔がもぐって、海底から土をもってきて、それを国土としたという潜水型国土創成説にも、混沌からの万物の生成という観念が残存している。

古代の神話的世界では、水は、そこからあらゆる形あるものが生まれ出てくる未分化状態を象徴している。水は、あらゆる生命の根源であり、あらゆる存在の源泉であり、万物の源と考えられた。紀元前七世紀ごろの古代ギリシアの哲学者タレスが、万物のアルケー（原理）は水であると規定したのにも、古い記憶があったのだと言わねばならない。

もちろん、万物の起源としての原初の混沌状態は、水によってのみ象徴されるだけではない。古代フェニキアの神話では、原初に、濁り泡立つ大気、風の息吹と真っ暗な混沌があり、この息吹が混交して万物が創造されたと言われる。紀元前六世紀ごろの古代ギリシアの哲学者アナクシメネスが空気を万物の源としたのにも、遠い源泉があったのである。

水や空気は、原初の混沌の象徴である。したがって、古代神話の中には、この原初の混沌状態を、より直接的に、混沌そのものとして言い表わしたものもある。古代中国の創成神話に、太初、混沌があり、その中から世界が形づくられたという観念があったことは、『荘子』や『左伝』の記述から推定されている。古代中国の『淮南子』の影響のもとに記述されている日本の神話でも、天と地、陰と陽がまだ分かれていなかった時、この世界は混沌として形も決まっていなかったと叙述されている。この混沌とした世界は、ほの暗く、広くて、ものの兆しはその中に含まれたままであったが、そこから、やがて、天と地が分かれ出、神々が生まれ出てきたという。古代の人々は、世界万物の起源を、何ものもまだ分離されていない不明瞭な混合状態、底の見えない混沌に見たのである。

カオスと無

われわれが通常「混沌」と訳すギリシア語、カオス(chaos)は、本来、口を大きく開けた割れ目を意味していると言われる。ヘシオドスの『神統記』（一一六―一二二）によれ

ば、原初にまずカオスが生じ、そこから胸幅広いガイア（大地）と、大地の奥底にある暗黒のタルタロス（地底）と、不死の神々の中でも一番美しいエロス（愛）が生まれたとされている。ここで、万物が生まれ出てくると言われるカオスは、広く口を開けた割れ目を意味する。これは、われわれが通常思い浮かべる混沌状態よりも、むしろ、深淵を意味すると考えた方がよいであろう。

北欧の神話『スノリのエッダ』（四―五）でも、海の終わる大地の果てにギヌンガガップと名づけられる巨大な深淵があり、その北にはニヴルヘイムという氷のように冷たい霧の世界があり、その南にはムスペルスヘイムと言われる火の世界があると言われている。そして、ニヴルヘイムの霜とムスペルスヘイムの熱風とがぶつかって、原巨人ユミルが生まれてきたのだという。ここでも、原初には、天も地も海も果つる底知れぬ深淵が想定されている。これも、混沌というよりも、むしろ虚無と言った方がよいかもしれない。古代人は、また、万物が生じてくる源泉を、虚無の深淵に見たのである。

古代の世界創成神話では、混沌は未分化状態を意味し、虚無を意味することはほとんどない。だが、この原初の混沌の背後には何があると考えられていたのか。いくつかの創成神話は、そこに、天も、地も、神々も、人間も、何ものも存在しない無を想定しているかのようである。原初の深淵は、それを暗示しているように思われる。

それどころか、古代インドの『リグ・ヴェーダ』の創造讃歌のうち、最も昇華された哲学的讃歌（一〇・一二九）では、そこには無さえもないと考えられている。原初においては、無もなく、有もなく、空もなく、それを覆う天もなく、死も、不死もなかったという。しかも、そこから目に見えない波が生じ、ある種の熱の力によって唯一物が生じてきたと想像されている。ここでは、万物はいわば絶対の無から生じてくると考えられていたのである。

この点では、九世紀のアイルランド出身の哲学者エリウゲナが、究極の自然として（創造もせず創造もされぬ自然）を考え、十三・四世紀のドイツの神秘家エクハルトが、神の背後に、むしろ無であり隠れたる闇である神性（Gottheit）を想定したのも、インドの古い創成神話が想定していた有無以前の世界を見ようとしていたのだとも言える。十八・九世紀のドイツの哲学者シェリングが、神の存在の根拠に、暗き衝動とでも言うべき神の内なる自然を見、それをむしろ光の源泉としての闇と考え、神の存在の背後に無底（Ungrund）を想定したのも、同様な世界を見ていたからであろう。万物は、この無の無として、つまり否定の否定として生じてくるのである。

混沌からの生成

混沌の意味を未分化状態としてとらえ、これを水や空気によって象徴するにしても、あるいは、混沌の意味を深淵としてとらえ、無または有無以前の絶対無と考えるにしても、世界の多くの創成神話に共通する観念は、混沌からの万物の生成、および万物

の秩序の生成という観念である。これらの世界創成観は、ある絶対神から万物が創造されるという考えでもなく、造物主によってある素材から万物が形成されるという考えでもなく、混沌から万物が出現するという考えに、その特徴をもつ。すべてのものとその秩序は、形なき混沌から次々と生成してくると考えられたのである。ここでは、創造や形成という観念よりも、生成という観念が優先している。

紀元前六世紀ごろの古代ギリシアの哲学者アナクシマンドロスは、万物の根源をト・アペイロン（to apeiron）すなわち〈無限なるもの〉と考え、この混沌とした〈無限なるもの〉から、互いに対立するものが発現し、秩序つまりコスモスとしての宇宙が成立してきたと考えた。この考えも、遠く神話の世界に源泉をもっていたのであろう。

今日の物理学でも、混沌からの万物の生成という観念は生きている。現に、今日の物理学では、物質の根源は無限のエネルギーの海のごときものに求められ、この無限のエネルギーから物質は生成してくると考えられている。エネルギーは物質に変換されて、川の流れの中の渦のように、新しい粒子が生成してくる。この場合、粒子は、エネルギーをもった場の振動つまり波動として説明される。

この現代物理学と同じ考えは、すでに古代インドにあった。『リグ・ヴェーダ』（一〇・一二九）の創造讃歌でも、宇宙は目に見えない波であり、そこから、ある種の力によって唯一物が生じると考えられていた。物質を有とすれば、その源泉たる無限のエネルギーの場は、無と言うべきものである。だが、それは充実した無であり、創造的無であり、無限の活動力である。あらゆる存在は、この創造的無から生まれてきたのである。

現代の宇宙論も、混沌からの生成という観念によって形成されているように思われる。特に、ビッグバン宇宙論では、この宇宙は、高エネルギーの混沌状態の核から、突如とした大爆発によって始まったという。それとともに急激な膨張が始まり、温度や密度の低下に従って、原子や分子、銀河や星が形成されてきた。それは、多くの世界創成神話が混沌からの万物の生成を説くのに似ている。

しかも、今日の宇宙論は、この宇宙の発生を、ビッグバン以前の無の状態から引き出そうとしているかのようである。もちろん、このビッグバン以前の無は、全くの無や空虚ではなく、むしろ、無限のエネルギーを蔵した海だと考えられる。この宇宙は、エネルギーと波動に満ちた真空の海から生成してきたのである。宇宙は、混沌から秩序を生み出す過程を通して絶えず発展し、進化していく。この無秩序から秩序をつくりだそうとする力は、最初の混沌状態のエネルギーの中にあったのだと言わねばならない。混沌からの万物の生成という観念について言えば、今日の物理学や宇宙論の世界観も、古い哲学的世界観も、太古の神話的世界観も、それほど変わってはいない。

混沌から万物の生成を説く世界創成神話は、一般に、創造神の介入なしに、ある種の原初の物質や胚素から世界がおのずから生成してきたと考える。この生成型創成説は、神によって世界が創造されたと考えるのではなく、世界がある混沌状態から生成してきたと考える。

世界のどこにでもある創成神話は、万物はいかにして生ずるか、神々はいかにして生まれ出るか、国土はいかにして出来たか、人類はいかにして生まれ来たったかなどについて説くものである。そこには、世界の存在に対する驚異の感情がある。この世界に対する驚異の感情こそ、宗教感情がそこから発する出発点であった。このような原初的な驚異の感情から、創成神話は生み出されてきたのである。

しかも、生成型創成神話は、世界創成を〈生成〉という原理によって説く。つまり、原初の混沌状態からの万物の生成を物語る。世界と神々そのものが無限に生成してくるものと考えられたのである。そこには、「存在とは何か」という問いがある。生成型創成神話は、この「存在とは何か」という問いに対して、存在がどのようにして存在するようになったかと問う。つまり、存在を生成という原理によってとらえる。ここでは、存在は生成に還元される。有ることは成ることに他ならない。無から有への移行、つまり生成こそ、宇宙の本質と考えられる。

紀元前五世紀ごろ、古代ギリシアの哲学者パルメニデスは、「存在のみがあり、無は存在しない」と考え、生成を否定した。これに反対し、万物流転を説いたヘラクレイトスは、存在することは生成することに他ならないと考え、生成を世界の原理とした。世界を永遠の生成とみたのである。このヘラクレイトスの生成の思想も、それ以前の古代神話の世界観の再解釈だったとも言える。

現代の物理学や宇宙論の提示する世界観でも、これと同じことが言われている。ミクロの宇宙を記述する現代の物理学も、マクロの宇宙を記述する現代の宇宙論も、混沌としたエネルギーの海からの物質や宇宙の生成を説く。物質も宇宙も、生成し来たったものであり、また常に生成しつつあるものなのである。ここでも、存在は生成に還元される。

別の言葉で言えば、古代神話は、事物の存在を〈生む〉という原理によって説明しようとしているとも言える。宇宙の根源に物を産出する無限の力が働き出ており、この生産力によって万物は生成してくると、古代人は考えた。宇宙の生産力は無尽蔵であり、そこから、あらゆるものが生み出されてくる。そこには、無限の生命力に対する古代人の深い信仰がある。

したがって、古代人にとって、自然とは生きた自然であった。だからこそ、ギリシア語で〈自然〉を意味するピュシス（physis）という概念にしても、ラテン語で〈自然〉を意味するナトゥラ（natura）という概念にしても、古くは自己産出という意味をもっていたのである。東洋の〈自然〉という概念も、同様である。

古代ローマのストアの哲学者たちにせよ、近世ヨーロッパの哲学者たちにせよ、多

くの哲学者たちが、自然を、生きた自然、生産する自然ととらえたのには、古い記憶があったのだと言わねばならない。例えば、十六世紀のイタリアの哲学者ジョルダーノ・ブルーノは、自然には聖なる力が宿っていると考え、自然を能産的自然（natura naturans）と考えた。また、十七世紀のオランダの哲学者スピノザも、神即自然と考え、この自然を、ブルーノにならって、そこから無限に多くのものが産出される能産的自然と考えたのである。また、シェリングも、スピノザを引き継ぎ、自然を無限の生産力としてとらえ、無限に活動する自然、能産的自然こそ、真の自然と見た。自然の生産力は、川の流れが渦をつくるように、何らかの抵抗に出会いつつ、生産物としての物質を生む。物質もまた生成し来たったものなのである。

二十世紀後半の自然科学でも、プリゴジンに代表されるように、自然は、自己組織化過程としてとらえられている。[12] 自然は、自己自身を形成し、自己発展するものであり、自分自身の中に秩序形成能力をもったものなのである。

だが、このように、自然を生きた自然としてとらえ、宇宙を生きたものとしてとらえる考えは、すでに、遠く古代の神話に息づいていた考えであった。

宇宙は、永遠の過去から休むことなく生成発展してきた巨大な流動である。宇宙は、無限の活動力であり、永遠の生成である。生成こそ宇宙の本質である。宇宙の根源には、無限に活動し、創造してやまぬ根源的生命が働き出ている。万物は、この無限の活動力としての宇宙生命から生成し来たったものである。

宇宙生命への深い畏敬の念こそ、古代宗教を成立させていた原初的な宗教感情であった。この原初的な宗教感情を出発点にして〈混沌からの万物の生成〉を説く古代の世界創成神話は、少なくとも、以上のような豊かな自然観、宇宙観の萌芽を語っているように思われる。

生成と否定

世界万物が原初の卵から誕生してきたという型の世界創成神話は、世界の至るところに残されているが、これも〈混沌からの生成〉という思想を物語るものであろう。

例えば、古代インドの『ヴェーダ』の付随文献『シャタパタ・ブラーフマナ』（一一・一・六）では、造化神プラジャーパティは黄金の卵から生まれたと言われている。世界創成以前に存在した原始の水は、増殖しようという欲望を起こし、熱の力によって黄金の卵を生んだが、一年たつと、その中からプラジャーパティが生まれ、さらに一年たつと、この神の言葉から地、空、天が生じ、その後、多くの神々が生まれたという。

フィンランドの叙事詩『カレワラ』（一）に出てくるイルマタルの話も、同じような想像を伝えている。不妊と孤独な生活に飽きた大気神の娘イルマタルは、海に落ち、風に触れて受胎し、そのまま七百年の間、波に揺られていた。やがて、一羽の小鴨が来て、彼女の膝元に卵を産んだが、その卵が転がり落ち、割れた殻の下半分からは大

地が、上半分からは天空が、黄身からは太陽が、白身からは月が、斑な部分からは星が、黒い部分からは雲が生まれたという。

同じような発想は、古代ギリシアのオルフェウス教にもある。原初には混沌と夜と深淵と地底があり、このうち、暗黒の翼をもった夜が、深淵の果てしない割れ目の中で風の卵を産み、その卵から、背中に金の翼を持ったエロスが生まれ、このエロスが地底や夜の混沌と結合して、天と海と大地と神聖な神々を生み出したという。

古代フェニキアの世界創成論でも、天空の塵と雲の上にある大気エーテルは、自己自身のうちに創造欲に満ちた原動力としての風を含んでいたが、これがクソロスと卵を産み、クソロスは、この卵を割って、両半分から天と地をつくったと言われている。

古代エジプトでも、原初の海ヌウから生まれたヘルモポリスの八神が、まず巨大な卵を産み、この卵から太陽神ラーが生まれ、そこからすべての生命あるものが生まれたとも伝えられている。

今日のビッグバン宇宙論でも、この宇宙は、無限の質量をもった無限に小さな核が突如として大爆発して創造されたと考えられている。現代の宇宙創成論の描くイメージも、太古人間が描いた原初の卵のイメージと奥深いところではつながっている。

古代の世界創成論における原初の卵は、原初の混沌を象徴するものであろう。生物の卵は、そのうちに、そこから成長し発展するすべてのものを未分化状態のまま内包している。それは、未分化状態にある全体性であり、全体性の可能態であり、すべてのものを潜在的に含む混沌である。

しかも、ここで、卵を割るという行為、または卵が割れるという現象は、原初の否定を表現する。卵が割れることによって、光や闇、天や地、男や女など、あらゆる対立者が生まれてくる。原初の混沌は否定されねばならない。原初の潜在的可能性は、自分自身を否定して、自分自身を展開しなければならない。そうでなければ、全体性は顕現することができないし、原初の潜在的可能性は可能性のままで終わり、世界は活動的たりえない。原初の混沌が象徴している宇宙の根源的生命は、それが真に生命であるためには、自己自身を否定して、その原初的あり方を克服しなければならない。そして、自分自身を分裂させ、外在化させねばならない。このことによって、はじめて、世界は目に見えるものとなる。

古代の宇宙卵型世界創成説は、創造における否定的契機を象徴的に語っている。この型の創成神話も、混沌からの生成という思想を物語るものであるが、これはまた、万物が生成してくるためには、原初の混沌が否定されねばならないことをも、物語っている。

原初の卵ではなく、原初の巨人や怪物の死体から万物が生じてきたという型の創成神話も、世界各地に伝えられているが、これも同様の思想を語っている。

例えば、古代インドの『リグ・ヴェーダ』（一〇・九〇）の讃歌の伝えるところによれば、太古、頭や目や足が千もあるプルシャという名の原巨人が存在したが、この巨人

を神々が生贄として解体した時、讃歌、歌詠、祭祀が生じ、また、馬、牛、羊、山羊などすべての畜類が生じた。さらに、この巨人の口からバラモン（祭司）、両腕からクシャトリア（王族）、両腿からヴァイシャ（庶民）、両足からシュードラ（奴隷）が生じた。さらに、また、この巨人の心臓から月、目から太陽、口からインドラ神と火神アグニ、その呼吸から風神ヴァーユが生じた。また、この巨人の臍から空界、頭から天界、足から地界、耳から方位が生じたという。

北欧神話『スノリのエッダ』（五―八）でも、この巨人解体神話は、原人ユミルの死体化生神話となって語られている。原初の深淵ギヌンガガップで生まれた原巨人ユミルは、霜の雫から生まれた牝牛の乳によって育ち、岩の中から生じた神ボルと巨人族とから生まれた神々、オーディン、ヴィリ、ヴェーによって殺されたが、その死体から世界がつくられた。その肉は大地となり、血は海や湖や川となり、骨は山となり、骨の破片は岩となり、髪は木や草となり、頭蓋骨は天空となり、脳味噌は雲となったという。

古代バビロニアの神話『エヌマ・エリシュ』（Ⅳ・三五―Ⅴ・五六）でも、この種の話は、マルドゥクによるティアマトの殺害の話として伝わっている。原初の水の神アプスーを殺したエアとその妻ダムキナから生まれたマルドゥクは、蛇形をした怪物と化した原初の海の女神ティアマトと戦い、これを殺害。その死体を二つに引き裂き、その半分で天をつくり、他の半分で大地をつくり、頭から山をつくり、両眼からはティグリス川とユーフラテス川をつくったという。

よく知られた中国の盤古（ばんこ）神話も、巨人の死体化生による世界創成を物語るものである。原初の気から現われた天と地は、陰陽に感じて、盤古という巨人を生む。盤古が死ぬと、その息は風雲になり、声は雷になり、左目は太陽になり、右の目は月になり、手足と体は山々になり、血潮は川になり、肉は土になり、髪の毛や髭は星になり、体毛は草や木になり、歯や骨は金属や石になり、汗は雨になり、身体に寄生していた虫は人民になったという。

これらの死体化生型創成神話は、どれも、唯一神からの世界創造を説くのではなく、原初の巨人や怪物の犠牲によって世界は生成してきたと考えるところに、共通の特徴がある。これらの神話には、先史時代以来行なわれてきたと思われる供犠の儀礼が反映していると言われる。

実際、イェンゼンが明らかにしたように、女神の死体から、人間にとって有用な栽培植物が発生したという神話は、世界の各地に広く残っており、それは、人類が農耕栽培を発見した新石器時代以来語り継がれてきた神話であろうと言われている。[13] 有名なハイヌヴェレ神話や日本のオオゲツヒメやウケモチの死体化生神話が、それである。そこでは、イェンゼンがデマ神と名づけたそれらの神々が殺され、その死体から芋類

や穀類が化生してきたと言われている。巨人の犠牲による世界創成を説く神話は、おそらく、この新石器時代以来語り継がれてきた死体化生神話から発展してきたものであろう。

これらの死体化生型創成神話の中に出てくる原初の巨人や怪物は、原初の卵がそうであったように、原初の混沌を象徴し、原初の全体性を表現したものと考えられる。しかも、これらの原巨人や原怪物が〈殺される〉または〈死ぬ〉という仕方によって犠牲に供されるということは、原初の卵が割れるのと同じように、原初の否定を表わす。原巨人や原怪物が犠牲になることによって、世界万物が生まれてくる。全体性が真に全体性として顕現してくるためには、原初の全体性が否定され、分裂しなければならない。それは、諸部分が合成されることによって全体ができると考えるのではなく、ちょうど細胞が分裂するように、全体が部分に分かれ出ることによって世界は顕現し、目に見えるものとなると考える。部分から全体へではなく、全体から部分へ生成してくると考える生命論的世界観を、それは物語っている。

そのかぎり、また、それは、個別が全体の中にあるとともに、全体が個別の中に流れ出ているという思想をも表現している。新しく生成してきた世界万物は、犠牲にされた最初の神的実体を分けもっている。全体は否定されて個別になるとともに、個別の中に全体は生きる。全体の中に個があるとともに、個の中に全体がある。神的存在の犠牲による万物の生成を説く死体化生神話は、それなりに深い思想を象徴的に物語っている。

世界は神の身体であり、万物は神の顕現である。この点では、宇宙卵型創成神話にせよ、原巨人型創成神話にせよ、それらが語る思想は、三世紀の古代ローマの神秘思想家、プロティノスの流出の思想に通じるものがある。根源的一者は、泉から水が湧き出るように、自らの中から流れ出て、宇宙万物となる。すべてのものは、神から流れ出ている。

また、宇宙卵型創成神話にしても、死体化生型創成神話にしても、いずれも、〈一は多であり、多は一である〉という思想を表現していると理解することもできる。何よりもまず、それらは、原初の卵や神的存在の中に世界万物がすでに含まれているということ、つまり、多が一の中に内在しているということを語っている。古代インドの原巨人プルシャの頭や目や足が千もあったと言われているのは、一の中の多という思想を特に強調して表現したものである。また、原初の卵や神的存在から万物が生成してくるということは、一から多が生ずるということ、したがって、多の中に一が流れ出ているということをも語っている。しかも、この一と多の間には、否定と分裂がなければならないことを、これらの創成神話は、卵の分割や巨人の犠牲という表現によって象徴しているのである。原初の卵や巨人は、万物が生成してくる宇宙の原生命力、宇宙生命を象徴したものである。この宇宙生命と世界万物との間には、否定とともに肯定があり、非連続性とともに連続性がある。

2　生成の弁証法

一から二への分裂

世界万物が生成してくる原初の混沌は、水や深淵によって象徴されたり、原初の宇宙卵や原初の巨人によって象徴されたりする。だが、これが一人の神として神格化された時には、その神は、大概は、両性具有の神として表現される。この両性具有の神は、エリアーデの言うように、原初の全体性と完全性を表わす。[114] 古代インドの原巨人プルシャなども、両性具有と考えられていた。それを反映して、ディアウスやシヴァなども、両性具有と考えられることもある。古代メキシコのアステカの宇宙の始まりを担う神、ウェウェテオトルも両性具有神である。彼は、世界の中心にいて、そこから四方に広がっている老神と考えられているが、そこから生まれ出るあらゆる神々の父でもあり母でもあると言われている。

古代人の思考は普遍を特殊によって表現する象徴思考に支配されているから、天と地、陰と陽の統一された原全体性を、生物学的な性の用語を用いて、男女両性具有という表現で象徴する。古代神話に出てくる両性具有神は、実際には、哲学的な意味をもったものである。それは、他ならず、全体性と完全性の表現なのである。

古代ギリシアのよく知られた哲学者プラトンが、『饗宴』の中で、同時代の喜劇作家アリストパネスの説として紹介した有名な原人間の話も、遠い神話的世界に由来するものであろう。人間は、もとは、男女が背中合わせに一つに結合し、頭が二つ手足が四本の生き物だったという。この原人間は力強く、神に反抗したために、神によって二つに分割され、その結果、男女の別が生じた。そのため、男と女は、完全なものになろうとして、それぞれがもとの半身を求めて、引きつけ合うのだという。[115] 両性具有の原人間にせよ、両性具有の神にせよ、全体性と完全性への希求の念を表現するものなのである。

したがって、また、両性具有神は、反対者の一致という思想をも表現する。完全な原初の神においては、天と地、陰と陽、光と闇など、相反するものは一つになっている。十五世紀の哲学者ニコラウス・クザーヌスは、有限なるものにおいて互いに反対するところのものも、無限なるものにおいては一つになると考えた。そして、無限なるものとしての神のもとでは、すべての反対するものは一致するとした。しかし、太古の神話は、すでに、このクザーヌスの反対者の一致の思想を先取りしている。

しかしながら、反対者が一つになる原初の一は、自己自身の完全性を知るためには、逆に、分裂して二つの対立者を生み出さねばならない。一は二に分裂する。対立者を

分離して生み出すこと、それが生成であり、創造である。対立者が出現することなくして、生成も創造もありえない。生物の細胞がそうであるように、分裂することは、生成や創造の不可欠な契機である。この分裂によって、全体性と完全性は有限な部分に分割される。

世界の生成とは対立者の分離に他ならず、そこには否定性がなければならない。十六・七世紀のドイツの神秘家ヤコブ・ベーメの言うように、神は絶対的肯定として無限の力であり生命であるが、しかし、神自らによる絶対的自己否定がなければ、神は自己自身を知ることができない。世界は、常に対立者を創り出すことによって、存続している。

この対立者を産出する力は、有と無の対立に起源をもつ。原初の混沌は、この有と無の未分状態であり、有と無の接点である。だから、それは、張りつめた弓のように、万物を生み出そうとする根源的な力に満ちている。それは、それ自身の中に、すでに、自己自身を否定して対立者を生み出そうとする力をもっている。それゆえに、根源的一は二に分裂し、世界万物が生成してくるのである。この一から二への分裂という思想は、原初の宇宙卵や原巨人が分割または犠牲にされて天地が出現するという世界創成神話に、すでに語られていた。

だが、根源的一からの対立者の生成の思想を語る最も代表的なものは、世界中に残されている天地分離神話であろう。それらは、どれも、天地未分の状態から、どのようにして天と地という対立者が分けられたかを物語っている。

ニュージーランドのマオリ族のランギとパパの神話も、天地分離神話の一つである。世界の初めに、天父ランギと地母パパがいて、互に思いを寄せ、相抱き合い、多くの神々を生んだ。しかし、生まれ出た神々は、二人の体の間の暗闇に挟まって窮屈であった。それで、多くの神々が、光と闇の区別を発見しようとして、二人を引き離す努力をしたが、天父と地母は固く相抱いて離れなかった。最後に、森と森の中に住むすべてのものの父神タネ・マフタが全身の力を絞り出して、逆立ちして、背伸びをすると、さしものランギとパパも互に離れ始めた。こうして、今も、天と地は遠く隔たっているのだという。

これと同じような天地分離神話は、よく知られたものだが、古代ギリシアにもあった。ヘシオドスの『神統記』（一一六―二〇五）によれば、原初のカオスから、まず地母ガイアが生まれ、このガイアから天空ウラノスが生まれ、このガイアとウラノスが結婚してティタン族と呼ばれる神々を産む。このティタン族の神々のうちで最後に生まれたクロノスは、ウラノスと仲違いをしたガイアの謀に従い、巨大な鎌でウラノスの男根を切り取り、地母ガイアとの夫婦の仲を裂いた。それ以来、天と地は分離したのだという。

古代エジプトでも、原初の海ヌウから出現した太陽神アトゥムは、自分自身の中から最初の対偶神シュー（空気）とテフネト（水）を生むが、このシューとテフネトが

結婚して、大地の男神ゲブと天空の女神ヌトを生む。この女神ヌトは、男神ゲブの上に覆い重なり、結婚して四人の子供を儲けたが、アトゥムの命令で、シューによって両者は引き離されたという。

これらギリシアやエジプトの天地分離神話は、おそらく、シュメールの天地分離神話にその源泉をもっているのであろう。シュメール語の宇宙を意味する語はアンキであるが、それは、一体となった天地を意味する。アンキつまり天地は、原初の海を表わすナンム女神から生まれるが、この天地の聖婚によって大気神エンリルが生まれる。だが、この子供によって天地両神は離別させられたという。

このように、天と地がもとは結合していたのだが、ある事件によって分離され、遠く隔てられることになったという内容の神話は、世界の至るところに残されている。これらは、どれも、一から二への分離によって目に見える世界が生成してくるという思想を語っている。

天地創造神話や天地分離神話ばかりでなく、多くの神話が、神々の生成を、一人の神が二人あるいは二人以上の神を生み出すという形で説いている。この場合、一人の神はどのようにして自分自身から他の神を生み出したかが問題になる。古代の神話は、この問題を説くために、生物学的な言葉であらゆる工夫をしている。ちょうど単細胞生物が分裂を繰り返して多くの個体を生み出すように、単性生殖的な仕方で神々を生み出したという説明方式もあれば、植物に挿し木という増殖方法があるように、体の一部から新しい神々を生み出したという話もある。多くの神話に、神が自分の唾や嘔吐物や涙など体の分泌物から神々を生み出したという物語があるのも、この問題を説くための説明である。

それどころか、一人の神から二人の神が生み出されるということを、神の自慰行為によって説明しようとするものまである。古代エジプトの『ピラミッド・テキスト』(五二七)によれば、原初の海ヌウから生まれてきた太陽神アトゥムは、自慰行為によって、シューとテフネトを生み出したという。この説明はいかにも荒唐無稽な説明のように聞こえるが、しかし、これは、むしろ、太陽神アトゥムが自分自身の中にあらゆる力と神々の原型を持っていたということの表現だと理解しなければならない。

シヴァ神を最高神と崇めるインドのシヴァ教徒は、同じヒンドゥー教の至高神ヴィシュヌや創造神ブラフマーは、いずれも、シヴァ神のリンガと呼ばれる巨大な勃起した男根から生まれたと信じている。ヴィシュヌとブラフマーが、原初の海で、われこそは世界の創造者であると言い争っていると、突然巨大な男根が海面上にそそり立ち、上にも下にも無限に伸び、やがて、その男根の割れ目からシヴァ神が現われ、われこそ二神の源なりと宣言し、二神の論争に決着を着けたという。これも、単性生殖による神々の生成を説くものである。

いわゆる処女懐胎神話も、単性生殖によって神々の誕生を説明する方式に属する。古代ギリシアの大地の女神ガイアが、独力で、天ウラノスと山々と海ポントスを産ん

だと言われるのも、処女懐胎を前提としている。聖母マリアが処女のまま神の霊を身籠り、神の子イエスを産んだというキリスト教の処女懐胎神話も、遠く、これら古代宗教の風土を背景にしている。

男神によるものにせよ、女神によるものにせよ、あるいは両性具有神によるものにせよ、単性生殖的な仕方での神々の誕生の物語は、どれも、一人の至高神の中にその後の世界のあらゆる力が内蔵されていることを語ろうとした神話だと考えるべきであろう。そのことによって、一から二は生じてくる。

二から一への結合

しかし、二に分裂したものは、同時に、一に結合することによっても、新しいものを生み出さねばならない。二に対立して顕現したものは、また、一に結合することによってその対立を解消し、新しい生命力を得る。

それぞれ天と地に分かれた男女二神が結婚して多くの神々を生むという神話が広く見られるのは、この二の一への結合による生成という思想を語っている。男女二神の結婚や生殖行為から新しい神々の生成を説く考えは、いかにも素朴な考えではある。しかし、そこには、生命をモデルにして宇宙をとらえようとする生命論的世界観があり、無限の生命力への信仰がある。この根源的生命への信仰こそ、古代宗教の本質に他ならなかった。根源的生命への合一の感情こそ、人類が人類として地上に立った時以来懐かれてきた原初的宗教感情である。神話は、その感情を、男女二神の聖婚という形でも表現する。

わが国のイザナキ・イザナミ二神による島生みの神話も、天地二神の聖婚譚の一つであった。イザナキとイザナミの男女二神は、下界の海を掻き回してつくった淤能碁呂（おのごろ）島に天降り、そこで夫婦の交わりをし、日本の多くの島々を生んだ。このイザナキ・イザナミ二神の原始交合による島生みの物語にも、万物は天と地の結合によってのみ生み出されるという考えがある。

古代ギリシアでも、原初のカオスから生まれた地母ガイアは、自分自身で天父ウラノスを生むとともに、このウラノスと結婚して、多くの神々や巨人族などを生んだことになっている。

古代エジプトでも、シューとテフネトから、大地の男神ゲブと天空の女神ヌトが生まれ、両者が結婚して、オシリス、イシス、セト、ネフティスの四神が生まれている。ここでは、天地、男女の振り分けが、他の神話とは逆になっているが、天地二神の聖婚から新しい生命が生まれてくるという思想には変わりがない。

天父と地母の聖婚による神々の生成という古代の人々の観念には、万物が生成してくるには、天地が分離する以前の宇宙の偉大な生命力に帰一する必要があるという想念があった。天地の聖婚は、天地分離以前の宇宙の根源的生命力への回帰を表わして

いる。天地万物の生成する以前は、広大な混沌と考えられていたが、この混沌こそ宇宙の根源的生命を宿すものと考えられていた。新しい生命を生み出すには、この根源的生命に帰る必要があったのである。相対立するものが一つに結合することによって新しい生命を生み出しうるという考えの背景には、対立者の分離以前に存在した全体性と完全性に帰ってのみ、新しいものを生み出すことができるという考えがある。天地の聖婚という考えには、そのような哲学が潜んでいる。

古代の神話に神々の近親相姦の話が多く出てくるのも、このような思想からの必然の帰結であった。天なる男神と地なる女神は、大概、原初の混沌か、同一の両性具有神か、それ以前の父神と母神の結婚か、いずれにせよ、同一の源泉から生まれてきたものと考えられている。したがって、天地を表わす男女二神は、多くの場合、同じ親から生み出された兄妹という観念で象徴される。この天地二神の結合によって新しい神々が生み出されてくることを説くには、天地二神の聖婚は、どうしても、兄妹婚という近親相姦の観念で表わす以外になかったのである。

わが国のイザナキ・イザナミ二神の神話は、華南から東南アジア、中部インドにかけて広く分布している兄妹始祖型洪水神話にその源泉をもっていると考えられている。とすれば、イザナキ・イザナミの聖婚も、兄妹婚だったと推量される。兄妹始祖型洪水神話は、大洪水で生き残った兄と妹が結婚して新しい人類社会を築き上げるという神話である。このような兄妹始祖型洪水神話でなくとも、例えば、古代エジプトのゲブとヌトの結婚も、同じシューとテフネトから生まれた息子や娘同士の結婚という形をとるから、どうしても兄妹婚の形をとらざるをえないのである。なかには、これが、母子婚という形をとることもある。古代ギリシアのガイアとウラノスの結婚は、母子婚の形をとっている。だが、これは、変則的なものと考えてよいであろう。

この近親婚は、一と二の分離と結合という矛盾した論理を象徴的に表現する。同じ一から二が生ずることを、同じ親から生ずる兄妹で表わし、分離した二が再び一に結合することを兄妹婚という形で表現しているのである。兄妹という表現によって、源泉が同じであるということと、一が二に分離されていることを同時に表現し、兄妹の結婚という形で、二の一への結合を表現しようとしているのである。このようにして、どこの神話でも、一から二が分裂し、分裂した二が一に結合して、また新しい二を生み出すという論理によって、神々が次から次へと生まれてくる生成の系譜が形づくられる。それは、神話の論理であり、生成の弁証法なのである。

例えば、古代エジプトでは、原初の混沌を表わす海ヌウから太陽神アトゥムが生まれ、一説によれば、アトゥムの自慰行為によって、空気シューと水テフネトが生まれ、両者の兄妹婚によって、大地ゲブと天空ヌトが生まれ、この天地二神の兄妹婚によって、冥界の王オシリスと豊穣神イシス、セトやネフティスが生まれ、オシリスとイシスの兄妹婚によって、エジプトの王権の源泉ホルスが生まれたことになっている。

この神々の系譜は、一から二、二から一、一から二という論理によって、混沌から

の万物の生成を説いている。どこの神話にも見られるだらだら坂のような神々の系譜は、以上のような生成の論理によって構成されているとともに、そのことによって、大きな生成宇宙観を象徴的に表現しようとしているのである。そこには、存在を生成からとらえる深い生命論的世界観が潜んでいる。

戦いの原理

もちろん、神話は、一から二への分裂や二から一への結合という原理によって万物の生成を説くばかりでなく、神々の世代間の戦いによっても、万物とその秩序の生成を説く。

例えば、古代バビロニアの『エヌマ・エリシュ』も、若い神々の老いた神々に対する戦いと、その戦いに勝って主権者となる英雄神マルドゥクの業績を描いている。騒々しい若い神々を滅ぼそうとしたアプスーをエアは殺害し、このエアとダムキナの間に生まれたマルドゥクは、怪物と化したティアマトと戦って、世界の主権を握り、世界の秩序を創り出す。

古代ギリシアのヘシオドスの『神統記』でも、ウラノス、クロノス、ゼウス、三代にわたる戦いが繰り広げられている。クロノスは、ウラノスの男根を切り取って、天界の支配権を奪い、ゼウスは、このクロノスと戦って、世界の支配権を握る。

古代メキシコのアステカの神話でも、赤いテスカトリポカと黒いテスカトリポカとケツァルコアトルとウィツィロポチトリの四人の兄弟神の戦いによって、五つの太陽の時代の変遷が説かれている。勝利を収めた神が新たに世界をつくり直し、その神が敗北すると、次の勝利者がまた別の世界をつくるという形で、世界の創造と破壊の繰り返しが描かれている。

これら世界の主導権を巡る神々の戦いを物語る神話は、どれも、戦いによって世界万物の秩序が生成してくる過程を述べている。そこには、戦いこそ万物とその生成の起源であるという思想がある。

善悪二神の対立によって世界創成を説くゾロアスター教の二元論的な教義も、神とその反抗者の戦いによる創造を説く。

最高善を表わす全知全能の神アフラ・マズダと、悪の根源を表わすアングラ・マインユは、定められた一万二千年の間戦う。最初の三千年に、アフラ・マズダは、天空、水、大地、植物、動物、人間のすべてを創造したが、それを見えない状態にしておいた。しかし、次の三千年には、これらの創造物は見える状態に移行し、それとともに、アングラ・マインユは、アフラ・マズダの創造した世界に侵入しようと試みるが、アフラ・マズダに撃退される。しかし、次の三千年には、アングラ・マインユは力を盛り返し、アフラ・マズダの創造に対して攻撃を開始。そのため、それまでこの世になかった死、滅亡、病気、そして様々な悪徳がもたらされる。次の三千年には、救世主ゾロアスターが出現する。われわれは、現在、この最後の三千年期にいる。この時期

は、善と悪とが混合した時期と考えられ、千年毎に一人の救世主が現われるという。

このゾロアスター教の善悪二神による世界創造の神話も、戦いこそ創造の原動力であるということを語っている。ヘラクレイトスが言うように、戦いは万物の父であり、万物の王である。相対立するものが互いに闘争することを通して、創造的なものが生み出される。ちょうど、弓とその弦とが互いに逆らい合うことによって働くように、万物は戦いを通して生じてくるのである。ゾロアスター教のような極端な二元論でなくとも、世界の多くの神話には、創造主の創造を妨害する反抗者、トリックスターがしばしば登場する。それらは、いずれも、戦いこそ創造の大きな契機であることを物語っている。

一から二への分裂、二から一への結合、そして、対立者の戦いを通して、万物は生み出され、世界は、混沌から秩序へ生成発展していく。光と闇、時間と空間、天と地、太陽と月、昼と夜、星、地下、陸と海、山と川、野、金属や石、動物や植物、そして人間など、万物が生み出され、その秩序が形成される。

このようにして、原初の混沌の中に働き出ていた宇宙の根源的生命は、一から多へ、自分自身を多種多様な仕方で分化させ、その多様性の中に自分自身をあますところなく表現する。世界は、一から多への常なる生成そのものである。一なるものは多なるもののうちに働き出、多なるものは一なるもののうちで働く。これが、生成の原理である。

古代インドのヒンドゥーの神々は、この真理を最もよく表現している。例えば、太陽の光輝く作用が神格化されたヴィシュヌ神は、叙事詩・プラーナ時代には、野猪（のい）、人獅子、矮人（わいじん）、魚、亀、パラシュラーマ（斧を持つラーマ）、ラーマ、クリシュナ、仏陀、カルキ（白馬）に、それぞれ化身し、姿を変えたと想像されている。インドの神々は、一般に、多くのものに化身し、変幻自在、千変万化の様相を呈している。それは、一であって多であり、多であって一であるという宇宙の生成原理を象徴したものなのである。

宇宙生命は、多なる一であり、一なる多である。多の中に一が働き、一の中に多が働く。根源的一は万物のうちにあり、万物は根源的一のうちにある。混沌からの生成を語る世界創成神話は、少なくとも、そのような真理を語っている。

3　創造と再生

創造型神話

世界がどのようにして創成されたかを説く世界創成神話には、混沌からの生成を説

く生成型神話と、超越神による創造を説く創造型神話と、二つの大きな類型がある。このうち、創造型神話では、生成型神話とは違って、一人あるいは複数の高神が何らかの方法で世界万物を創造したという形で、世界創成が説かれる。特に、ヘブライ神話は、唯一の至高神が単独で世界を創造する形式をとる。しかし、この神話にも、いくつかの点で、それ以前の生成型世界創成論の影響が見られる。

『旧約聖書』の「創世記」の伝えるところによれば、神は初めに天と地を創造したが、まだ地は形なく空しく、闇が淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてを覆っていたという。そして、神が「光あれ」と言うと光があり、神はこれを見てよしとした。以来、光と闇、昼と夜が区別されるようになった。かくて、それ以後、神の言葉から、天蓋や大地や海、草木、星、太陽、月、鳥、魚、昆虫、家畜、獣、そして人間が創造されたという。

この「創世記」の伝える最初の水は、原初の混沌を表わすものであろう。とすれば、この『旧約聖書』の伝える世界創造神話も、その源泉は、混沌からの生成を説くそれ以前の創成神話にあると考えねばならない。もちろん、この「創世記」の語る創造神話では、混沌の秩序化は、混沌を超越した存在としての神の言葉の力によって実現される。この超越神による創造という点が、他の混沌からの生成神話と異なった点であり、確かに、ユダヤ・キリスト教独自のものと言えよう。そこに〈生成〉と〈創造〉の世界観の違いがある。

しかし、言葉から世界万物が創造されるという創造神話は、『旧約聖書』ばかりでなく、世界各地に残されている。

例えば、古代インドのプラジャーパティ神にまつわる神話にも、言葉による創造の部分がある。黄金の卵が割れて出てきたプラジャーパティは、ブーフ、ブヴァハ、スヴァルという三語を発すると、その言葉がそれぞれ、地、空、天となったと言われている。

同じような創造神話は、古代エジプトにもある。プタハ神に関する神話では、この神は、心に思い、舌を用いて名を呼ぶことによって、万物を創ったという。万物の名を発声することによって、彼の発話のもつ力がすべてのものに生命を与えると考えられたのである。

言葉の力による創造という観念は、世界の神話のどこにでもあるところをみれば、『旧約聖書』の世界創造神話も、古代的・異教的な源泉をもつものと考えねばならない。現に、わが国の言霊（ことだま）信仰にせよ、ギリシアのロゴスに対する信頼にせよ、どこでも、古代においては、言葉に偉大な霊力が宿っており、事柄を左右する力があると信じられていた。言葉は無限の生命力を持ち、言葉こそ混沌から秩序をつくりだすものと考えられていたのである。このような言葉の霊力に対する信仰が、『旧約聖書』にも流れ込んでいる。

そればかりでなく、多くの創成神話の中には、言葉からの万物の創造を説くもの以外に、欲望や意志や思考などから万物が生み出されてきたという創成神話も見られる。これは、どれも、創造における心的契機を重視した一種の唯心論的世界創成観と言える。

例えば、むしろ、生成型創成神話に属するものであるが、古代インドの『リグ・ヴェーダ』（一〇・一二九）では、欲望を通しての創造という考え方が述べられていた。ここでも、原初には水だけがあり、その水の中に生命をもつ芽があった。この生命をもつ芽から、欲望が生じ、その欲望からすべてのものが生まれたという。

また、古代インドのブラーフマナ時代の創造者ナーラーヤナも、自らの意志によって万物を創造している。ナーラーヤナは、長い間、原初の水ナラの上に、菩提樹の葉に乗って、足を吸いながら漂っていた。この自己対話の後、彼の創造しようという意志によって、宇宙は形づくられた。蒼天が鼻から、天と太陽が瞼から、巡礼地が耳から、雲と雨が頭髪から、閃光が鬚から、岩が爪から、山が骨から生まれたという。

また、原初の大洋上で、巨大な身体をアナンタという大蛇の上に横たえて眠っていたヴィシュヌ神は、すでにその時に、やがて創造される世界のすべてを夢想していたという。世界が創造されるべき時が来ると、ヴィシュヌの臍から蓮が芽を出し、やがてその蓮の花から四つの顔をもつ創造神ブラフマーが現われた。そして、この蓮の花が大地となり、ヴィシュヌの夢想のうちにあった世界が、現実のものとして創造されたという。

言葉からの創造にせよ、欲望や意志からの創造にせよ、夢想あるいは思考からの創造にせよ、いずれも、精神的働きから世界が創造されたという観念をもっている。この精神的力によって世界が創造されたという観念には、世界の根源に精神的力を考える唯心論的世界観があると言わねばならない。

確かに、この世界は、単に物質によってのみ成り立っているのではない。物質を形成し、統合して、秩序を与える心的力が、物質そのもののうちに宿っていなければならない。宇宙の根源に働き出ている力は、また、一つの心的力であり、それが物質を形成し、生命体を維持する生命力ともなり、動物を動かす魂ともなり、人間を動かす精神ともなると考えるべきであろう。精神作用からの世界創造を説く創成神話は、この宇宙の根源において働く心的力を強調したものと考えることができる。紀元前五世紀ごろの古代ギリシアの哲学者アナクサゴラスは、世界の秩序と運動を与える原理としてヌース（nous・理性）というものを考えたが、この世界を動かす精神的原理は、すでに、それより以前の古代の創成神話の中で語られていたことなのである。

ヘブライ神話における言葉による創造という考えも、この唯心論的創成説に属するものとみることもできる。ただ、ヘブライ神話は、そのような世界万物の創造を、唯一の超越神の創造という観念によって統一する。つまり、〈存在するもの〉を〈存在そのもの〉つまり〈在りて在る者〉による創造という観念によって説く。この型の世界

観でなお残る問題は、存在そのものとしての神と、混沌あるいはそれ以前の無とがどのように関係しているのかという点が、必ずしも十分には解けないということであろう。ユダヤ・キリスト教圏のその後の神学や哲学の努力は、ある意味で、この最大の問題を解くことに費やされてきたとも言える。

創造と破壊

世界の神話には、また、創造された世界が破壊され、そして再び創造され、これが繰り返されるという観念があった。世界は、創造と破壊を絶えず反復して、自分自身を更新すると考えられていたのである。世界はその終末において、一旦始源へ復帰し、原初の混沌へ戻って、再び創造される。

世界の多くの神話に残されている洪水神話は、世界の創造と破壊という観念を象徴的に物語るものである。洪水神話は、世界が大洪水によって破滅し、人間も少数の生存者を除いては全滅したが、洪水が引いてからは、また新しい世界が始まったと語る。大洪水によって世界は再び混沌状態に戻るが、そこから再び秩序ある世界が再構築され、新しい生活が始まったという。

シュメールの伝承でも、この洪水伝説は、ジウスドラ王の物語となって伝えられている。この伝承によれば、パンテオンの一部の神々の反対にもかかわらず、洪水を起こし、人類を絶滅することが決定される。ジウスドラ王は、守護神からこの決定を知り、この大洪水を逃れる。七日七夜を経て太陽は再び昇り、王は、太陽神ウトゥの前にひれ伏し、大主神アンとエンリルから永遠の生命を与えられ、ディルムンの楽園に住んだという。

このシュメールの洪水伝説は、その後、古代バビロニアのよく知られた『ギルガメシュ叙事詩』（XI・八―一九六）に、いくつかの変更を伴って取り入れられた。永遠の生命を与えられたと言われるシュルッパクの聖王ウトナピシュティムは、永生の秘法を求めてやってきたギルガメシュに、次のように語った。神々は、人類を滅ぼすために、大洪水を起こそうと決定したが、エア神は、ウトナピシュティムに神々の決定を告げ、大洪水から逃れる方法を教えた。彼は、神の教えの通り、自分の家を壊して六階建ての大きな四角い船をつくり、自分の財産や家族や召使や動物などを船に乗せた。すると、大雨が降ってきて、大洪水となり、六日六晩続いた。そのため、人類は滅び、土と化してしまった。だが、七日目になると水は治まり、船はニトシルの山に辿り着いた。一匹の鳩を飛ばした時には鳩は帰ってきたが、烏を放した時には帰ってこなかった。こうして洪水が引いたことを知り、ウトナピシュティムとその一族は生き残ったという。

『旧約聖書』が伝えるヘブライの洪水伝説、ノアの方舟の伝承は、このバビロニアの伝説か両者に共通の資料を基にしてつくられたものであろう。ただ、ヘブライ神話では、神によって大洪水が起こされ、人類が滅ぼされたのは、人類の罪によるという

解釈が加えられた。したがって、また、神に対して義しき者のみが救われるという考えも打ち出されたのである。ここでは、秩序ある人間世界を再創造し、原初の完全性に復帰させるためには、堕落した人間世界は滅ぼされ、罪ある世界は徹底的に破壊されなければならないと考えられたのである。

ギリシア神話のデウカリオンの説話も、同系統の洪水神話に属し、同じようなモチーフによってつくられている。ゼウスは、堕落の極に達した人類を滅ぼすために、大洪水を起こしたが、義しき人デウカリオンとその妻ピュラにだけは、方舟に乗ってこの災いから生き残ることを許した。パルナソス山に着いた彼らは、洪水が引いた後で方舟から降り、肩越しに石を投げると、その石は人間の男や女になり、多くの人間が生まれた。彼らこそ、現在の人類の祖先だという。

他方、古代インドの『シャタパタ・ブラーフマナ』（一・八・一―一〇）では、この洪水神話は、賢者マヌの物語となって伝えられている。マヌが、一匹の魚を育ててやると、その魚は、洪水が起きるから方舟をつくれと教えてくれた。マヌがその通りにすると、洪水が起き、その魚が方舟を引いてくれて、ヒマラヤの山に着き、マヌは助かった。しかし、マヌは一人だったので、供犠を行ない、その供犠に供した乳などが女に変わったので、その女と結婚して、子孫を儲けたという。

アジアに広く分布している兄妹始祖型洪水神話も、人間の堕落というテーマはもたないが、大洪水から人類の祖先になる最初の人間が生き残るという点では、他の洪水神話と共通している。そこでは、大洪水の後、生き残った兄と妹が、水中から顔を出した岩や山に立ち、結婚して人類の子孫を生むという型が多い。わが国のイザナキ・イザナミ二神の物語も、水の中から出現した島で結婚が行なわれていることなどを考え合わせれば、この兄妹始祖型洪水神話の残滓と考えることができる。

アステカにも、同じような洪水神話がある。アステカでは、世界の創造は四回行なわれ、それぞれ異なる神が支配し、異なる種類の人間が、異なる食物を食糧にしていたと信じられていた。大洪水は第四の時代に起き、人間はみな、魚に変えられたという。この洪水で世界が滅んだ後、天、地、人間が創られる。テスカトリポカとケツァルコアトルが、水を消し、落ちた天を上げ、火を創造し、他の神々は、天、地、雨、夜、星、地下世界を創造した。その後、ケツァルコアトルが、死んだ人の骨と灰から人間を創造し、さらに、その食糧としてトウモロコシを創造し、太陽と月を創造したという。

世界各地に広範囲に広がっている洪水神話には、倫理的モチーフを強調したものが目立つ。西アジア地域のように、人類の罪や堕落のために洪水が起こされたとするものもあれば、太平洋地域のように、禁忌の侵犯などを洪水の原因とするものまで、様々である。しかし、この倫理的モチーフは、世界の洪水神話が最初からもっていた主要なテーマではなかった。現に、同じ西アジアでも、この神話の古層に属するシュメー

ルやバビロニアの洪水神話には、人間の罪や堕落、神の懲罰などを強調した部分はない。また、東アジア地域でも兄妹始祖型洪水神話は、多くの場合、倫理的モチーフを欠いている。

洪水神話が最初にもっていたテーマは、むしろ、世界の再生、あるいは再創造というテーマである。ちょうど生物がそうであるように、世界は、生まれるとともに老い、やがて死に至るが、しかし、また、生物同様、世界は新しい世界をつくって甦らねばならないと考えられたのである。そこには、何ごとも生命をモデルにして考えようとする古代人の生命信仰がある。

世界は破滅し、元の混沌に戻るが、再び混沌から再創造される。この世界の破壊と再創造、衰退と更新、原初への回帰と再生の間に介在するのが、大洪水であり、水のイメージである。水は、原初の混沌の象徴であった。世界は、大洪水によって、原初の水に帰り、この水の中から再び創造される。世界は混沌に帰って、そこから再生してくる。

この洪水神話に倫理的モチーフが加わった場合には、人類の罪や悪に対する懲罰ばかりでなく、同時にまた、罪や悪の浄化をも強調していると考えた方がよい。大洪水による水によって、人類の罪や悪は消え、かくて新しく世界は始まる。世界中にみられる洪水神話には、世界の死と再生という観念がある。

よく知られているように、北欧の伝承『エッダ』の中にも、神々の黄昏を語り、世界の死と再生を語る神話がある。古代の北欧の人々は、遠い将来、世界は滅び、再び新しい世界が創造されるであろうと信じていた。神々の黄昏の時代には、オーディンをはじめとするアスガルズの神々も、次第に力を失ってくる。恐ろしい冬が夏をはさまずに三度も続き、人間たちも互いに裏切り合い、殺し合いを始める。その様子を見た巨人のロキと、その子で狼のフェンリル、冥界の女王ヘル、大蛇のヨルムンガンドたちは、一斉に神々との戦いに立ち上がる。オーディン、トール、フレイ、ヘイムダル、テュールなど、神々とロキたちとの熾烈な戦いの末、両者とも滅ぶ。そして、世界は業火に焼かれ、次に大洪水となり、陸は海に没し、世界は滅ぶ。ところが、その中で生き残った神々が、熾烈な戦いの中でも焼け残った宮殿に新しい住まいを作り、新しい神々の世界が出来上がる。大地にも太陽や草木が甦る。リーヴとリーヴスラシルという男と女の生き残った人類の子孫は、その大地で多くの子孫を生むであろうという。

太陽は、朝、天に昇り、夕べには地に沈む。そして、それを繰り返す。月も満ち欠けを繰り返す。季節も、また、勢いの盛んな春夏を過ぎ、秋冬になれば衰える。それにつれて、植物も、春から夏にかけて、芽を出し生長し花を咲かせるが、秋から冬にかけて、実を結ぶとともに、枯れ萎んでいく。そして、それを繰り返す。世界の創造物は、どれもが死と再生を繰り返す。それと同じように、創造された世界全体も、死と再生を繰り返すと考えられたのである。世界の死と再生という観念、つまり、世界

は創造と破壊の反復であり、混沌への復帰とそこからの再創造の繰り返しであるという考えは、このような世界万物の生命力の循環から想像されたのであろう。

宇宙を創造と破壊の終わることのない循環ととらえる古代的な観念は、また、現代の宇宙論にも通じている。現代の宇宙論の一部では、宇宙は膨張と収縮の無限のサイクルだと考えられている。膨張する宇宙もやがて収縮に向かい、極限においては無に帰してしまうが、この無から宇宙は再び生まれ出てくる。そして、それが繰り返されるという。宇宙は、死と再生を繰り返して永遠に生き続ける一つの生命体なのである。偉大なる宇宙生命への畏怖の念から出発した古代の宗教感情は、世界を創造と破壊の反復と考え、世界の死と再生という現代の宇宙論にも通じる観念を生み出したのである。

V　儀礼と象徴

1　宇宙の循環と農耕牧畜儀礼

宇宙と人間社会の更新

古代バビロニアでは、新年はニサンの月（今日の三月から四月にかけての一ヵ月）に始まった。このニサンの月の一日から十一日間、バビロンでは新年祭が催された。一日から四日までは準備的なものであるが、四日には、マルドゥク神の像の前で、バビロニアの創成神話『エヌマ・エリシュ』が詠唱され、アプスーとティアマトの結合による神々の誕生から、マルドゥクによるティアマトの征服と天・地・人の創造、マルドゥクの神殿建設の次第が語られた。

五日には、神殿その他の浄めの儀式が行なわれ、マルドゥク神のエサギラ神殿において、王の儀礼が行なわれた。そこでは、まず、王は、王権を象徴する剣や笏、指輪や王冠を取り外され、神官によってマルドゥク神の前に連行される。そして、そこで、王は、罪を犯さず正しく統治したことを告白する。次に、神官は、王にマルドゥク神からの祝福を伝え、王権の象徴である宝器を返す。王は、マルドゥク神像の両手を握り、神より再び王位を許される。この時、神官は王の頬を打ち、王が涙を流せば、国家にとって吉兆であり、涙を出さないと敵が起ち破滅を招くと言われた。

その後、おそらく五日か六日に、「運命の決定」という儀礼が行なわれた。そこでは、マルドゥク神が聖なる門の向かいに位置していたウブシュケンナ（神々の議事堂）の中の運命の玉座に座し、エンリル神として、バビロニアの他の諸都市から到着した神々の服属の礼を受け、来たる日と王の運命を決める。九日には、マルドゥク神は、エサギラ神殿を出発して、大行列路を通って運河に到り、祭りの船に乗り、波止場より上陸し、両側の赤松が匂うアキトゥの道を通って祭場に到る。十日には、マルドゥク神は「祈りの家」と呼ばれるアキトゥの神祠の座に着く。王は熟餐を供え、祈りの儀式を行ない、捧げ物を献ずる。十一日には、市に帰る行列が出発し、往きの道を引き返して、イシュタル門を通って市内に入り、行列路、リービルヘガル橋、聖なる門、運命の玉座を経て、エサギラ神殿に帰る。そして、祝宴を開いた後、他の神々は、それぞれの都市に帰ったという。

古代の人々にとって、新年は、古い一年が死に、新しい一年が再生してくることに

他ならなかった。特に、それが、バビロニアのように、ものみな芽吹く春の到来と重なっている時には、一年の始まりは、すべての生きとし生けるものの甦りを意味した。新年祭は、一年の死と再生、冬の死と春の到来を祝い、これを表現する儀礼であった。世界は、一年の終わりとともに、始源の混沌に帰り、一年の始めとともに、そこから再生して秩序を回復する。

世界創成神話が新年祭の度毎に繰り返されたのは、この始源への回帰とそこからの再生を保証するためであった。古代の人々にとって、宇宙は、常に死と再生を繰り返し、一つのサイクルを描くものと考えられた。四季の移り変わり、太陽の運行、月の満ち欠け、惑星の軌道運動などは、この宇宙の循環を象徴するものであった。しかも、そのような宇宙観が、新年祭という儀礼によって表現されたのである。新年毎に詠唱された世界創成神話は、年々の宇宙秩序の確認に他ならなかった。

古代バビロニアの新年祭で詠唱された世界創成神話も、年々の宇宙の更新を表わすものであった。アプスーとティアマトの結合による神々の誕生から、マルドゥク神による秩序の確立の物語とその繰り返しは、年毎の宇宙の秩序の回復を意味し、同時に、その一年の安寧を約束するものと考えられた。

このような意味での新年祭は、メソポタミアばかりでなく、世界中のどこででも祝われていた。宇宙生命への無限の畏怖の念から出発した古代の信仰は、新年祭というような儀礼の形をとっても表現されたのである。

もっとも、世界創成神話は、新年祭の時にのみ朗誦されただけではない。世界創成神話は、メソポタミアばかりでなく、古代世界の各地で、神殿や家屋の建設、都市の建設、入植、病気の治療、不作からの脱出、成人式、出産など、ものを作り出したり、生み出したり、回復させようとする時に、繰り返し詠唱された。世界創成神話は、ものの創造の模範を示したのである。病気や不作など無秩序化は、世界創成神話の朗誦によって克服されるものと考えられた。ものごとが新しく生み出されるということは、宇宙創成と同一視された。一人の人間の誕生や成人も、宇宙の誕生と秩序の確立になぞらえられた。あらゆるものの生命は、始源に立ち帰ることによって再生されると考えられたのである。そこには、人間のなすことすべてが偉大な宇宙の生命力に支えられてのみありうるという深い考えがある。それは、宇宙生命への畏怖を本質とする古代宗教の世界観だったのである。

古代バビロニアの新年祭は、世界創成神話の朗誦による宇宙の更新の儀礼ばかりでなく、その宇宙の更新によって保証される王権の更新をも含んでいる。そこでの王権の儀礼的剥奪、神による王権の再保証、服属儀礼、供饌式、パレードなど、一連の王権にかかわる儀礼は、王権の更新を象徴するものである。

古代世界では、人間社会は大宇宙の縮図であり、小宇宙だと考えられていた。したがって、人間社会を統括する政治の構造も、宇宙の構造と一致すべきものとされた。古代バビロニアをはじめ、どこの古代世界でも、宇宙の更新を表現する新年の儀礼と

王権の更新を保証する儀礼とが一つになっているのは、そのためである。王は、宇宙の運行の地上における体現者であった。古代エジプトや古代バビロニア、古代インドや日本、インカなど、世界の多くの地域で、王が太陽あるいは太陽の子孫と考えられたのも、政治と宇宙の深い結びつきを語っている。王は、宇宙と人間の間の媒介者であった。ここでも、王権という人間社会の秩序の原理は、偉大な宇宙の生命力に支えられてのみ成り立つという信仰がある。それは、一種の宇宙教とでもいうべき古代宗教の世界観に基づくものであった。

だから、全宇宙を体現する王は、また、豊穣と繁栄を約束し、それに責任をもたねばならなかった。古代バビロニアの新年祭で行なわれた王に対する奇妙な平手打ちの儀式でも、それによって涙が流れると良い前兆だと考えられたところをみれば、その涙が豊穣を約束する雨の象徴と考えられたからかもしれない。

天地のリズムと人の営み

人類が小麦や米など農耕を覚えて以来、人間の営みは、四季の日照りや雨、大地の肥沃など、天地の循環に左右されることが多くなった。そのため、古代社会では、犂耕祭、播種祭、収穫祭、感謝祭など、豊穣を祈る農耕儀礼が、季節季節に行なわれるようになり、それが発展していった。それらは、どれも、年々の天地のリズムの中で営まれ、それを反映していた。

例えば、シュメールのニップールでは、第二月の二十一日に、ナンシェ女神を祝う犂耕祭が行なわれ、この祭りから犂入れの季節が始まるとされていた。この祭りは、王が主宰するもので、犂をつけた牛で特別な耕地を耕す儀礼であった。この時、ナンシェ女神に捧げる讃歌とともに、ウルルママといわれる牛飼い歌が、合唱隊によって唄われた。この犂耕祭では、シェグヌと呼ばれる春播きの麦を播いたと言われる。

また、シュメールのウルの第六月に行なわれていた播種祭をはじめ、特別な祭場（アキティ）で行なわれる祭りは、どれもアキティ祭と呼ばれていた。アキティは、一般に、市の城壁外の運河の側にあった。そこで行なわれる祭りは、王が主宰し、全市民が参加する祝祭であった。それは、行列や船で神殿から神像やシンボルを運び、田畑や村落を歩き回り、境界を確かめ、豊作を祈願するものであった。アキティ祭（アキトゥ祭）としては、新バビロニア時代以降のアキトゥ祭が有名である。第一月のニサンの月に行なわれた新年祭も、アキトゥ祭であった。

また、太陽の高度が最も高くなり、日が一番長くなる夏至のころは、小麦農業を営む地域では、ちょうど、小麦の刈り取りの季節に当たる。それで、この時期には、それらの地方では、夏至の祭りを兼ねた収穫祭が行なわれた。例えば、古代ケルトでは、夏至の前夜に豊穣女神エスニアを讃える祭りが行なわれた。農民たちは、棒の先に干

し草や藁を結びつけ、松明をつくり、それをかざしながら、夜中までエスニアの丘の周囲を歩き回る。それが済むと、自分たちの畑の中へ散らばり、よく稔った畑や肥った家畜の上で、その松明を振りかざす。そして、翌年もまた福運と豊作がもたらされることを祈った。

古代エジプトで最もよく知られたミン神の大祭は、宮廷の祭祀と結びつけられたために大規模化しているが、これも、もとは収穫祭であった。ここでは、王と王妃と白い牡牛が行列に加わり、王が小麦の穂を切って牡牛に与える儀式が営まれたという。

太陽の高度が最も低くなり、日が一番短くなる冬至のころは、米作地帯では、ちょうど米の収穫も終わり、新しい年を迎える準備の季節である。それで、この時期には、米作地帯では、感謝祭を兼ねた冬至の祭りが行なわれた。

例えば、わが国の弥生の頃から営まれ、今日もなお営まれている新嘗祭も、冬至の祭りであった。冬至は、太陽の霊力が最も弱くなり、同時にそれが復活する日でもある。しかも、この太陽によって育まれる穀物の霊力も、また、太陽とともに回復するものと考えられた。また、人間の霊力も、この太陽の霊力や穀物の霊力と同時に復活すると考えられた。この太陽と穀物と人間の霊力の復活を祈る儀式が、冬至の祭りであり、新嘗の祭りに他ならない。この時、宇宙は一旦、天地創成の原初に回帰し、そして再生してくる。これと同時に、新しい年が到来してくるものと考えられたのである。新嘗祭は、神々に神饌を供えるとともに、その神饌を神々とともに人が食す儀式である。だが、それは、神饌に象徴される太陽と穀物の霊力を人間自身が体内に宿し、自らの再生を祈るものでもあった。このことによって、人々は、過ぐる年の収穫に感謝するとともに、来たるべき年の豊作を祈ったのである。

農耕にまつわる人々の営みは、何事も、季節毎に変化する天地のリズムの中で営まれた。人間自身のリズムも、常に天地のリズムと共鳴し合っていたのである。春から夏、秋から冬にかけての数多くの農耕儀礼は、このことを象徴している。

天地の聖婚

特に、多くの農耕儀礼に見られる天地の聖婚という観念には、天地の結合による生産力の増強があって、はじめて穀物の豊穣も約束され、人間の営みも稔り多きものとなるという考えが含まれていた。大地は、万物を生む多産な女神であり、天空はこの大地の女神を孕ませる男性の繁殖者であった。この両者が結合することによって、農耕という人間の営為も保証されると考えられたのである。逆に言えば、畑に種を播いて穀物を育て収穫を生み出す農耕という人間の営みは、すぐさま、子を作り生み出す人間の男女の生殖行為と同一視され、この方向から象徴的に理解された。そして、この観念は、ただちに、天なる男神と地なる女神の聖婚という観念にまで昇華され、これを象徴する儀礼が各種の農耕儀礼の中で演じられたのである。

古代宗教にしばしば見られる天地二神の聖婚の儀礼は、このような農耕儀礼から出

発し、王権の保証にまで発展していった儀礼であった。シュメールの新年祭で行なわれていた王と女神イナンナの聖婚の儀礼は、その最も古いものである。シュメールの新年祭も春分の頃に行なわれていたようであるが、少なくとも、ウル第三王朝時代の新年祭は、おおむね次のような次第で執り行なわれていた。

まず、王が、犠牲と聖婚用の贈り物を乗せた船で街に到着し、神殿まで車による行進を行なう。次に、ドゥムジ神の役目を果たす王がそれにふさわしい衣装をまとい、イナンナ女神の役目を果たす女性神官が入浴と化粧をして、聖婚の準備をする。模擬劇が演じられ、人々は踊りによってこれに参加する。かくて、合唱による対話によって、イナンナ女神はドゥムジ神を招待し、聖婚が行なわれる。その後、「運命の決定」が行なわれ、宴と音楽と競技が催され、その年の豊穣が約束されたという。

ここで演じられる聖婚の儀礼は、大体、当時の結婚式と同様の形式で執り行なわれていたとみられる。まず、花婿が、結婚の贈り物である食物を持って、花嫁の両親の家の戸口に来て、入れてもらえるように頼む。花嫁は、湯浴みをして、着飾ってから戸を開ける。ついで、花婿と花嫁は別々に花嫁の部屋に案内され、次の朝、若い二人が主人公となって盛大な宴が催される。聖婚の儀礼でも、およそ、以上のような結婚式の儀礼と同じような儀礼が営まれていたようである。

この聖婚では、シュメールの王はドゥムジを体現し、女性神官は女神イナンナを体現している。両者の聖婚によって、王は大地の霊力を身につけ、その年の穀物や動植物の豊穣、国土の繁栄を約束することができたのである。イナンナという名は天の神アンの妃という意味をもっているところから考えれば、この儀礼も、もとは、天地二神の聖婚という観念から出発したものである。ただ、農耕の発達とともに、天空神アンは退き、むしろ、穀霊を表わすドゥムジがイナンナの恋人の資格を得てきたのである。こうして、王はドゥムジの役割を果たすことによって、シュメールの諸都市の支配者という資格を得ることができた。

古代バビロニアの新年祭でも、タンムーズを体現する王とイシュタル女神を体現する女性神官によって、イシュタルとタンムーズの聖婚の儀礼が演じられたと言われている。これも、シュメールにおけるイナンナとドゥムジの聖婚の儀礼と同じ意味をもっていた。タンムーズはイシュタルの息子でもあり夫でもある。タンムーズとイシュタルの聖婚がなければ、穀物も稔ることはなく、動物も繁殖することはないと考えられていたのである。タンムーズも、ドゥムジ同様、農業神、植物神であるが、本来、穀物や植物を稔らせる力をもった天空の太陽神に取って代わった神である。

動物供犠と人身御供

農耕牧畜社会に多く見られる動物や家畜の供犠の儀礼も、宇宙論的意味をもっている。動物や家畜の犠牲は、通常、神々への犠牲、つまり、人間に幸福をもたらしてくれるように神々の協力を要請するための犠牲と考えられている。それはそれで正しい

のだが、しかし、動物供犠には、さらに、それ以上の意味がある。犠牲にされる馬や牛など、動物や家畜は、それ自身聖化されている。しかも、それが儀礼の重要な中心をなしているような場合には、それ自身が神または宇宙の神聖な象徴である場合が多い。動物の犠牲式は、それ自体、世界創成の再現という意味をもっていたのである。さらに、聖化され解体された犠牲獣の肉を、供犠に参加した人々が共食するというような場合には、宇宙の原初であり最も力強い神の霊力を自らの体内に宿すことによって、人間自身が再生するという意味をももっていた。

例えば、古代インドのヴェーダ儀礼の中でも、特に有名な馬の供犠、アシュヴァメーダは、もとは春の祭りであり、正確には新年の儀礼であったと言われるが、そこには、また、宇宙論的な意味が含まれていた。

この儀礼は王によって主宰され、王国の豊穣と繁栄はこの儀礼によって約束されると考えられていた。儀式そのものは、一年間自由な状態に置かれていた雄の競争馬を、自らを犠牲にして世界を創造したプラジャーパティ神の化身とみなし、犠牲に供す儀礼を主眼とする。この時、四人の王妃たちが馬の死体のまわりを取り囲み、そのうちの主妃が死体の傍らに並んで横になり、覆いが掛けられると、主妃はその馬と交わる儀礼をする。王妃が立ち上がると、すぐに、その馬の他、すべての犠牲獣が解体される。

この儀礼では、明らかに、馬は宇宙の始源と同一視されている。この供犠は、世界創成を再現しているのである。しかも、その馬と王妃とが交わるということは、宇宙の根源的力に王族があずかることを意味し、王族はその力によって国を支配することができるという観念があったことを物語っている。この儀礼は、世界創成の再現であるとともに、王権の保証の儀礼でもある。同時に、そのことによって、儀礼に参加した人々の幸福はもちろん、王国全体の豊穣と繁栄が保証されると考えられていた。この儀礼を通して、人々は宇宙の根源的力につながり、再び新たな霊力を得ると理解されていたのである。このような馬の供犠をはじめ、動物や家畜の供犠の習慣は、ゲルマン人、イラン人、ギリシア人、ラテン人など、インド・ヨーロッパ語族には広く分布している。

人身御供の場合も、動物供犠と同じような意味をもっていた。確かに、犠牲にされる人間は神々への犠牲であるが、同時に、犠牲にされる人間自身が神として扱われている面は見逃すことができない。

実際、古代インドの馬の供犠、アシュヴァメーダの後にも、すぐに続いて、人の供犠が行なわれたという。そこでは、一年の間自由を与えられたクシャトリアが選ばれ、犠牲に供されると、王妃がその死体の傍らに添い寝をしたという。もっとも、この供犠が実際に行なわれたかどうかは定かではない。だが、ここでも、犠牲にされる人間は、宇宙創成当初の巨人プルシャやプラジャーパティ神とも同一視され、アシュヴァメーダの儀礼の場合と同様の意味をもっていたと理解される。人身御供の儀礼も、動

物供犠と同列のものとみてよいであろう。それは、いずれも、宇宙創成の再現なのである。

十字架に架けられたイエスが神の子であり、死して復活したというキリスト教の教義にも、キリスト教以前の人身御供の儀礼に含まれていた観念が影響していたかもしれない。人身御供の儀礼は、一人の選ばれた人間の犠牲を、宇宙創成の再現あるいは神の自己犠牲とみているからである。イエスは人身御供だったのかもしれない。

しかし、人身御供の儀礼が大々的に行なわれていたのでよく知られているのは、アステカの例である。太陽神を崇拝していたアステカ人は、人間の生血を捧げることによって太陽神の霊力を保つことができると考えていた。そのため、多くの人間が太陽神の犠牲に供された。犠牲に選ばれた人間は、大部分が戦争の捕虜であったと言われる。だが、彼らは、命が救われるよりも、むしろ、永遠の幸福を保証されるなら、犠牲に供される方を選んだという。その他にも、神官たちから特に指名された者や奴隷などが犠牲に供されたが、彼らは、その死によって神聖視され、栄誉を与えられたから、取り乱すこともなく、わが身を喜んで犠牲に捧げたという。

多くの祭儀は歌や踊りを伴う演劇の形をとった。その演劇に、犠牲者は着飾って登場し、神話上の物語を実演して見せた。供物が祭壇に山と飾られ、ピラミッドの頂上に聖火が灯されて、犠牲式は執り行なわれた。犠牲者は、犠牲の石の上に倒され、火打ち石の小刀の一突きで胸を切り裂かれて、その心臓が取り出され、太陽の神に捧げられた。さらに、頭が切り落とされ、その頭蓋はツォンパントリという特別の架台に積み上げられ、崇拝されたという。

いかにも血腥（ちなまぐさ）い儀礼ではあるが、ここで犠牲に供される者は、神への生贄であるとともに、神そのものでもあった。彼らは、神のように飾り立てられ、丁寧に扱われ、礼拝され、香を焚かれ、まさに神の化身として崇拝された。この犠牲式に続いて行なわれた人肉食は、神の霊力を自らの体内に宿そうとするものだったのであろう。だから、犠牲者の犠牲は、また、神の死をも意味していた。神の犠牲なくして人間世界の豊穣安寧はありえないと考えられていたのである。

人身御供の儀礼は、アステカほど大々的なものではなくとも、古代民族では、古くは広く行なわれていたものであった。これらの儀礼は、確かに野蛮なものではあるが、しかし、そこには、また、壮大な宇宙論的な意味があったのである。

2　古代の密儀

死と再生の儀礼

宇宙の循環を反映していた農耕牧畜儀礼は、社会の発展とともに、国家の繁栄を保

証する王権儀礼にまで進展していったが、他方では、また、これは、非公開の密儀宗教をも生み出していった。古代の密儀宗教としては、イシス・オシリスの密儀、エレウシスの密儀、オルフェウスの密儀、ディオニュソスの密儀、キュベレとアッティスの密儀、ミトラスの密儀など、数多く知られている。これらは、どれも非公開で、参加者はその内容について口外してはならないとされていた。そのため、今日のわれわれは、これらの密儀に関しては断片的にしか知ることができず、その詳しい内容はよく分からないというのが実状である。

しかし、これらの密儀宗教は、何よりも、非公開の祭儀を中心とする高度な宗教体系であるという点では共通している。それは、どこまでも祭儀に参加することによって、哲学的思弁ではなく、身体を通して、ある宗教的経験を得ることを目標としていた。しかも、救済の対象は、国家や集団ではなく、個人であるという点が、他の共同体に向けられている宗教とは違う点である。したがって、古代密儀宗教は、それを執り行う祭司や神官など聖職者集団と、それに個人として参加する信徒によって支えられていた。

人々は、これらの密儀宗教に志願し、様々の試練を通して、最も深い秘儀に参入し、最後に、永遠の生を得るとともに、神的なものと一つになるという体験を得たのである。この密儀宗教の目標とするところは、参入者個人の魂の再生であり、神との一体化であり、偉大な宇宙と一つになることであった。それは、死と再生の思想を象徴的に表現する高度な宗教体系だったのである。

イシス・オシリスの密儀

紀元前三世紀ごろからヘレニズム時代の約四百年の間に、地中海世界に広く普及したイシス・オシリス（セラピス）の密儀は、イシスの力によって蘇生したオシリスにちなんだ密儀であった。そして、密儀参加者に、儀礼的な死から甦って永遠の生を約束した。この祭儀の前半部をなすイシスの密儀は、およそ次のようなものである。まず、密儀参入者は、沐浴斎戒の後、十日間肉食と飲酒を断ち、秘儀に参入する。新しい亞麻布の衣服を着た参入者は、神殿の至聖所へと導かれ、秘儀に関する沈黙の義務が言い渡される。その後、おそらく、参入者は、冥界へ降りて行き、再びそこから帰って来て、太陽と天上の神々を見る儀礼を受けたようである。参入者は、夜明けとともに、地下世界の夜の十二時間を象徴する十二枚の祭服を着て、至聖所から出て来る。そして、女神イシス像の前の木製の台の上に立つ。幕が取り払われると、太陽の姿を真似て着飾り、女神の像の姿をした参入者を見るために、群衆がやってくる。その後、にぎやかな会食が行なわれて、この秘儀は完了する。

要するに、この密儀は、儀礼的な死を通って甦り、永遠の生と神との合一を体験する儀礼なのである。参入者が儀礼的に冥界へ入って行って、そこを抜けると、輝く太陽が見えるようになっているのは、太陽神の夜から夜明けにかけての旅、死から生へ

の旅を追体験しようとするものであろう。参入者が、最後に、太陽の姿を真似て、女神像とそっくりになって、群衆の前に現われるのは、参入者がイシス女神と合一するということを象徴しているものであろう。

このイシスの密儀の後に行なわれたオシリス（セラピス）の密儀にも、秘儀があったようであるが、詳しいところは分かっていない。セラピス神は、紀元前三世紀の初めに、オシリス神にならって創出された神であるが、これも、必ずしもよく分かっているわけではない。だが、このオシリスの密儀も、死の試練の後、再生してきて、神と合一する儀礼だったようである。イシスの力によって復活したオシリスの神話は、死と再生の象徴となり、永遠の生を求める人々に、広く受け入れられていったのである。

エレウシスの密儀とオルフェウスの密儀

古代ギリシア、エレウシスの地に発し、地中海世界に広がったエレウシスの密儀は、デメテルからのペルセポネの略奪とその帰還の神話を再現する祭儀であった。エレウシスの密儀は、春に行なわれる小密儀と、秋に行なわれる大密儀によって構成されていた。そのうち、大密儀は、海への行列、供犠、聖物をもつ女神官を先頭にした行列、松明リレー、踊りや歌、競技などの一連の儀式によって執り行なわれた。この密儀への参入者たちは、断食をし、犠牲を捧げ、松明をかかげて、ペルセポネを探すデメテルの姿を再現したと言われる。だが、この密儀に含まれる秘儀に関しては、ほとんど分かってはいない。

しかし、およその推定によれば、秘儀参入者は、まず拔浄儀礼を受け、頭を布で覆って式場に向かい、動物の皮をひろげた椅子の上に座り、デメテルに関する言い伝えにならって、小麦粉と水とハッカを混ぜたキケオンを飲む儀礼を受けたようである。そして、最後に、松明が灯され、参入者は秘密の箱の中に入った聖物、小麦の穂を見る儀式を受けたという。

これらの一連の儀礼の基調には、ペルセポネの冥界への下降と冥界からの帰還にならって、参入者自身が死と再生を体験しようという意図がある。キケオンを飲む儀礼は、もちろん、デメテルがエレウシスの王妃メタネイラから受けた接待を追体験しようとするものである。また、聖物の小麦の穂を見るという儀式は、小麦の穂に象徴されるデメテルを見る、つまり神を見ることを表わし、神と一体になって生まれ変わることを意味している。こうして、参入者は、儀礼的に冥界を通って、死後の幸福と永遠の生を得ることができる。これも、また、死と再生を象徴する儀礼だったのである。

エレウシスの密儀とならんで、ギリシアを中心に地中海世界に広がった静かな密儀としては、オルフェウス教の密儀がある。この教えは、トラキア出身の吟遊詩人で竪琴の名手、オルフェウスによって始められたという。その儀礼と教義は、この教えの影響を受けていたプラトンの諸著作などを通して推測される。その儀礼は、禁欲、戒

律、浄めなどを含み、特殊な修行によって救済を約束するものだったようである。特に、オルフェウスの密儀を特徴づけるのは、音楽である。信徒は、音楽の魔術的な力を通して、神との合一に導かれたという。

紀元前六世紀ごろから続いたピュタゴラスとその学派は、このオルフェウス教の流れを汲んでいると言われる。彼らは、宇宙を数学的比例によって成り立つ調和の体系と考え、それは音楽の調和となって現われていると考えた。それゆえ、人間は、音楽と数学を通して魂を浄化し、宇宙の調和と一つになれると考えたのである。

オルフェウス教の教義は、魂についての教説によって特徴づけられる。この流れを汲むピュタゴラス学派の考えによれば、人間はもと罪を犯したために、その罰として、魂が肉体の墓に閉じ込められた。したがって、そこから解放されるには、肉体によって影響される感覚的生活から解脱し、魂を浄化しなければならない。数学や音楽の修行は、この魂の浄化のためである。魂は、肉体から解放されて、はじめて純粋になる。魂は不死である。死とは、魂の肉体からの解放であり、さらに輪廻転生からの解脱であり、魂の純化に他ならないという。

ディオニュソスの密儀

エレウシスの密儀も、オルフェウスの密儀も、静謐（せいひつ）で瞑想的な密儀であるが、これに対して、凄惨な犠牲式や狂気を通して神的なものと一つになろうとする密儀の流れもあった。ディオニュソスの密儀やキュベレの密儀は、その例である。

トラキア地方に起源をもち、古代ギリシアをはじめとして地中海地域全域に及んだディオニュソスの密儀は、若きディオニュソスが八つ裂きにされ、そこから再び甦ってきたという神話を中心とした密儀であった。ディオニュソスの祭儀には、いくつかの公開の祭儀が知られている。しかし、この祭儀で最も有名なのは、その秘儀の方である。その秘儀は、特に、これに参加した信女たちによって営まれ、酩酊と狂乱と乱舞の集団的オルギーが中心であった。彼女たちは、家庭を捨て、夜、森の中を駆け回り、笛や太鼓の音に合わせ、獣の毛皮を着て、狂ったように踊った。そして、葡萄酒をたらふく飲み、酔いのままに、生贄の牛をはじめ動物を八つ裂きにし、その生肉を食い、相手かまわず交わったという。こうして、狂気の神憑り状態になって、ディオニュソス神との交流を待った。

ディオニュソスの密儀にまつわる神話は、およそ次のようなものである。ディオニュソスは、ゼウスとペルセポネから生まれ、ゼウスによってザグレウスと呼ばれ、ゼウスの後継者として期待された。だが、巨人のティタン族はこれを嫉妬し、子供のディオニュソスを誘惑し、八つ裂きにして、むさぼり食ってしまった。しかし、アテナ女神は、ディオニュソスの心臓を救い出して保管しておいた。この心臓から媚薬が調合され、それを飲んだテーバイの王カドモスの娘セメレは、ゼウスを恋した。ところ

が、ヘラの嫉妬にあい、その策略で、雷神としてのゼウスの本来の姿に打たれて死んでしまう。だが、セメレが身籠もっていた子供だけは救出された。ゼウスはその子を大腿に縫い、やがてそこから第二のディオニュソスが生まれる。この第二のディオニュソスは、成人して、冥府に降り、母セメレを救い出し、半獣神や信女や豹などを連れて、リュビアからアラビア、インドへと旅し、最後に故郷に帰ってくる。ディオニュソスは、行く先々で農業や工芸など様々の技術を伝えたが、特に、葡萄の栽培と葡萄酒の技術を人々に広めたことはよく知られている。彼は、後、クレタの王女アリアドネと結婚し、二人とも天に昇り、この世のディオニュソス信徒に祝福を与え続けたという。

生贄を八つ裂きにし、その生肉を食べるというディオニュソスの信女たちの原始的な行為は、差し当たりは、ディオニュソスの死を体験することだと言える。だが、生贄の動物がディオニュソス神そのものの象徴だとすれば、それを食うということは、ディオニュソス神そのものを自らの体内に宿すということになる。とすると、それは、ディオニュソス神と一つになるということを意味する。この密儀に伴う酩酊と狂乱も、神との合一を体験しようとするものであり、宇宙の生命力と一つになろうとすることである。人々は、このディオニュソスの密儀の狂気と神憑りの中で、無限の生命力を得ることができたのである。すべての日常的あり方から解放され、社会的規制が乗り越えられる必要があったのは、そのためである。エレウシスの密儀が、静謐な見神の儀礼によって、神と合一し、永遠の生を得ようとするのに対して、ディオニュソスの密儀は、これを、集団的な狂気と行動によって実現しようとしたのである。

ディオニュソスは、本来、農耕神であり、植物神であり、特に葡萄の神であった。植物が死と再生を繰り返しながら、生命を永続させるように、ディオニュソスも、神話の中では、八つ裂きにされて死んでも、再び復活し、永遠の生を保つ。ディオニュソスが、神でありながら、同時に死と再生を繰り返すのは、その植物神的性格による。ディオニュソスは、死と再生を繰り返して永遠の生を保つ生命力の神話的象徴であり、死を乗り越えて永遠の生を獲得することの神話的象徴なのである。ディオニュソスの密儀に伴う狂気は、永遠の生命力への無限の衝動から出てきたものである。

このディオニュソスの密儀が最初に生まれたトラキアでも、やはり、同じような熱狂と狂乱と乱舞と原始的な行為に満ちた祭りが行なわれていた。また、この密儀がローマ時代に受け継がれて、バッコスの祭りとなっても、その様式と本質は変わらなかったという。

キュベレとアッティスの密儀

キュベレとアッティスの密儀は、ディオニュソスの密儀に劣らず、狂躁と血腥い儀式に満ちている。この祭儀は、春分のころに行なわれ、まず、葦の束を信者たちが寺

院へ運び込む儀式から始まる。次に、アッティス自身を象徴する常緑の松の木を運び込む儀式などが行なわれる。だが、この祭儀のクライマックスは「血の日」として知られ、その日は、信徒たちが笛やシンバルやタンバリンの音に合わせて踊り狂い、血の出るまで体を鞭打ち、忘我の状態に達したという。しかも、騒がしい音楽の中で忘我の状態に達した神官や信徒の中には、去勢されたアッティスにならって、自ら去勢した者もいたと言われる。その夜は、アッティスの死を悼む儀式が行なわれ、翌朝は、アッティスの復活を祝う歓喜の儀礼が行なわれた。その後、川への行進とキュベレ像の沐浴の儀礼などが行なわれたという。

しかし、最も血腥い儀礼は、この密儀集団への入信の儀式である。その儀礼は、タウロボリウムと言われる。生贄として聖化された牡牛が格子状の棚の上で屠られ、流れ落ちる血を、下の穴で待ち受ける密儀参入者が全身に浴びる儀礼である。

これらの儀礼は、どれも、太母神キュベレとその恋人アッティスにまつわる神話に基づいている。キュベレは美しい羊飼いのアッティスに恋したが、アッティスはニンフに心を奪われた。それに立腹したキュベレは、アッティスを狂わせ、狂わされたアッティスは自ら去勢して死んでしまう。だが、死後、アッティスは復活したと伝えられる。その他にも、キュベレとアッティスにまつわる神話伝説は幾種類か存在するが、キュベレとアッティスの密儀はこれらの神話に基づいている。

密儀入信者が牡牛の血を浴びるのは、いわば血による洗礼であり、差し当たり、罪を洗い浄める儀礼と考えられる。しかし、犠牲にされる牡牛は、太母神キュベレへの犠牲であると同時に、それ自身、神化されてもいる。したがって、その血を浴びるということは、神の霊力に浸るということをも意味している。この儀礼は、神の霊力を浴びて、信徒が生まれ変わるという意味をもっていたのである。また、キュベレに仕える神官や信者が、去勢したアッティスにならって、自らも去勢したのは、おそらく、性を超越することによって、むしろ、両性具有の完全性に到達しようとしたからであろう。現に、キュベレ自身、両性具有の怪物から生まれている。これら一連の儀礼は、アッティスの死と再生にならって、入信者自身が死―復活を遂げ、太母神キュベレのもとで永遠の生を得ようとするものだと理解される。

キュベレとアッティスの祭儀は、キリスト教が拡大していた帝政ローマ時代に盛んに行なわれ、キリスト教にも少なからぬ影響を及ぼした。血の洗礼の儀礼も、キリスト教によって昇華された形で受け入れられた。キリスト教は、これを、救世主の血を象徴する葡萄酒を飲むことによって代えたのである。とすれば、キリスト教でも、それは、自らの体内に神を宿して、神と合一し、かくて永遠の生を得るという意味をもっていたのではないか。

ミトラスの密儀

同じように、キリスト教と共通した儀礼や教義をもった密儀宗教に、ミトラス教が

ある。ミトラス教は、その発祥の地をペルシアにもっているが、普及したのはローマにおいてであった。ミトラスは勝利をもたらす神でもあったので、この祭儀は、ローマの兵士たちの間に普及し、兵士の移動とともに、ローマの版図全体に広まった。

ミトラスは岩から生まれた太陽神で、太陽神ソルから、牡牛を犠牲にするよう命じられたと言われる。また、ミトラスは、天上から地上に降り立ち、人類の苦しみを救う偉業を達成した後、弟子たちとの最後の晩餐を終えて天に帰った。しかし、この世の終末とともに再臨して、最後の審判を下し、選ばれた者たちを導いて、不滅の世界に入るという。

キリスト教によく似たこの教義は、当時のキリスト教護教家を悩ませた。だが、おそらくは、ミトラス教にもキリスト教にも共通するオリエント起源の信仰が、ヘレニズム・ローマ時代の地中海世界にはあったのであろう。太陽神ミトラスが人間世界へ降り立って来たのも、十二月二十五日であったという。この点でもキリスト教と共通する。十二月二十五日に、太陽神アドニスが月の神アスタルテから誕生するという地中海一帯の信仰は、これらミトラス教やキリスト教に共通する源泉であろう。

ミトラスの祭儀は、洞窟の中で行なわれ、七つの位階が設けられていた。それは、それぞれ、大烏・花嫁・兵士・獅子・ペルシア人・太陽の使者・父と名づけられ、志願者は、参入儀礼を通してそれぞれの位階を昇って行ったと言われる。だが、詳しい儀礼内容は分かっていない。ただ、そこには、冠授与の儀礼や刻印、あるいは火による浄め、蜂蜜の塗布などの儀礼が含まれていたと言われる。また、キュベレとアッティスの密儀同様、牡牛の犠牲による血の洗礼の儀礼があったとも言われる。

ミトラスの密儀が洞窟の中で行なわれるのは、ミトラスが岩から生まれたという神話とつながるものであるが、洞窟が宇宙の象徴であり、また、母親の子宮の象徴だからでもあろう。入信者は、この洞窟の中で、様々の加入儀礼を受けて、生まれ変わり、宇宙と一つになる。蜂蜜の儀礼も、生まれ変わった信者を新生児と見立てているからである。牡牛の犠牲は、神が原初の牡牛を殺害してこの宇宙を創造したというペルシアの創成神話に基づいている。牡牛の犠牲とその血による洗礼の儀礼は、宇宙の創成を追体験しようとするものだということになる。ミトラスの密儀の儀礼全体は、太陽神ミトラスの誕生、人類の救済のための受肉、昇天、最後の審判というミトラスの業績にならおうとするものだったのであろう。

キュベレ密儀にもあったという説もあるが、このミトラスの密儀では、パンと葡萄酒による聖餐式が行なわれたという。それは、牡牛を犠牲として捧げた後のミトラスと太陽神ソルの饗宴を記念するものだと言われる。だが、パンと葡萄酒が神の肉体と血を表わすとすれば、これも、神自身を自らの体内に入れ、神と一つになる儀式だったとも言える。キリスト教の護教家たちは、キリスト教とあまりにもよく似たこの聖餐式儀礼に少なからず困惑し、ミトラスの聖餐式を悪魔的模倣と断罪したと言われる。しかし、これも、その神話と同じように、遠くヘレニズム時代の両者に共通する源泉

を想定しなければならない。一般に、キリスト教の典礼には、古代の密儀宗教から影響を受けたものが多い。キリスト教は、むしろ、それらを昇華し完成させたのだとみるべきである。キリスト教は、古代の密儀宗教の凄惨な儀礼を、洗礼や聖餐式など、秘蹟と呼ばれる儀式に昇華していったのである。

草や木が枯れてもまた芽を出すように、または、季節が秋から冬、冬から春へと移り変わるように、古代の人々は、宇宙は絶えず死と再生を繰り返し、その永遠性を保つものと考えた。それとともに、人間も、死と再生を通して、宇宙生命の永遠にあずかるものと考えた。古代の数多くの密儀は、どれも、死と再生の儀礼を通して、宇宙生命への帰一を体験しようとするものであった。密儀への参入者は、儀礼を通して一旦死し、宇宙という母胎に帰り、再生してくる。そして、宇宙の偉大な霊力を自分自身の中に宿そうとしたのである。

3　儀礼の意味

宇宙との合一

王権儀礼にまで発展した新年祭にしても、播種や収穫に伴う農耕儀礼にしても、春分や秋分、夏至や冬至など、宇宙の循環の中で営まれる。この農耕儀礼から発達し、高度な儀礼体系を完成させた古代の密儀宗教も、宇宙の循環の中で、宇宙生命と一つになることによって、永遠なる生を獲得しようとするものであった。生と死をはじめとして、人間のすべての営みは、宇宙の循環の中で営まれる。人間が人間として大地に立った時以来、儀礼は、人間が宇宙の循環とともにあることを表現してきた。人間の生そのものが宇宙秩序の中にあり、宇宙秩序が人間の生そのものの中に宿っているということを表現してきた。宇宙生命への畏怖の念から出発した宗教感情は、何よりも、それを儀礼という形で表現したのである。儀礼は、人間存在が宇宙秩序の中にある存在だという原初的宇宙感情の象徴的表現なのである。

古代宗教がもっている宇宙との合一感情は、また、神との合一という形でも表わされた。特に、各種の儀礼で行なわれる食物摂取の儀式は、神との合一を象徴的に表現する儀式である。古代の密儀宗教でも、ディオニュソスの密儀の生肉を食う儀礼にせよ、わが国の新嘗祭の神饌を食す儀礼にせよ、ミトラスの密儀やキリスト教のパンと葡萄酒の聖餐式にせよ、どれも、そこに出てくる聖なる食物は、神または神の子の象徴である。したがって、それを食べるということは、神または神の子を体内に入れ、かくて、神と一つになることを意味している。密儀ばかりでなく、公開の農耕儀礼や国家的儀礼でも、そこで催される共同の会食は、神との合一という意味をもっていた。アステカの血腥い人身御供の儀式でさえ、犠牲にされる者は神自身として扱われた。その肉を食うという野蛮な行為も、本来は、それによって象徴される神の霊力を自ら

の体内に宿し、自らも神的存在となろうとする行為であった。

また、キュベレ密儀での牡牛の血の洗礼にしても、エレウシスの密儀での小麦の穂を見る儀式にしても、どれも、血や穀物に象徴される神と一体になるという意味を含んでいた。密儀宗教は、儀礼を通して、神との一体化、永遠の生の成就、宇宙生命との合一を目指した。密儀宗教が作り出した諸儀礼は、どれも、神や宇宙との合一感情の表現だったのである。密儀宗教ばかりでなく、農耕牧畜儀礼にしても、その他の儀礼にしても、多くの祭儀は、人々が神々と共にあり、同時に神々と一つになり、宇宙の根源的生命と合一することを意味していた。

日常性からの離脱

祭儀や祝祭において、神々と合一する時、人々は日常性から離脱する。祭儀や祝祭は、人々を、日々の単調な労働から解放し、一挙に聖なる世界へと引き込む。人々は、いわば、日常的なあり方において死に、より高次の聖なるあり方において再生するのである。

祭儀や祝祭の空間と時間が限定されるのは、そのような聖なる世界を創り出すためである。祭儀や祝祭は、日常の生活の場とは違った神殿とか、洞窟とか、斎場など、特別に設けられた限定された空間を必要とし、そこを聖なる空間とする。空間が境界づけられ、聖化される。祭儀や祝祭においては、また、時間も限定され、ある特定の時間が区切られ、聖なる時間とされる。そこでは、日常の時間は停止する。そして、この限られた時間の中で、儀礼は原初の時を再現し、人々は原初の時へ復帰する。限定された聖なる空間と聖なる時間によって、祭儀や祝祭の非日常的な世界は現出する。このような世界の中で、宇宙創成神話が朗誦され、聖婚の儀礼が行なわれ、犠牲式や聖餐式が行なわれる。神々と合一し、宇宙の根源的生命に帰一するための世界は、このようにして創り出されるのである。

このような祭儀と祝祭の世界では、相反する二種類の行動様式が、その非日常的な世界の内容を構成する。厳粛と過剰、禁止と放埒（ほうらつ）である。

祭儀や祝祭では、大概、その始まりの段階で厳しい禁忌が課せられる。一定期間、穢れを避け、身を浄め、異性を避け、食を断ち、沈黙を守り、行動を慎まねばならなかった。祭儀や祝祭において、日常生活で行なわれる種々の行動が厳しく禁止されるのは、そのことによって日常的世界を停止し、非日常的な場を創り出そうとするためである。そうでなければ、神々は来臨してこないと考えられたからである。この厳粛な禁止も、宇宙の偉大な生命力への畏怖の表現なのである。

祭儀や祝祭では、一般に、この厳しい禁忌の後、荘厳な雰囲気のうちに厳粛な儀礼が催され、その儀礼の終了とともに、すべての禁忌が解かれて、過剰な放縦が爆発する。にぎやかな酒宴、騒々しい音楽に合わせた踊り、男と女・王様と乞食などの役割

転倒、過剰な消費など、喧噪のうちに底抜け騒ぎが行なわれる。人々は、集団的オルギーの過度な放埒の中で、興奮と熱狂に包まれ、原始感情を爆発させる。そして、己自身の内に生命力をみなぎらせ、神性を宿す。

聖なる世界は、過剰という形でも現出する。過剰は、日常世界が停止して、神々の世界が現出しているということ、そして、その中で、人々が神々と共にあり、神々と一つであるということを表わしている。厳粛な儀礼の後に行なわれる神聖な狂躁は、宇宙の生命力との合一感情の表現なのである。ディオニュソスやキュベレの密儀での酩酊、狂乱、喧噪、乱舞、乱交、生肉食い、狂気、忘我など、度を過ぎた放埒は、それ自身、己の内に宿る宇宙生命の発散であり、神々との合一の表現だったのである。

祭儀や祝祭は、宇宙論的な意味をもった神聖な遊びである。それは、神々との合一、宇宙生命との合一という日常を超越した世界へ遊ぶことである。そこでは、厳粛と過剰、禁止と放埒が同居しており、真面目と遊びが一つになっている。

世界観の表現

祭儀や祝祭における儀礼は、何ものかの表現である。とりもなおさず、一つの宇宙感情の表現である。人間は、宇宙の秩序と循環を、儀礼という形で演じ、表現する。儀礼は、世界の表現であり、世界観の表現であり、一種の芸術である。

王権儀礼にも現われているように、祭儀が社会統合の働きをも果たすのは、儀礼が世界の表現であり、その社会の世界観の表現だからである。古代バビロニアの新年祭や古代インドの馬の供犠にも現われているように、儀礼は、世界の表現であると同時に、社会統合の表現でもある。古代では、人間の営む社会の秩序も、宇宙の大きな力に支えられているものと考えられていたからである。宗教の社会的機能も、その宇宙論的本質の方から考えねばならない。

もっとも、儀礼ばかりでなく、神話も、その社会の世界観を表わす。そのため、多くの場合、神話は儀礼と深くつながり、人間とその営む社会の安定原理となる。世界観は、神話として表現され、神話は儀礼として表現される。神話は、原初の時代と神々の時代を物語り、その社会の原型を形づくる。しかも、それは、祭儀や密儀の儀礼を通して再現される。神話的原型は、絶えず、儀礼として再現されるのである。そればかりか、しばしば、神話自身が儀礼の中で朗誦され、それが儀礼の重要な一部をなしている。人々は、儀礼を通して、神話的な原初の時間に立ち返り、生を更新し、その社会を秩序づける。

例えば、その社会の宇宙観は、世界創成神話となって表現されるとともに、新年祭という儀礼としても表現される。さらに、創成神話は実際にその儀礼の中でも詠唱されて、その社会独自の世界観が確認される。そのことによって、宇宙生命への帰一という宗教感情が表現されるとともに、社会秩序の更新がはかられるのである。また、宇宙の生命力は天と地の結合によって更新されるという生命論的世界観は、天地二神

の聖婚譚となって神話的に表現され、同時に、新年祭での王と女性神官の聖婚儀礼としても表現され、社会統合の役割を果たしたのである。また、大地における生命の循環という世界観は、デメテルとペルセポネ、キュベレとアッティス、ディオニュソスなどの神話となって表現されるとともに、それは、諸種の密儀での見神の儀礼や、洗礼の儀礼や、狂躁や狂乱の儀礼となって表現され、一定の社会的役割をも果たしたのである。

一つの世界観は、神話として表現されるとともに、儀礼という身体行為としても表現されて、はじめて現実のものとなる。儀礼は神話によって基礎づけられ、その社会の世界観や宇宙観を表現する。人々は、儀礼という共同の芸術作品の中に入ることによって安定するが、それは、儀礼が神話に基礎づけられ、大きな世界観、宇宙観に基礎づけられているからである。

もっとも、神話と儀礼はいつも結びついているとはかぎらず、何ら連関をもっていない場合もある。また、神話から儀礼が生まれる場合もあれば、逆に、儀礼から神話が生まれる場合もある。ただ、神話と儀礼は、相互に作用し合って、社会を維持する原理となる。古代社会では、世界観、神話、儀礼、社会が有機的に連関し、全体が、一つの芸術作品のように、見事な表現体系を成している。この中で、神話と儀礼の果たす役割は大きい。

儀礼と象徴

古代社会では、一般に、物事の本質を象徴によってとらえ、象徴と象徴の連関によって、ある一つの世界観が表現される。神話同様、儀礼も、象徴による世界観の表現である。儀礼は、それを、身体行為を通して行なう。儀礼は身体を通した表現であり、身体そのものを象徴とする表現である。古代人の象徴志向を、近代の概念的志向からみて、不合理とすることはできない。

儀礼という演劇性を備えた身体行為の中に、その社会の宇宙観や世界観は表現される。儀礼は、そのような普遍的意味を集約する象徴である。儀礼は、その意味で、一つの世界解釈である。宇宙、自然、社会、人間の諸関係の解釈である。だから、その社会の儀礼を見れば、その社会の世界観が読み取れる。

例えば、古代バビロニアの新年祭での儀礼は、宇宙創造の原初への回帰と宇宙秩序の年々の更新という世界観の象徴的表現であった。また、そこで行なわれたといわれる聖婚の儀礼は、天地の結合によってのみ宇宙の生命は増強されるという思想の象徴的表現であった。さらに、そこで行なわれる王権儀礼は、社会の統合が深く宇宙の運行と結びついているという思想の象徴的表現であった。また、密儀宗教での、洞窟くぐり、聖物提示、血の洗礼、生肉食い、動物供犠、人身御供、聖餐式など、多くの儀礼は、神との一体化、宇宙生命への帰一、死と再生という思想の象徴的表現であった。これらは、いずれも、象徴による世界解釈なのである。

かくて、儀礼を通して、宇宙と人間の秩序が象徴的に物語られ、儀礼自身が、大きな宇宙秩序の象徴的表現となる。儀礼そのものは、様々の自然物・道具・神像・荘厳な衣装・神殿、沐浴斎戒・礼拝・供犠・舞踊・パレード、神話・呪文・聖歌・音楽など、視覚象徴や行為象徴や音声・言語象徴、および、それらの連関によって構成されている。これらは、儀礼という一つの宗教的象徴を構成する象徴である。これらの象徴を通して、聖なるもの、偉大な力、神的なものが顕現する。人間を超える大いなるものが表わされる。それゆえ、人々は、また、この宗教的象徴を通して、大いなるものへの畏敬の感情を引き起こしもする。宇宙の偉大な生命力、人智を超えた偉大な力を理解する。大いなる宇宙と自分自身がつながっていることを確信するのである。宇宙生命への畏怖という宗教感情は、宗教的象徴として表現される。その象徴の体系が儀礼なのである。

象徴は、抽象的なものを具体的なもので、目に見えないものを目に見えるもので表現する手段である。例えば、大地の豊穣の女神を小麦の穂で表わしたり、宇宙を洞窟で表現したり、神を牡牛やその生肉、馬や人で象徴したりする。また、神の子の肉体と血をパンと葡萄酒によって表わしたり、太陽や穀物の生命力を熟餐で表わしたり、再生力や混沌を水で表現したりする。しかも、象徴のもつ意味は、その社会の人々の間で理解され、人と人とをつなげる媒体となる。種々の事物や振る舞いや言葉などによって構成される宗教儀礼は、人間を超える大いなるものを表現する象徴であり、それによって人々を共通理解のもとに結びつける象徴である。儀礼は、目に見えないものを、象徴を通じて、目に見えるものにし、それによって集団統合の象徴ともなる。

古代社会の思考様式は、普遍を特殊によって表わす象徴思考である。古代人の象徴思考は、部分の中に全体を、小さなものの中に大きなものを集約して表現しようとする。古代人は、象徴と象徴の連鎖によって構成される象徴体系をもち、それによって世界観を表現するのである。古代社会の宗教体系は儀礼や神話によって構成され、儀礼や神話は聖なる象徴群よって構成されている。そして、それは、象徴によって、人生と世界の根源的真実を表現する。宗教は、象徴を通して世界と人間に究極的意味を与える象徴の体系である。

古代社会の儀礼は、宇宙論的な意味体系の中で、人間存在の根源的意味を、その象徴群によって表現している。それゆえ、儀礼に参加することによって、人は自分自身を理解することができる。人間は単に個人として存在するのではなく、大宇宙の中の小宇宙として、全体の中の部分としてあることを理解する。そして、自己一個の生と死を越えて、自己の生命は、永遠に存在する宇宙の生命と一つであることを理解するのである。この時、人は、その存在の意味を獲得し、安定的基盤を得て、一個の人格として統合される。儀礼が人々を結びつけ、社会の統合原理となるのも、そのことによる。

人生と世界に対する素朴な驚異の感情から出発し、人間を超える大いなるものとの

合一に至り着いた古代の宗教感情は、存在と存在を超えるものとの連関を象徴によってとらえ、これを象徴によって表現し、かくて精緻で柔軟な象徴世界を創造した。人間は、世界を象徴によって表現する象徴的動物なのである。宗教も、また、そのような象徴する人間の営みであり、表現なのである。

大宇宙と小宇宙

古代の儀礼がすでに示しているように、人間は大宇宙を映す小宇宙である。人間自身が宇宙の象徴なのである。宗教は、人間それ自身を、大宇宙の象徴に変える。太陽の運行、月の満ち欠け、四季の変化、昼と夜の交代、潮の満干、どれをとっても、宇宙は周期を描いて絶えず動いている。人間も、また、この宇宙の運行を映している。人間と宇宙は一体である。人間は宇宙の中にあり、宇宙は人間の中にある。われわれは大なる宇宙の中に生きているとともに、われわれの中に大なる宇宙が生きている。人間は大宇宙という全体の部分であると同時に、この部分の中に全体は宿る。人間は、宇宙という巨大な生命体の中に統合されていると同時に、宇宙の生命力は人間の中にあまねく宿っている。

古代インドのウパニシャドの哲学は、アートマン（我）とブラフマン（宇宙の原理）の一致を語る壮大な思想体系であった。だが、それは、すでに古代の宗教儀礼において表現されていたことでもあった。聖なる時間と聖なる空間の交差するところにおいて成り立つ宗教儀礼は、その中で、時間と空間の交差する宇宙そのものを表現する。人々は、この儀礼の聖なる時空を通して、宇宙と交感する。人間をはじめ生きとし生けるものは、宇宙の大なる生命にあずかり、それを分かち合って生きている。古代の儀礼は、そのことを、繰り返され定型化された身体行為によって表現していたのである。

近代の人間は、宇宙を、人間によって観察され、記述され、場合によっては征服されるべきものとさえ考えた。さらに、自らの歴史や社会も、自分自身の手によって動かしうるものとさえ考えた。それに対して、古代の人々は、人間と宇宙は一体であり、自らの歴史や社会も宇宙の運行とともにあり、宇宙の運命によって定められているものと考えた。

無限の活動力としての宇宙生命の場では、人間、動物、植物、物質、すべてのものがその根源へ帰一する。根源的な宇宙生命への合一の感情こそ、宗教の原初的感情である。とともに、それは、宗教がどんなに複雑になっても、最後に残る感情である。大いなる宇宙に帰属しているという感情こそ、宇宙生命への畏怖から出発した古代の宗教儀礼が語る真実である。宗教とは、大いなるものへの畏怖の感情であり、宇宙の大なる生命への帰一の感情に他ならない。

Ⅵ 罪と悪の自覚

1 混沌と秩序

現世の悪

いつの世も、人間世界に、悪は絶えることはなかった。暴風雨や落雷、洪水や地震など、自然の災いはもちろんのこと、人間が社会を営んでいく上で避けることのできない悪も尽きることはなかった。不正、暴力、略奪、窃盗、殺人、虚偽、陰謀、侮辱など、人間が人間として生きていくかぎり排除することのできない悪は、昔も今も止むことはなかった。

紀元前二三〇〇年ころの古代エジプトの文書、『イプエルの訓戒』でも、当時の社会の混乱を反映して、国中に、謀叛、略奪、狂暴、不平、不正、殺戮、無法、瀆神、不信、無秩序が蔓延していることを嘆いている。

そればかりでなく、いつの時代も、この世は不条理に満ちていた。地上での善き行ないは、必ずしも報われることはなく、悪しき行ないも、必ずしも罰せられるとはかぎらなかった。むしろ、義しき者は滅び、義しからざる者が栄えた。

古代メソポタミアの『人間の不幸に関する対話』でも、信仰厚く、慎み深く、敬神の思い深かった作者には、貧困がもたらされ、不信心で極悪の人には、富がもたらされたと、神への不信を語っている。殺人にたけた名士は褒められ、慎み深い者は卑しめられ、悪事を働く者は義とされ、義しき者は追いやられ、盗賊は黄金を得、弱き者は飢え、邪悪な者の力はますます強められ、弱き者は滅ぼされていく。この世が不条理と不公正に満ちていることを、この対話の語り手は慨嘆する。

古代エジプトの『生活に疲れた者の魂との対話』でも、人々の邪悪、貪欲、暴虐、略奪、不信、悲惨について語りながら、悪が満足し、善が退けられ、善行に報いなく、義しき者が滅び、この世が不正な者に委ねられていることを嘆いている。そして、「地を歩む悪は止まることがない」と、ほとんど絶望的な口調でこの世の不条理を語り、むしろ、死を望んでさえいる。

「我この空の世にありて各様の事を見たり。義人の義をおこなひて亡ぶるあり。悪人の悪をおこなひて長寿あり」という『旧約聖書』の「伝道之書」（七・一五）の思想は、すでに、それよりもずっと以前の、今から四千年前の古代エジプトや古代メ

ソポタミアに、その遠い源泉をもっていたのである。

のみならず、貧困や労苦、悲嘆や苦痛、憎しみや怒り、失意や不幸、そして、病と老い、さらに死の不安など、人生の苦も、いつの時代も絶えることはなかった。人間の生は苦そのものであった。しかも、その苦の生の後に待っているものは、等しく死であった。死を前にして、人生ははかなく無意味であった。この世は、迷いに満ちた無常な世界であった。

古代バビロニアの知恵文学、『われ知恵の主を称えん』(Ⅱ)でも、人生は邪悪で惨めで、しかも、いつ死ぬやも知れぬはかないものとみられている。『主人と召使の対話』(5)でも、召使は、主人に向かってこう言う。「古い廃墟の上に登って歩いてごらんなさいませ。あとさきの(人たち)の頭蓋骨がお目にとまりましょう。(いったい)だれが悪人ですか、だれが援助者ですか」と。すでに、このころから、人間の生はすべて空しいという考えが流布していたのである。

いつの世も、この世は、災い、不正、不条理、苦、空しさに満ちていた。現世は悪であった。しかも、この悪は、古代の宗教世界でも、ずっと早い時期、人間がおよそ文明というものを生み出した時に、すでに深く自覚されていたことであった。大いなるものへの畏怖から出発した宗教は、この悪の自覚によって、より深められる。

罪と穢れ

もちろん、古代宗教よりももっと古い原始宗教の段階でも、古代世界ほど複雑で屈折したものではなかったにせよ、悪というものが認められていなかったわけではない。暴風雨や落雷、洪水や地震などの自然の災い、不作、病気、死、苦痛、不運など、様々な悪が人々を襲った。

だが、ここでは、これらの悪は、大自然がなす災い、禍事(まがごと)として受け取られた。しかも、それは、人間社会で侵してはならない禁忌が破られたための結果だと考えられた。そして、この侵犯が罪とみられたのである。災害、病気、死、不作、難産、さらに社会的な無秩序など、あらゆる災いは、社会の隅で隠れて行なわれた姦淫、窃盗、近親相姦、堕胎など、禁忌が侵され、罪が作られたからだとされた。したがって、ここでは、その罪を洗い出し、祓い浄めれば、災いとしての悪はなくなり、秩序は回復するものと観念された。ここでの罪は穢れという意味をもち、その穢れを取り除きさえすれば、あらゆる悪は除去されると考えられ、祓除の儀礼が行なわれたのである。

原始宗教では、災いとしての悪は、種々の禁忌が侵されることによる宇宙の秩序の破壊に他ならないとされたのである。そのため、その罪を祓い浄める儀礼を行ない、宇宙の秩序を回復する必要があった。祓除の儀礼を行ないさえすれば、宇宙は一旦始源に帰って、再び秩序を回復し、それに従って、社会の秩序も再生するものと考えられた。そこには、社会の秩序も宇宙の秩序に支えられているという宇宙論的信仰があ

った。罪・穢れを祓い浄めれば、個人も、社会も、宇宙も再生しうるものとされていたのである。この災いとしての悪と穢れとしての罪の観念は、その後の古代宗教にも受け継がれ、さらに高度宗教の儀礼にも取り入れられて、罪と悪の観念の最下層を形成した。

古代メソポタミアの諸儀礼は、そのような原始宗教の儀礼の大規模化したものである。例えば、古代バビロニアの新年祭も、人間の罪・穢れを浄め、乱された宇宙秩序を回復するために、毎年周期的に執り行なわれた儀礼でもあった。毎年積み重ねられる人間の罪・穢れは、宇宙の秩序を乱し、世界を無秩序化する恐れがあったが、これを毎年浄めることによって、宇宙の秩序は取り戻され、世界は一旦始源に帰って再生する。だから、また、この新年祭は、世界創成神話の再現でもあった。この新年祭の最初の三日間は、いわば、世界がもとの混沌に戻って闇に閉ざされる期間に当たり、四日目の『エヌマ・エリシュ』の朗唱による世界創成の再現によって、人間の罪・穢れは浄められ、宇宙の秩序は回復し、世界は死から生へ再生する。

『エヌマ・エリシュ』(I—IV)によれば、ティアマトとアプスーの混交によって生み出された多くの神々は、アプスーを眠っている間に殺してしまう。これらの神々の一人エア神と妻ダムキナから生まれた最も強く賢いマルドゥク神は、夫を殺されて激怒したティアマトと戦い、矢を放ってティアマトの体を裂き、そこから天地万物を創造し、神々の世界の王となったという。

バビロニアの新年祭は、このマルドゥク神による世界秩序の創造を再現するものであった。それは、混沌からの秩序の再生を象徴する儀礼だったのである。四日目の『エヌマ・エリシュ』の朗唱とともに、マルドゥクは復活し、神々の世界の王として即位する。それとともに地上の王も再任され、国民は、これを、大行列をつくって祝ったのである。それは、混沌からの秩序の回復、悪に対する善の回復を象徴していた。それとともに、人間の罪・穢れも洗い浄められて、新しい年が始まったのである。

バビロニアの人々にとって、この世の悪の起源は、ティアマトに代表される混沌の中にあった。マルドゥク神が創造行為を通して戦う混沌こそ、悪の起源であった。人間がこの世で犯す様々な罪は、この混沌にとらえられるということによってであった。だからこそ、この人間の罪・穢れを浄め、混沌から秩序を回復することによって、悪は除去されると考えたのである。ここでは、悪は決して除去されえない本源的なものとは考えられず、罪もまた決して拭い去ることのできない負い目とは考えられなかった。それらは、あたかも四季の循環のように、過ぎ去って行くものと考えられたのである。

しかも、ここでは、悪の起源は、秩序の原理とともに、最初から神々の世界に存在し、神々の誕生とともにあったことになる。とすれば、人間は、人間社会が絶えずとらえられる混沌や悪の原理に対して、秩序や善の原理を、同じ神々の世界から、繰り返し取り出してくればよいということになる。人間も、人間社会も、混沌と秩序が同

居するものであり、善悪相半ばするものとみられている。しかも、それは、世界創造以前の神々の世界が、最初から混沌と秩序の合体したものであり、善悪相混交したものだということによる。ここには、善と悪の厳格な対立はなく、善悪いずれも同じ一つの起源をもつとみられている。

現に、バビロニアでは、人間は神々のうちの一人から創造されたことになっているが、同時に、それは反逆した神とみなされている。つまり、マルドゥクに敵対したティアマト軍の司令官キングが罪ある者として殺され、その血から、人間が、神々に仕える者として創造されたという。人間は、神々の血を引いてはいるが、同時に、罪を犯した神々の血から創られたことになる。人間と人間社会が善悪半ばし、混沌と秩序が混交しているのは、そのためだとみられる。

ティタンと人間の堕落

古代ギリシアでも、悪の起源は様々に考えられているが、人間の悪の源泉をティタン的なものに求める考えは、古代メソポタミアの観念に近いと言えよう。ヘシオドスによれば、原初の深淵カオスから生まれた大地ガイアは、独力で天ウラノスと山々と海ポントスを生んでから、ウラノスと結婚して、男女六人ずつ、合わせて十二人のティタン神族を生んだ。その神々の長兄は大河オケアノスで、その末弟は時の神クロノスであった。クロノスは、ウラノスの男根を大鎌で切り取り、ウラノスとガイアを分離するとともに、ウラノスに代わって神々の世界の王となった。

ここでも、クロノスに代表されるティタン神族は、古代メソポタミアのティアマトの生んだ軍団同様、古い神に取って代わろうとする神々として登場してきている。ギリシア人たちは、ここに、人間界の悪の遠い起源を求めた。古代ギリシアでも、神々の誕生譚の中に、すでに（神々に反抗する神々）の生成が物語られている。そして、この反抗する神々の遺産が人間に受け継がれる。ここでも、悪の原理は、すでに善なる神々の世界にあったことになる。

善悪が同時に宿っている人間は、ヘシオドスによれば、善から悪へ、五つの時代を経て堕落してきたという。

『仕事と日々』（一〇六―二〇一）によれば、第一の時代には、黄金の種族の人間が創られ、これは、神々のように憂いを知らず、骨折りも哀しみもなく、老いることもなく、災難もなく、豊かな稔りに恵まれて、眠るように死ぬことができたという。第二の時代には、銀の種族の人間が創られ、これは、成長すると、愚かさゆえに苦難に遭い、神々にも仕えようとせず、命も極めて短かった。第三の時代には、青銅の種族の人間が創られ、これは、戦争や乱暴を事とし、お互い同士の手にかかって滅び、冥府の陰湿な館へ下った。第四の時代には、人間の下降は一時的に中断し、英雄たちの種族が創られた。しかし、彼らも、悪しき戦争と恐ろしい殺戮によって滅ぼされた。第五の時代には、現代の種族で、史上最悪の鉄の種族が創られた。この時代は生きていない

方がましで、昼は労働と悲惨の止むことがなく、夜は滅亡に脅かされ、心労に悩まされる。父と子、客と主人、友と友、兄弟同士も親しむことなく、年老いた親も敬意を払われない。善人に対しても好意が示されず、むしろ悪人が称賛される。正義は力の中にあり、優れた人は悪人から傷つけられる。嫉妬がはびこり、羞恥と義憤は人間のもとを去り、かくて、死すべき人間どもには痛ましい苦難が残されるであろうという。

ヘシオドスは、遠い昔には人間は神々に近かったが、今は堕落して悲惨や労苦に満ちた世界に住まねばならなくなったと言う。そのことによって、この世の悪の由来を説明したのである。ここには、すでに、人間はもとは幸福な楽園に住んでいたが、罪を犯すことによってそれを失ったという楽園喪失の観念が語られている。

2　罪と罰

プロメテウスの悲劇

他方、ヘシオドスが『神統記』（五〇七―六一六）や『仕事と日々』（四二―一〇五）で語っているプロメテウスの神話は、現に見られる人間世界の悪の起源は、人間を擁護した神が至高神に対して犯した罪にあるという考えを述べている。

ゼウスが神々と人間たちを集めて、互いのモイラ（分・運命）を区別しようとした時、その役目を自分から進んで買って出たのが、ティタン神族に属するプロメテウスであった。ゼウスは、神々に至福を、人間に災いをモイラとして定めようと思っていたが、プロメテウスは、逆に、人間に良いものを、神々に悪いものをモイラとして与えようと考えて、ゼウスを悪巧みにかけ、騙そうとした。プロメテウスは、一頭の巨大な牡牛を殺して、肉と内蔵を皮で包んで隠したものと、白い骨を脂肪で覆い隠したものと、二つの部分に分け、ゼウスにどちらかを選ぶように求めたのである。

ゼウスは、そのプロメテウスの悪巧みを知りながら、あえて、プロメテウスの思惑通りに、脂肪で包まれた骨の方を選んだ。プロメテウスとしては、この悪巧みによって、神々に食べることのできない骨を選ばせて、あらゆる悪いモイラを選択させ、結果として、人間の方には、食べられる肉が残り、あらゆる良いモイラが与えられることを狙っていた。ゼウスがその思惑通りの選択をしたために、プロメテウスの計画は成功したかに見えたが、実際には、その逆になってしまう。というわけは、骨は牛の中でも不朽の部分であるため、神々には、それにふさわしい不死と不滅が与えられ、肉と内蔵はすぐに腐敗し朽ち果てるために、人間には、それにふさわしい死と滅亡の運命が与えられてしまったのである。

そればかりでなく、プロメテウスの悪巧みに対する報復として、ゼウスは、人間たちから生命の糧を隠してしまった。そのため、人類は、つらい労働によって大地から穀物を得なければならなくなったのである。さらに、ゼウスは、人間から火を隠して

しまった。そこで、プロメテウスは、ゼウスの鍛冶場から火を盗み出して、天から茴香（ういきょう）の茎の中に隠して運び、人間に与えた。それで、人間は火を利用することができるようになった。

ところが、ゼウスは、このプロメテウスによる火の窃盗に対する報復として、人間にあらゆる災いの原因となる女性を与えることにし、鍛冶師ヘパイストスをはじめ、諸神に命令して、最初の人間の女性パンドラを創らせる。パンドラは、不死の女神そっくりの美しく愛らしい肉体をもち、その上、美と愛の女神アフロディテにも紛うべき魅力を備え、さらに、技芸と戦いの女神アテナからは、美しい衣装で身を飾るための機織りの技術を教えられていた。だが、伝令使ヘルメスによって、その内部には、犬のように恥知らずな心と盗人の性質とを入れられていた。ゼウスは、このパンドラを、プロメテウスの双子の兄弟エピメテウスのところへ、花嫁として与えた。

エピメテウスは、プロメテウスから、ゼウスの贈り物を受け取ってはならぬと言われていたにもかかわらず、愚か者の彼は、パンドラの魅力に目が眩み、彼女を妻に迎えた。実際、パンドラは、エピメテウスの家で、あらゆる種類の災いが封じ込まれている大瓶（おおがめ）を見つけ、その蓋を開けてしまったために、ありとあらゆる災いが世界中に撒き散らされてしまった。そのため、人間の世界には、死と苦の原因となる病気やあらゆる災いが充満し、人間は、昼も夜も、それに苦しめられ暮らさねばならなくなった。ただ、パンドラがあわてて蓋を閉めたために、〈希望〉だけが瓶の中に残った。

他方、プロメテウス自身は、悪巧みに対する罰として、ゼウスにより、コーカサスの岩山の柱に、頑丈な鎖で固く縛りつけられた上に、大鷲によって毎日昼の間中生きながら肝臓を食われる責苦に会わされることになった。しかも、夜になると、プロメテウスの不死の肝臓は、朝までにすっかり元通りに再生してしまうので、プロメテウスの苦痛には終わりがなかったという。

人間の二重性とその運命

プロメテウスは、その後、ヘラクレスによって救い出されるのだが、このよく知られたプロメテウスの神話は、人間の二重性とその避け難い運命についてよく語っている。

例えば、ゼウスとプロメテウスの知恵比べでも、人間に与えられたものは、肉や内臓などを食べて生きていくことはできるが、同時に、肉や内臓同様朽ち果て死んでいかねばならない定めであった。また、同じように、人間は大地から豊かな恵みを得ることはできるが、しかし、それは、つらい労働によってでしか得られない定めであった。

さらに、最初の人間の女性パンドラは、姿形は大層美しいが、同時に、心は暗く汚

いものをもっていた。それは、ちょうど、殺された牛の二つの部分がどちらも外見と内実が異なっていたのに、対応している。ゼウスは、外見は美味な肉のように見えるが、内実は食べられない骨を与えられたことになったことに対抗して、外見は魅力的だが、中身は性悪な女性を、人間世界に送り込んだのである。また、人間の取り分となった肉は、外見は不味そうに見えるが、中身は美味しい肉と内蔵であったために、その罰として与えられた女性の方は、逆に、外見は美しく、中身は恥知らずで盗人の性格ということになっているのである。

また、人間はプロメテウスから火を与えられたが、同時に、そこには、そのことによって災いも受ける定めにあることも暗示されている。人間は、火の発見を出発点にして、自然を制御する技術を発達させてきたが、それは、また、それゆえの悩みも生じさせた。人間が進歩させてきた技術は、一歩間違えば、人間を滅ぼす災いともなりかねない。さらに、人間が技術を発達させたことは、生きていく上の障害をなくしたが、同時に、それは、空しい希望を懐かせ、前途の死すべき運命を忘却させてしまう。

また、パンドラが瓶を開けたために、あらゆる災いが人間にふりかかったが、希望だけは残ったと言われていることにも、二重性があると思われる。希望は生き甲斐を与えてくれるが、それは、同時に、失望と幻滅にいつでも変わりうるようなものである。人間は、いつまでも希望をもって生きようとするが、最後に人間を待っているものは等しく死である。死は、あらゆる希望がはかない幻想以外の何ものでもないことを教える。

プロメテウスとエピメテウスが双子の兄弟で、しかも人類の先駆者という意味をもっている点にも、人間の二重性が語られている。プロメテウスは〈先に知る者〉を意味し、エピメテウスは〈後に知る者〉を意味する。人間は知恵を働かせ未来を予測して生きていくが、大概の場合、得られた未来は、考えもしなかった幻滅に終わることが多い。その時になって、人間は後悔する。先に知ることは、後で知ることと変わらない。プロメテウスとエピメテウスが双子の兄弟だとみられているのは、人間のこのような二重性を象徴しているものであろう。

現に、プロメテウスが人間のためになると思ってしたことは、すべて逆の結果を招いてしまっている。それどころか、自らも、罰を受けて、業苦を受けねばならなくなったのである。神によって定められた人間の運命は、変更することはできなかった。人間は、先見と後悔、狡猾（こうかつ）と愚昧（ぐまい）とが同時に一つになっている二重存在者なのである。

プロメテウス神話は、それまで曖昧であった神々と人間の区別を明確化し、それぞれがどのような分を割り当てられるべきかを説明しようとした神話である。それは、プロメテウスによる牛の二分割から、プロメテウスによる火の窃盗、パンドラの登場、プロメテウスの処罰という一連の事件によって語られる。この過程で定められることは、神々と人間の各々の分、つまり運命に他ならなかった。

しかも、そこで定められた人間の運命は、プロメテウスの思惑とは逆に、人間にとって必ずしも有利なものではなかった。人間の取り分は、死と滅亡、労苦、病気をはじめとする多くの災いであった。とすれば、プロメテウスは、人類に恩恵を与えようとして、実は、その全く逆のものを、その意に反して分け与えてしまったことになる。人間に、あらゆる悩みや苦しみ、心配や苦難や不幸を、結果としてもたらしてしまったからである。かくて、プロメテウス神話は、この人間世界が悪に満ちていることを説明する神話となったのである。

神への反抗と傲慢

しかも、この人間世界の悪の原因は、人間の擁護者の犯した罪に求められる。そして、その罪は、何よりも神への反抗を意味した。プロメテウスは、ゼウスに対して悪巧みをし、ゼウスを騙そうとしたばかりか、天上のゼウスの鍛冶場から火を盗んだ。この神をもないがしろにする行為が罪とされたのである。神は、この神への反抗を怒り、厳しく罰する。

しかし、人間が人間として生きていくには、この神への反抗なくしては生きていくことができないとも言える。その意味では、人間は、最初から罪ある存在であり、同時に、罰せられてある存在である。人間が人間として存在しうるのは、人間が悪への自由をもっているからである。人間は絶えず神に反抗しつつ生きている。プロメテウス神話は、この人間のもつ悪への自由を語る物語とも理解することができる。現に、プロメテウスは、ゼウスによって罰せられ、岩に縛られ、鷲によって肝臓をついばまれる残酷な刑罰を受けても、なお、神に妥協することも、許しを乞うこともしていない。強情でもあり、傲慢でもある。プロメテウスの自由は、神への反抗の自由でもある。

なるほど、紀元前五世紀の古代ギリシアの悲劇詩人、アイスキュロスは、『縛られたプロメテウス』の中で、プロメテウスを、暴君ゼウスに対抗して、人間に恩恵を与え、人間のために犠牲になった英雄とした。そこでは、プロメテウスは、人類に火を授けたばかりでなく、家の作り方、暦、数、文字、獣を飼い馴らす術、農業、馬車や船の作り方、薬の作り方、占星術、犠牲の捧げ方、金属の使用など、あらゆる技術を、贈り物として授けたことになっている。プロメテウスは、これらを、神に反抗することによって、人間に与えたのである。プロメテウスは、人類文明の進歩の恩人だということになる。

しかしながら、アイスキュロスにおいても、それは、なお、プロメテウスが神から罰せられ、業苦に苦しめられることによって可能であった。そこに、プロメテウスの悲劇性もある。そこには、人間が豊かな技術文明を得るには、神から罰せられることなくしてありえないという意味も含まれていたであろう。

神の領域を犯し、神に対して越権行為を行なったために、神によって滅ぼされると

いう神話は、比較的どこにでも見られる。ギリシア神話でも、神々に対する人間の傲慢こそ罪である。そして、傲慢には、神からの罰が与えられ、人間の限界が定められるというのが、ギリシア的人間観であった。神から火を盗んで人間に与えたというプロメテウスの神話は、人間による火の獲得と技術の進歩が、そのまま、神と自然に対する反逆であり、侵害だということを語っている。人間の先駆者が神に反抗する罪を犯したために、人間は、いかなる不幸も労苦もなかった世界を追われ、様々な不幸と悪の世界に住まねばならなくなったというモチーフは、すでに、ヘブライの原罪神話に近づいている。

ギルガメシュとエンキドゥ

よく知られたバビロニアの『ギルガメシュ叙事詩』は、悪の起源を語るものではない。しかし、神と人間の運命の区別を物語っている点では、プロメテウスの神話に近い。また、人間の運命が神に対して犯した罪によって定められたという点でも、類似している。

ギルガメシュは、三分の二は神で、三分の一は人間とされ、ウルクの住民を支配する暴君であった。そのため、母神アルルは、ギルガメシュの対抗者となる野人エンキドゥを創造した。エンキドゥのことを知ったギルガメシュは、彼のもとに遊び女を送った。遊び女と交わったエンキドゥは、野での生活を捨てて、ギルガメシュのいるウルクへ向かった。ギルガメシュとエンキドゥは互いに激しく争ったが、やがて互いの力を認め、二人は固い友情で結ばれた。

その後、ギルガメシュは、エンキドゥの反対を押し切って、杉の森に住む恐ろしい竜形の怪物フンババを退治するために、エンキドゥを連れて出発した。ギルガメシュたちは、杉を切り倒されたことに怒ったフンババと激しく戦い、勝ちを収め、命乞いをするフンババを切り殺してしまった。

その後、ギルガメシュは、女神イシュタルから求愛されるが、彼女からひどい仕打ちを受けた恋人たちをあげて、これを拒絶した。そのことに激怒したイシュタルは、父アヌと母アントゥムに訴え、ギルガメシュを滅ぼすために、天の牛を創って地上に送らせた。だが、ギルガメシュとエンキドゥは力を合わせてこれと戦い、エンキドゥは、この天の牛を殺してしまった。天上の神々は、杉の森を荒らし、フンババを殺し、天の牛を殺した報いとして、二人のうち一人が死なねばならないと決めた。そのため、エンキドゥが病に伏せ、死んでしまった。

ギルガメシュは、エンキドゥの死を嘆き悲しみ、自分もエンキドゥと同じように死ぬのではないかと恐れ、不死を求めて、永遠の命を得たと言われるウトナピシュティムのもとへ旅立った。途中、酒場の女主人、シドゥリに会ったが、彼女は、ギルガメシュに、永遠の生命を求めることは無駄であること、生きている間に多くの楽しみをすべきことを説いた。しかし、それでも、ギルガメシュはウトナピシュティムのもと

を訪ね、不死を得る道を聞いた。ウトナピシュティムは、大洪水の話をし、その後不死を得たことを語ったが、ギルガメシュは、永生の秘密が分からず、失望した。それでも、ウトナピシュティムの妻は、若返りの薬草のことを教えてくれた。ところが、ギルガメシュは、帰り道の途中で水浴をしている間に、その草を蛇に食べられてしまった。かくて、ギルガメシュは、永生の夢も破れ、悲嘆に暮れ、疲れ果ててウルクに帰還した。

この物語は悪の起源を語った物語ではない。しかし、神々に反抗した罪ゆえに、死を免れることができなくなったという考えを語っている点では、プロメテウス神話と共通している。ギルガメシュとエンキドゥは、森の杉を薙ぎ倒し、森の怪物フンババを殺し、さらに神が遣わした天の牛をも殺した。それらは、神の領域への越権行為であり、人間の限界を越える違反であった。その報いとして、エンキドゥには死が与えられ、ギルガメシュにも死への恐怖が与えられたのである。なるほど、エンキドゥは神が作った神であって、人ではないが、彼は、人間の女と交わってすでに人間化していた。それゆえに、死を免れなくなったのである。

ギルガメシュの物語は、罪と死について語る物語である。人間は死すべき運命にあり、神々のように死を免れることはできないということを、それは語ろうとする。『ギルガメシュ叙事詩』(Ⅲ・四・五―八)でも、次のように歌われている。「だれが、わが友よ、天上まで上ることができようか。太陽のもとに永遠に生きるは神々のみ、人間というものは、その生きる日数に限りがある。彼らのなすことは、すべて風にすぎない」と。また、酒場の女主人シドゥリは、ギルガメシュに次のように語る。「ギルガメシュよ、あなたはどこまでさまよい行くのです。あなたの求める生命はみつかることがないでしょう。神々が人間を創られたとき、人間には死を割りふられたのです。生命は自分たちの手の内に留めおいて」(Ⅹ・三・一―五)と。この物語は、人間の可死性についてよく語っている。しかも、それは、人間が神に対してなした罪によるとも考えられている。罪の自覚と死の自覚こそ、この物語の語ろうとしていることである。

一般に、英雄神話は、英雄が、神と人、自然と文化の境界にいて、人間に偉大な業績を残した後、悲劇的な死を遂げるというモチーフによって語られているものが多い。だが、人々は、また、そこに、避けることのできない人間の死と、人間世界を創るために犯した罪とを見ていたのだと言わねばならない。

3　原罪と審判

楽園喪失

『旧約聖書』の「創世記」(二―三)が語るヘブライの堕罪神話でも、人類の祖先が神に対して罪を犯したために、人類は、楽園を追放された上に、死と労苦を免れえなく

なったと言われている。この失楽園の物語の起源は相当に古く、紀元前の九世紀には遡ることができると言われる。これも、死や労苦など、悪の起源を祖先の罪に求めている点では、プロメテウス神話に近いものだと言えよう。

神は、地と天を創った後、土の塵から人を作り、命の息をその鼻に吹き入れ、エデンの園に置き、その園の中央には、命の木と善悪を知る木とを生えさせた。そして、神は、人に、善悪を知る木からその木の実を取って食べることを禁じた。また、神は、人が一人でいるのはよくないと考え、獣や鳥を創り、さらに、その人を深く眠らせ、その肋骨から一人の女を創った。神が創った野の生き物のうちで最も狡猾な蛇は、善悪の木の実を食べると神のように善悪を知る者になれると、女をそそのかした。女は、その実を食べ、男にも与えたので、二人の目は開け、初めて自分たちが裸であることを知り、無花果の葉をつなぎ合わせ腰に巻いた。男と女が善悪を知る木の実を食べたことを知った神は、女には出産の苦しみを、男には食物を得るための労苦を、そして、等しく土に帰る死を与えた。そして、男と女をエデンの園から永久に追放した。男をアダム、女をエバという。

この全くよく知られた楽園喪失の物語は、人間の祖先が禁断の木の実を食べるという罪を犯したために、人間は死を免れることができなくなったということを語っている。死は罪の報いであった。禁断の木の実を食べ、神のように善悪を知ることができるようになった人間は、やがて、もう一つの命の木の実も食べて、神のごとく永遠の生を得る恐れがあった。それで、神は、人類の祖先を楽園から追放し、人間には死を与え、自分のもとには、永遠の生を確保したのである。その意味では、この堕罪神話は、プロメテウス神話や『ギルガメシュ叙事詩』の思想同様、神と人間の運命の違いを定めようとした神話だとも言える。

さらに、この神話は、死ばかりでなく、労苦や出産の苦しみなど、悪や災いが人間に与えられた起源をも、人間が神に対して犯した最初の罪に求める。原初の罪は、罪なき世界から罪ある世界への人間の墜落を語り、この世に悪が出現した謂れを語る。そこには、人間が生きてあるということがもともと重荷を背負っていることに他ならないことの自覚、人間存在の負荷性の自覚がある。人間が神に対して犯した原初の罪ゆえに、人間に死と労苦が与えられ、人間の楽園状態が終わるという神話は、比較的どこにでも見られる神話である。ヘブライの堕罪神話は、その最も完成したものと言えよう。

原罪と終末論

だが、ヘブライの堕罪神話は、その罪意識の深い自覚において特異である。この堕罪神話での罪観念は、他の神話同様、何よりも神への反抗、神への越権行為を意味する。罪を犯したアダムとエバは原初の人間を意味し、人間そのものを表わしている。

したがって、アダムとエバが犯した原罪によって、その後の人類は、すべて、生まれながらにしてこの罪を負うと考えられる。しかも、アダムとエバが原初の罪を犯したために、この世に悪が到来したとされる。悪の起源は、人類の祖先の罪にある。罪は、人間存在の根底に結びついている。この罪の自覚において、ヘブライ神話は他の神話以上に厳しい。

現に、ヘブライ神話では、この人類の罪のテーマは、アダムとエバの物語から出発して、カインとアベルの物語でも、バベルの塔の物語でも、ノアの大洪水伝説でも、一貫して語られている。人類の祖先の犯した原罪は、その後の人類の中に脈々と流れていると考えられたのである。

アダムとエバの長子として生まれたカインは土を耕して穀物を作り、次男として生まれたアベルは羊を飼って暮らしていた。この兄弟が感謝の供物を神に捧げた時、神はアベルの供物を受け入れ、カインの供物を省みなかった。そのため、怒ったカインは、弟アベルを襲って殺した。かくて、カインは、神から永遠に呪われたものとなった。

このカインとアベルの物語の背景には、遊牧を伝統的生業としていたヘブライ族の耕作民に対する自己弁護や、農耕民や都市住民の定住生活に対する抵抗が反映している。しかし、何よりも、この物語のテーマは、カインの犯した罪が今日の人間にも受け継がれているとする思想である。

同じ一つの言葉を使って互いに心を通わせていた人間たちは、集まって住み、都市をつくり、粘土で煉瓦を作って、天まで届くような巨大な塔を建てようとした。神は、その塔が天界にまで達することを恐れ、人間たちの使う言葉をバラバラにすることによって、塔建設の意図をくじいた。このよく知られたバベルの塔の物語でも、人間が常に神に反抗しうる罪ある存在であるという思想が語られている。しかも、それは、アベル、カイン以来の人類が脈々として受け継いでいる罪と考えられている。

ノアの方舟の物語は、いわば、この人類の罪悪の歴史の終着点でもあった。人間世界が乱れて暴虐に満ちているのを見た神は、地上に人間を創ったことを悔い、人間を滅ぼすために、大洪水を起こすことにした。だが、義しき人ノアにだけは警告を発し、方舟を作らせ、大洪水の災厄から救った。アララト山に着いた方舟から出たノアは、神に燔祭（はんさい）を捧げ、神は、ノアの子孫の繁栄を約束した。

この種の洪水伝説は世界中に流布しているが、ヘブライ神話の洪水伝説は、特に倫理的な動機づけがなされている点で際立っている。洪水は、人間の邪悪や堕落を滅ぼすために引き起こされる。

このヘブライの洪水伝説は、よく知られているように、シュメールのジウスドラ王の物語など、古代メソポタミアの洪水伝説にその源泉をもっている。例えば、バビロニアの『アトラ・ハシースの物語』（Ⅲ・一―八）でも、アトラ・ハシースは、神の警告

によって、船を作って大洪水から助かり、他の人間どもは土と化したことになっている。しかし、ここには、必ずしも倫理的動機はない。ただ、人間があまりにも増えすぎ、そのざわめきが神々に耐えられず、眠ることもできなくなったから、大洪水が起こされたにすぎない。しかも、人間が滅ぼされたことやアトラ・ハシースのみが助けられたことについても、神々の間で様々に意見が分かれている。

同じバビロニアの『ギルガメシュ叙事詩』(Ⅲ・八―一九六)の中で、ウトナピシュティムが語って聞かせる洪水の物語でも、倫理的動機は見当たらない。神々は、大洪水によってシュルパックの町を滅ぼすことにしたが、そこに住むウトナピシュティムにだけは方舟を作るように命じ、その方舟のおかげで、ウトナピシュティム一族は大洪水から救われ、神々から永遠の生命を与えられた。ここでは、何ゆえに大洪水が起こされたのか、必ずしも明瞭には語られていない。

むしろ、倫理的動機を含むのは、古代ギリシアの大洪水伝説である。ゼウスは、邪悪であった人類を滅ぼそうとして、地上に大洪水を起こしたが、義しき人デウカリオンとその妻ピュラだけは、プロメテウスから教えられて作った方舟に乗り込んで救われ、英雄の種族の祖先となったという。

古代メソポタミアの大洪水伝説を受け継ぎながら、そこに、古代ギリシア以上に、人間の堕落と神の懲罰という倫理的動機を入れ、解釈し直したのは、ヘブライ神話であった。ヘブライ神話では、人類の罪について語る一連の物語の最後に、この大洪水伝説が位置づけられている。それは、なお、人類の祖先が神に対して犯した原罪の重みを語ろうとするものである。それは、人間存在の負荷性への深い自覚に裏づけられている。

しかし、ヘブライ思想の罪と悪の自覚は、過去における人類の歴史始まって以来の罪ばかりでなく、未来における人類の罪の継続と、その最終的審判の思想にまで及ぶ。悪なる人類の歴史は必ず終末を迎え、最後の審判によって、罪あるものは滅ぼされ、一切の悪は罰せられ、全人類が裁かれるという。このヘブライ思想独自の終末論には、悪は滅ぼされ、神に復帰した者のみが救われるとする選民思想があり、宗教的には大きな欠陥がある。宗教は、むしろ、悪を悪として凝視し、自らに受けとめ、その救済を考えるのでなければならないからである。しかし、それでも、このヘブライの思想は、罪と悪の歴史を未来にも及ぼし、人類の全歴史を悪として把握した点では、それなりに深い罪と悪の自覚に由来するとは言える。

この世の悪の起源を、過去の歴史の始まりにおける人類の祖先の罪、すなわち神からの離反に見たヘブライ人は、また、これを未来にも及ぼし、歴史の終末における永劫の裁きの思想を作り出した。そこには、人間存在は、過去・現在・未来を通して、永劫に罰せられた者だとみる厳しい倫理観がある。それは、人間存在の負荷性に対する深い自覚に基づくものだと言えるであろう。

とは言え、ヘブライの堕罪神話では、エバは、偶然出会った蛇にそそのかされて、

禁断の木の実を食べたことになっている。しかも、そのエバの行為は、自由な選択の行為であった。そこには、意志に基づく自由の行為がある。この堕罪神話は、人間の行為の偶然性と自由について深く考えさせられる。いつでも、人間は悪をなしうる自由をもつということ、自由ゆえに悪をなしうるということを、それは語っている。

人間は、善への傾向をもつと同時に、悪への傾向をもつ。しかも、それは、絶えず偶然に触発されて起きる。シェリングの言うように、自由とは善をなしうる能力であるとともに、悪をなしうる能力でもある。[16] 人間は、いつでも、神に背いて自己自身であろうとする自由をもつのである。人間は絶えず本来のあり方から外れる可能性をもち、そのことが人間存在の根底に深く結びついている。むしろ、悪への自由なくして、人間は人間ではありえない。人間は生まれつき自愛の原理によって生きており、根源悪に支配されている。

古代メソポタミアの諸神話は、この世の悪の起源を世界創造以前の混沌に求めた。そこでは、善の原理も悪の原理も、最初から混沌の中に存在していたことになる。古代ギリシアの諸神話は、大きな振幅を描いているが、悪の起源がティタン的なものにあるとすれば、古代ギリシアの神話も、古代メソポタミアの方に近い面をもっていたと言える。しかし、プロメテウス神話に至ると、悪の起源をむしろ人類の祖先の罪に求める考え方に近くなってくる。古代ヘブライの堕罪神話は、その典型である。そこでは、神は絶対に善であり、人間は最初から罪を犯したものと考えられている。

4　赦しと救い

罪と悪の自覚

人間が人間として大地の上に立った時、人間は世界から開かれ、世界は人間から開かれた。しかし、それは、同時に、人間が世界から見放され、世界から疎遠なものとして立たされたということでもある。人間は、最初から、世界に根拠をもたず、世界から根拠づけられていない存在として出発した。人間は、世界に根拠をもたない不安な存在として、意識するしないにかかわらず、深淵に投げ出されて存在していた。

ヘブライ神話をはじめとして、世界の多くの神話が語る人間の楽園喪失の物語や堕罪の物語には、人間が世界から離反し、世界から見放されてあるということ、世界から離脱し遠ざかってしまったということの自覚が反映しているとみなければならない。神話が創造された原初において、すでに、人間は、もとの全一な世界から分離し、完全さと充足を失った存在とみられている。多くの神話が語る神からの人間の離反、楽園からの人間の追放は、世界からの人間の離脱と世界の喪失を象徴的に表現している。そして、それを、原初の人々は、罪と受け取ったのである。その意味では、人間は、

罪を背負うことなくして、人間ではありえない。世界から離反することなくして、人間ではありえない。だが、それは同時に不安でもある。人間は、不安にさしかけられた存在であり、寄る辺を失った存在なのである。

自然災害や人間社会の不正や不条理、さらに、人生の苦や死など、この世の悪が、悪として自覚され、それが、人間存在に背負わされた重荷として深く自覚されるのも、人間が世界から離反し、寄る辺を失った不安な存在だということからくる。悪の自覚、それは他ならぬ人間存在の負荷性の自覚なのだが、それは、人間存在の不安と深く結びついている。この世に悪が存在するのは、人間がかつて罪を犯したからだという比較的普遍的に見られる神話の観念には、負荷性と不安の深い結びつきが語られている。そして、この人間存在の負荷性と不安の自覚を通して、大いなるものへの畏怖から出発した宗教は、より深い真実に足を踏み入れる。悪と罪の自覚を通して、宗教的自覚はより深まる。

古代ギリシアのよく知られたシシュフォスの神話は、人間存在の負荷性と不安についてよく語っている。ホメロスの『オデュッセイア』(XI)の語るところによれば、シシュフォスは、ハデスの国で大いなる苦難に従事していたという。彼は、両手で巨大な岩を丘の上へ押し上げるが、頂上を越える寸前に重みで押し戻されて、平地へ転がり落ち、またも押し上げるが、また押し戻される。この空しい仕事を、シシュフォスは永劫に繰り返しているという。シシュフォスは、生前はコリントスの建設者として知られ、それほど重大な罪を犯したわけではない。だが、彼は知恵ある賢い男であったために、神に逆らう者として神から恨まれ、この永劫の刑罰を受けていたと思われる。この無意味な労苦が永遠に反復されるシシュフォスの苦痛は、人間が永遠に重荷を背負っている存在だということ、人間存在の負荷性について鮮明に語っている。しかも、それは、神からの離反という罪による。人間は神から見放された存在であり、神から離反した存在なのである。シシュフォスの神話は、人間の不安と苦、罪と悪を深く表現している。

古代インドのヒンドゥー教の地獄のイメージも、人間存在の負荷性について印象深く語ったものであろう。地獄では、罪ある者は火に焼かれ、蛇や猛獣や猛禽に追われ、血と糞の川に浮かぶ島で癩病に苦しみ、血を飲まされ糞を食べさせられるという。この地獄の責苦は、人間存在の負荷性について語っている。しかも、それは、生前の罪による。つまり、世界の秩序からの離反によると考えられたのである。ここにも、人間存在の負荷性と不安の事実が語られていると言えよう。

ヨブの苦難

『旧約聖書』の義人ヨブの物語は、この世の不条理と生きることの苦、さらに人間存在の負荷性と不安を語って、あますところがない。義しき者が苦難に遭わねばならぬ不条理というテーマは、広く古代オリエントの知恵文学のテーマであり、旧約の「ヨ

ブ記」はその最も完成されたものである。例えば、古代バビロニアの文書『人間の不幸に関する対話』でも、信仰厚い者には貧困がもたらされ、不信心者には富がもたらされ、義しき者は追いやられ、悪事を働く者は義とされるこの世の不条理について、語られていた。この世は不公正に満ちており、義しからざる者が栄え、義しき者は滅び、しかも、神はこのことに無関心である。また、「ヨブ記」と比較されるバビロニアの文書『苦しむ正義の人の詩』でも、罪なき主人公は数々の災厄に遭い、しかも、いかなる神も援助を差し延べないことを述べ、深い諦念が語られている。『旧約聖書』の義人ヨブの物語は、遠く、これら古代メソポタミアの知恵文学にその源泉をもっていたのである。

だが、『旧約聖書』のヨブは、単なる諦念にとどまらず、神への異議申立てに及ぶ。

「ヨブ記」の主人公は、ウツという地に住むヨブという名の人であった。彼は全く、義しく、神を畏れ、悪に遠ざかっていた。ある日、神とサタンの間で、ヨブを試すことになる。以来、ヨブは、家畜を失い家族を失ったが、なお神の前に義しかった。ところが、肉を打たれ骨を打たれ、大きな苦しみに突き落とされるに及んで、彼は突如として自分の生まれた日を呪う。ヨブのもとにやって来た説教者たちは、口々に因果応報を説き、神に対して罪をなしたがゆえに苦難に遭うことを述べる。だが、ヨブは、なお、わが身の義しさ、無実を主張して、ただわが身の死を望むだけであった。ヨブは、多くの説教者の説教にはもはや耳を貸さず、親しき者からも背かれた苦悩を語り、自らの苦しみはいかなる言葉でも和らげられはしないと述べ、直接神と論争しようとする。ヨブにとって、どうしても理解できないことは、自分は何一つ不義をしたことがないのに、何ゆえ苦難に遭わねばならないのかということであった。そこへ、突如として主が現われ、人間の無知、無力と、神の絶対について、ヨブに対して説く。ヨブは、悔い改め、神のもとに帰る。ヨブは、神からすべての財産を二倍にして返され、兄弟、姉妹も戻され、長く生きながらえ、日満ちて死んだという。

「ヨブ記」の主題は、何ゆえ義しき者が苦難に遭い、罪なき者が苦しまねばならないかということであった。なぜ、このような悪、不条理がこの世に満ちているのか。このことは、もはや、悪の起源に関する因果応報説では説くことができない。この不条理は、罪を犯したがゆえに悪の報いを受けているのではないからである。ここでは、悪の存在についての道徳的理解はすでに破綻している。「ヨブ記」は、この破綻を極限にまで押し進めることによって、この世の悪の存在についての理解を、より深める。義しき者がゆえなく苦難に遭うという不条理が何ゆえこの世に存在するのかが理解できない時、自己自身の存在は、一個の重荷と化す。ヨブが自分の生まれた日を呪い、むしろ、死を望んだのは、この存在の重荷の告白であった。自己自身の存在の重荷を深く自覚する時、存在の負荷性としての悪の自覚は、極限にまで押し進められる。

と同時に、この時、自己自身はすでに神から離反し、神から見放されて、深い不安の中にあることを見出す。ヨブにとって、この不条理を聞きただすにも、神は何一つ

答えてくれなかった。ヨブは、ただ一人、孤独な不安の中に逼塞していなければならなかった。神からの離反が罪だとすれば、この罪は不安以外の何ものでもない。ヨブは自らの生を呪うという極限の絶望の中で、世界から見放された存在として、深い不安の中に投げ出されたのである。ここには、存在の負荷性と不安、悪と罪の二乗された極限が語られている。

ただ、この罪と悪は、神に対して自らを悔い改め、神に絶対的に帰依する時、赦される。そして、この時、最初の段階以上の深い宗教的真理に至り着く。ヨブにそれまでの財産の二倍のものが与えられるのは、そのことを象徴している。そこには、単なる道徳的段階を越えた深い宗教的真理が語られている。それは、古代宗教が至り着いた極限を示すとともに、すでに、キリスト教をはじめとする高度宗教を予想するものである。

高度宗教への移行

いつの時代も、悪は絶えることはなかった。この世は、自然の災い、人間社会の不正や不条理、人生の苦や死、空しさなど、悪に満ちていた。現世は悪であった。古代宗教では、一般に、これらの悪を秩序の混乱として受け取り、その起源を人間の罪に求めた。したがって、罪を洗い浄めれば、悪はなくなり、秩序は回復すると考えた。悪は宇宙秩序の混乱に他ならず、乱れた秩序は、儀礼によって罪・穢れを浄化することによって、回復できると考えた。古代宗教の諸儀礼には、宇宙の再生によって人間および人間社会の再生が可能だという宇宙論的考えがあった。古代宗教は、メソポタミアの新年祭からオルフェウス教などの密儀宗教に至るまで、罪の浄化の原理によって悪を祓い、絶えざる再生の中で永遠の生を獲得しようとした。

神話と儀礼は、その浄化の原理の表現であった。人々は、神話と儀礼を通して、始源の無垢と完全さを回復し、再生をはかったのである。神話は、単なる物語ではなく、生きられる現実であり、儀礼は、それを具体的な行為によって象徴的に表現する。人々は、この生きた現実としての神話や儀礼を通して、自己の生きる基盤を見出した。

宗教は、大いなるものへの畏怖に始まり、悪と罪の自覚を通ってより深まり、大いなるものへの帰一によって完成する。古代宗教も、この宗教の過程を表現している。

それに対して、キリスト教や仏教などの高度宗教は、赦しや救いを通して、悪や罪を包み越えようとする。

例えば、キリスト教では、ユダヤ教を受け継いで、悪や罪の意味がより内面化され、罪の悔い改めと神の恩寵による救済が説かれる。罪は神の愛に対する離反であり、これを悔い改める時、神による罪の赦しがもたらされる。ここには、人間は必然的に罪を背負うものであり、それは人間存在の根本的あり方であるという深い自覚がある。それゆえに、それは、ただ悔い改めることによって、神の赦しを得る以外にないと考える。神の愛と憐れみを信じる以外にないのである。

古代宗教では、罪や悪は、そのまま儀礼によって浄化される。それに対して、高度宗教、特にキリスト教や仏教の浄土教など、神や仏の恩恵とそれへの信仰を強調する恩寵宗教では、罪や悪はより深く自覚され、人間の力ではどうにもならないものととらえられる。人間は根本的に神から離反した存在である。だが、それゆえにこそ、赦しがあり、救いがあり、神の恩寵があると考えるのである。古代宗教では、罪悪と浄化は順接的であるのに対して、高度宗教では、罪悪と救いは逆接的である。

キリスト教や仏教など、高度宗教は、ユダヤ教やヒンドゥー教など、古代宗教を母体としながら、社会秩序の根底的な動揺と人間の一層の堕落を契機として登場し、人間の救済や真の自己を求めて、より深い宗教的真理を展開した。しかし、これらの高度宗教も、古代宗教同様、大いなるものへの畏怖と大いなるものへの帰一という宗教感情に支えられていたことに変わりはない。これらも、宇宙の根源的生命への畏れから出発し、宇宙の根源的生命への帰一を求めてきた。神における永生や涅槃の境地が説かれたのは、その一つの表現である。ただ、キリスト教や仏教などの高度宗教は、この過程の中で、罪や悪の問題を、人間存在の根底に巣くう問題として、より深く自覚した。宇宙の根源的生命からの離反、これが罪であり、その結果が悪である。これを深く自覚することを通して、宇宙の根源的生命へと復帰すること、それが宗教の目指すところである。そして、これは、キリスト教や仏教など、高度宗教において、より高度な完成を見たのである。

エピローグ　宗教と日本人

「君の宗教は何か」と問われた場合、多くの日本人は「私は無宗教です」と答える。だが、日本人は本当に無宗教なのであろうか。現代日本人が無宗教だと答える心理的背景には、表面で言われていること以上に錯綜した意識が働いているように思われる。何よりも、「君の宗教は何か」という問いをいきなり突きつけられると、大概の日本人は構えてしまう。そして、宗教と言われると、何か深い信仰をもっていなければならないと思い込む。そのため、自分はそれほど深い信仰はもってはいないというような意味合いで、無宗教と答えている場合が多いのである。また、宗教というようなものは、個人の内面にかかわる問題であって、日常の会話の中でことさら主張すべきものではないといった心理、一種の羞恥心のようなものも、多くの日本人にはあるとも言える。かくて、多くの日本人は、あまり深く考えることなく、無宗教と答える。そこには、自分はそれほど特殊な人物ではなく、平均的な日本人の一人であるという意味合いも込められているであろう。

この点では、わが国は、欧米とは逆である。欧米では、無宗教と言えば無神論者とみなされ、逆に、危険人物視される恐れがある。そのため、欧米人は、自分はそれほど危険な人物ではないという意味合いを込めて、自分の属している宗派を言う。だが、その程度の宗派なら、大概の日本人はもっている。毎年のお墓参りにせよ、葬式にせよ、自分の属する宗派で行なっているのである。ところが、そのようなことは、日本人にとっては、内輪のことであるから、いざ表向きに自分の宗教を問われると、日本人は、内輪のことは外には出せないと考えてしまう。

明治以来、西洋の近代文化が受け入れられ、それとともに、〈宗教〉という言葉も作られた。そのため、宗教というと、西洋人のように、個人的に深く神を信仰しているのでなければならないという一種の強迫観念のようなものが、日本人には形成されてしまった。日本人の多くは、そのような意味での深い信仰は個人的にはもちあわせていないから、無宗教と答える以外にないのである。そこには、明治以来の近代化・西洋化の過程で日本人が強いられてきた精神の二重構造があり、日本人の思い込み、あるいは、思い込まされてきた先入観がある。

明治以来、日本人は、西洋の文化を純粋化して受け取ってきたし、受け取らされてきた。宗教観でも、日本にやってきた西洋人や西洋化した日本の知識人の説く宗教観が表向き則らねばならない宗教観だと思い込まされてきた。そのため、日本人の多くは、自分たちの日常の宗教行事や、宗教に根差した伝統的な生活様式は宗教ではない、または、より劣った宗教だと思い込んできたのである。そのような強迫観念を取り去

ってしまえば、実は、西洋人でも、特に現代では、教会に足しげく通うわけでもなく、それほど宗教には関心をもたない〈無宗教者〉は多いことに気づく。逆に言えば、神社に初詣でに行き、神前で結婚式を挙げ、お彼岸やお盆には墓参りに行き、葬式の時にはお寺様に来てもらっている平均的な日本人は、それ相応に宗教をもっているということにもなる。

それどころか、神社にも、寺院にも参拝し、神も仏も同時に拝んでいる平均的日本人は、ことのほか、宗教的民族だということにもなる。現に、毎年、有名な神社や寺院には、何百万となく参拝者が訪れる。そのため、わが国の宗教人口は、しかるべき統計では、実際の人口を遙に越えて、二億近くにもなってしまう。平均的な日本人は、神社にも寺院にも参拝するから、統計上はそうなってしまうし、それもまんざら嘘でもないのである。外向きには無宗教と答える日本人も、内向きには、それなりに素朴な宗教的心情はもっているのだと言わねばならない。わが国では、常日頃は、政治的・社会的活動の中に、欧米ほど、宗教性は現われてはこないが、しかし、実際には、その深いところでは、明確に意識されることのない宗教的心情が、日本人の行動様式を規定してもいる。

神と仏の一方を取り、他方を捨てるのではなく、両方とも等しく崇めるのが、伝統的で平均的な日本人の生き方であった。しかも、日本人は、古来、神と仏、神道と仏教をうまく分業させ、その共存を計ってきた。神道の方は、どちらかと言えば、地縁的社会の結合原理とし、それに対して、仏教の方は、どちらかと言えば、血縁的社会の結合原理としてきた。村の神社は、その土地の神を祀り、そこに住まう村人の共通の絆となった。それに対して、村のお寺は、祖先の霊を供養して、村人が祖先との共通の絆を確認するためのものとなった。このようなあり方が、日本人の伝統的な生き方であった。そこには、多様な価値の併存を許し、それぞれがそれぞれにその独自の価値を発揮できるように、その併存の場を用意するという日本人独特の価値観が働いている。

儒教は、日本の場合、宗教として受け入れられることはなかったが、これは、政治社会の倫理規範として、仏教とともに受け入れられた。かくて、われわれは、日本文化のあり方を、昔から、〈神儒仏〉と言い習わし、われわれの精神的源泉を明らかにするとともに、われわれの価値観が多様な価値の併存によって成り立っていることを表現したのである。鎮守の森の神社と祖先の供養をするお寺を抱え、長幼の序を守って緊密な共同社会を営んでいたわが国のかつての村の風景は、とりもなおさず、わが国の文化が神儒仏の三つを精神的支柱として成り立っていること、しかも、それらがどれも捨てられることなく程よく併存していることを、身近に表現するものであった。

しかし、この場合、併存というのは、必ずしも正しくはない。そこには、おのずと、生の様式の深層部分と表層部分の区別があった。儒教や仏教は、どちらかと言えば、日本人の精神生活の表層部分を形成し、その深層部分に神道があった。わが国の文化

は、その深層部分に流れている神道的心情を土壌とし、その上に、仏教や儒教の考えが生かされて、それぞれが互いに浸透し、変容し合いながら、形成されてきたのである。よく言われるように、わが国の文化は重層的に出来ている。わが国の儒教や仏教の奥深くには、それを成り立たせている土壌としての神道がある。日本人の宗教的心意の源泉を尋ねていくと、結局、神道的心意に至り着く。これが基盤になって、多様な価値が併存してきたのである。

仏教や儒教を受け入れ、それを発展させていくことを可能にした神道的心意は、仏教渡来以前の古代的心意に最もよく表現されていると言える。この日本の古代的心意は、記紀神話などを通して知ることができるが、その本質は生命信仰にある。古代日本人は、宇宙に遍在する偉大な生命力があらゆるものに働き出ていると信じていた。そして、生きとし生けるすべてのものの中に宿る偉大な宇宙の生命力を、霊力または神として崇拝した。古代の日本人にとって、宇宙万物はすべて命あるものであり、生命力に満ちたものであった。古代日本人は、この生命力の場に生きていたのである。

よく言われることだが、日本人の信仰の源泉には、自然崇拝があるという。だが、これも、単なる自然崇拝ではなく、正確には、あらゆる自然物の中に宇宙の偉大な生命力を感じる心意を言う。古代日本人は、山川草木、鳥獣虫魚、あらゆる自然物の中に宇宙の不思議な生命力が宿っていると信じ、それを、霊力、霊魂、神として畏敬したのである。万物に宿る宇宙の偉大な生命力は、人智では計り知れない霊威をもっていたから、人々は、この偉大な力に自己の運命を任せて生きていく以外になかった。そのような大自然に宿る偉大な生命力への畏敬の念が、古代日本人の自然崇拝というものであった。

日本人の信仰の源泉は、また、祖先崇拝であるとも言われる。だが、これも、単なる祖先崇拝ではなく、人間もまた宇宙の偉大な生命力の一部であって、その生命力の場で死と再生を繰り返し、霊魂は永遠であるという考えに基づいている。したがって、人は死しても、その霊魂は祖先の霊となって生き続け、魂は不死であると考えられる。そこには、宇宙の生命力の永遠と、それと一体となった人間の魂の不死の考えがある。

古代日本人は、永遠に働き続ける生命の場で、万物は宇宙の中にあり、宇宙は万物の中に宿り、宇宙と万物は一つであると考えていたのである。日本人の宗教的心意の最も深い層位には、そのような生命信仰があり、その層位のもとに、仏教も、儒教も、キリスト教も、受け入れられ、位置づけられ、融合されていったのである。それが、日本文化の基本構造であった。日本人が多様な価値を併存させ、それぞれを生かしているのは、そのような構造によってである。

例えば、仏教の受容の場合でも、平安時代の真言・天台、鎌倉時代の浄土・法華・禅の諸宗は、そのような日本古来の生命信仰の場に受容されることによって、日本の土壌に根づき、日本の歴史形成に大きな役割を果たしていった。それは、仏教という外来宗教の変容であり、日本的土壌への吸収とも考えることができるし、逆に、神道

的心意の変容・発展だとも受け取ることができる。

現に、空海の密教についても、このことが言える。空海の密教思想は、宇宙の大生命を象徴する法身としての大日如来が、宇宙に存在する諸仏・諸菩薩をはじめ、生きとし生けるもの、餓鬼・畜生・修羅、土地の鬼神に至るまで、すべての中に顕現しており、万物はすべて大日如来の現われだという考えであった。したがって、われわれは、この身このままで宇宙の真生命を宿しており、即身成仏することができると考える。密教の金剛界・胎蔵界両部の曼荼羅は、そのことを視覚的に表現したものであった。この思想は、万物の中に宇宙の偉大な生命力を感じ、その生命力を神として畏敬していた日本人の古代的・神道的基盤にすぐさま受容され、吸収されていった。逆に言えば、そのような古代的・神道的生命信仰が、密教の生命哲学を得て、より豊富な表現を獲得し、真言密教という形で開花していったとも言えるのである。

最澄の開いた天台宗の〈一念三千〉の思想も、一念、つまりこの一瞬の心の思いの中に、あらゆる世界が宿っているという考えであった。したがって、それは、この一念の中に帰入することによって、いかなる凡夫も成仏しうると説く。この天台の思想は、後、密教を受け入れ、真言同様、即身成仏を説くに至る。天台の思想も、人間をはじめ、この世界の生きとし生けるものは、すべて宇宙の真生命を宿すという考えに基づいている。この思想と、古代的・神道的宗教心意は、互いに共鳴し合い、融合する可能性を最初からもっていた。日本人の原初的心意も、永遠の生命の場で、万物は宇宙の中にあり、宇宙は万物の中にあると考えたからである。

道元が語っていた思想も、その表現のしかたは違うが、結局は、空海や最澄の思想と共通してくる。道元も、山河大地、草木瓦石、すべてが法の現われ、宇宙の真理の表現であり、この一瞬一瞬の時が存在の如実な顕現であると言う。時間・空間の一点の中に世界が表現されているというのが、道元の繰り返し語ってきた思想であった。これも、また、道元自身は意識してはいないが、万物の中に宇宙の偉大な生命力を直観した神道的・古代的心意のより高度な表現だったとも理解することができる。

親鸞の場合は、確かに、その深い罪の自覚によって、素直で明るい古代的・神道的心意は、一旦闇の中へともぐるが、しかし、そこをくぐり抜けて、弥陀の本願への絶対帰依が説かれるとき、再び古代的宗教心意は甦ってきている。親鸞においては、われわれ一人一人が、それぞれに、宇宙の大生命の働きである阿弥陀仏の本願の力に救われているのである。弥陀の本願力の働きにすべてを任せる時、弥陀の大慈・大悲は働き、われわれ凡夫は、罪悪深重のままで救われるのである。そこには、宇宙の偉大な生命力にすべての運命を任せていた古代人の心意が、再び甦っていると言わねばならない。

空海にしても、最澄にしても、道元にしても、親鸞にしても、その思想は、大乗仏教の日本的な現われであり、日本的土壌への定着という意味をもつが、同時に、それは、それを受け入れる地盤となった日本人の古代的・神道的心意の表現でもあったの

である。

高度な思想面ばかりでなく、仏教が寺院宗教として日本の土地に実際に根づくときにも、その土地の古い神と仏教との習合が絶えず見られた。平安仏教の真言宗や天台宗の定着を考える場合にも、高野山や比叡山にあった古代以来の山岳信仰の基盤を無視しては語りえない。真言宗は、高野山の神、丹生明神を守護神とし、天台宗は、比叡の山の神を祀った日吉大社の山王信仰を基盤としている。空海や最澄も、山岳修行の体験をもち、ひたすら山を愛した。空海や最澄の深遠な思想も、古代以来の山岳信仰を土壌にして根づいていったのである。空海や最澄の源泉にもなった奈良以来の修験道も、神道的山岳信仰と仏教の融合であり、これを源泉として、神仏習合がわが国に広まっていった。また、日本古来の母なる大地への信仰、地母神信仰は、仏教と合体して観音信仰になり、日本古来の荒ぶる神への信仰は、仏教と合体として不動明王信仰になっていった。これらの過程は、仏教が土地の神々を吸収していった過程とも考えることができるし、逆に、日本の古い土着の神が、仏教という新しい衣を得て変容していった過程とも考えることができる。

仏を本地とし日本の神々をその垂迹とする本地垂迹説は、このような神仏習合を基礎づけるものであった。それは、仏教の日本化と日本の仏教化の中で渾然一体となっていた日本の宗教を、理論的に説明しようとするものであった。また、逆に、鎌倉時代には、神を本地とし仏をその垂迹とする反本地垂迹説の立場から、神道自身が密教などを受け入れて、伊勢神道が成立する。かくて、密教の胎蔵界・金剛界の両界は、伊勢の内宮・外宮の祠に配され、両部神道となった。このような仏教と神道との併存や融合は、必ずしも、平安仏教から始まったわけではなく、仏教渡来の当初の混乱は別として、かなり早いうちから徐々に培われてきたものである。それは、仏教が日本の古代的宗教心意のもとに根づいていく過程でもあり、古代的宗教心意が仏教という形をとって変容していく過程でもある。

このように、日本仏教が成立する背景には、仏教渡来以前の日本の古代的心意が働いている。しかも、この日本の古代的心意は、万物の中に宇宙の生命力が宿るという直観に根差している。しかし、このような原始心性は、日本にのみ限定されるものではない。このような古代的心意は、また、全世界の古代的心意に通じていく。日本人の宗教心意の源泉を尋ねて行けば、それは、逆に、世界に開かれていく。

本書で繰り返し語られてきたように、古代世界の神話や儀礼は、世界のどこでも、同じように、大いなるものへの畏怖と帰一、宇宙生命への畏怖と帰一という原初的な宗教感情を表現していた。それは、何よりも、大自然の偉大な力に対する畏怖の感情に始まり、人間の死の自覚を通して深まっていった感情であった。古代人は、どこでも、自然万物の中に宇宙の偉大な生命力が宿ると考え、そこに神的なものをみて、この偉大な自然の力に従った。そして、生きとし生けるものは、大自然の偉大な力に生かされており、死しても、大自然の場に帰り、そこから再生してくるものと考えた。

生きとし生けるものは、宇宙の大なる生命から生まれ、そこへと帰る。そして、この宇宙生命は、永遠であり、永劫に回帰するものと感じていた。古代人は、世界のどこでも、これを神話や儀礼の形で表現してきたのである。

このような原初的な宇宙感情は、原始宗教から古代宗教、高度宗教から現代宗教に至るまで、すべての宗教の底流に流れているものである。宇宙生命への畏怖と帰一の感情こそ、宗教の原初的感情であり、すべての宗教に通じる共通感情である。それは、人間が大地のもとに立った時以来懐かれ、今日まで持続されてきた感情である。日本の宗教も、古代以来、今日に至るまで、その低層流に、そのような感情を持続してきた。

神なき時代と言われる現代にも、原初的宗教感情は、なお、無意識のうちに懐かれている。問われれば無宗教と答える現代日本人の心の奥底にも、そのような原初的な宗教感情は生き続けていると言わねばならない。

註

1 Tylor,E.B. Primitive Culture, John Murray, 1958.『原始文化』誠信書房　一九六二年）

2 Marett,R.R.The Threshold of Religion, Metheun, 1914.『宗教と呪術』誠信書房　一九六七年）

3 Frazer,J.G.The Golden Bough, Abridged Edition, Macmillan, 1925. chap. 3·4『金枝篇』岩波文庫　一九七一年　第一巻 第三―四章）

4 Malinowski,B.K.Magic, Science and Religion and Other Essays, Garden City, 1954.

5 Augustinus, De vera religione 55(111)『真の宗教』著作集2　教文館　一九七九年　三九七頁―三九八頁）

6 Schleiermacher,F.E.D.Über die Religion(1799), Kritische Gesamtausgabe Bd.2, Walter de Gruyter, 1984. S.211『宗教論』筑摩書房　一九九一年　四二頁）

7 Otto, R.Das Heilige, Beck, 1979. 2-7『聖なるもの』岩波文庫　一九九五年　第二章―第七章）

8 Eliade, M.Patterns in Comparative Religion, Sheed and Ward, 1971. I 8-9『太陽と天空神』著作集1　せりか書房　一九八六年　六二頁―七一頁）

9 Gennep, A.van Les Rites de Passage, Emile Nourry, 1909. I『通過儀礼』弘文堂　一九七七年第一章）

10 荘子『荘子』世界の名著4「老子・荘子」中央公論社　一九七四年　第一八章　四

11 Platon, Apologia 40C-D『ソクラテスの弁明』全集1　岩波書店　一九八〇年　一一〇頁）

12 プリゴジン・スタンジェール『混沌からの秩序』みすず書房　一九八七年

13 Jensen,A.E. Die Getötete Gottheit, Kohlhammer, 1966.『殺された女神』弘文堂　一九七七年）

14 Eliade, M.op.cit. XII 161『聖なる空間と時間』著作集3　せりか書房　一九九〇年　一三九頁）

15 Platon, Symposion 189B-191B『饗宴』岩波文庫　一九七一年　七八頁―八一頁）

16 Schelling, Philosophische Untersuchungen ber das Wesen der Menschlichen Freiheit, WerkeBd.4, Beck und Oldenbourg, 1927. S.242-S.247『人間的自由の本質』8―9　世界の名著続9「フィヒテ・シェリング」中央公論社　一九七四年　四二〇頁―四二二頁）

主な参考文献（註にあげたもの以外の邦文文献）

杉勇他訳『古代オリエント集』世界文学大系1　筑摩書房　一九七八年
バッジ編『エジプト死者の書』（今村光一編訳）たま出版　一九八二年
矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩』修文社　一九九一年
日本聖書協会『旧新約聖書』一九七三年
ヘシオドス『神統記』（広川洋一訳）世界文学大系63「ギリシア思想家集」　筑摩書房　一九六五年
ヘシオドス『仕事と日』（松平千秋訳）岩波文庫　一九八六年
ホメーロス『オデュッセイア』（呉茂一・高津春繁訳）筑摩世界文学大系2　筑摩書房　一九七八年
ネッケル他編『エッダ』（谷口幸男訳）新潮社　一九七三年
森本覚丹訳『カレワラ』上下　講談社学術文庫　一九八三年
辻直四郎編『ヴェーダ・アヴェスター』世界古典文学全集3　筑摩書房　一九八八年
辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫　一九七〇年
辻直四郎訳『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫　一九七九年
辻直四郎他訳『インド集』世界文学大系4　筑摩書房　一九五九年
長尾雅人編『パラモン教典・原始仏典』世界の名著1　中央公論社　一九七四年
青木和夫他校注『古事記』日本思想大系1　岩波書店　一九八五年
坂本太郎他校注『日本書紀上』日本古典文学大系67　岩波書店　一九八六年
ル・クレジオ原訳『マヤ神話』（望月芳郎訳）新潮社　一九八一年
林屋永吉訳『ポポル・ヴフ』中央公論社　一九六一年
ゴドウィン『図説古代密儀宗教』平凡社　一九九五年
ホール『古代の密儀』人文書院　一九九一年
フェルマースレン『キュベレとアッティス』新地書房　一九八六年
ケレーニイ『ディオニューソス』白水社　一九九三年
キュモン『ミトラの密儀』平凡社　一九九三年
アイスキュロス『縛られたプロメテウス』（『ギリシア悲劇全集』2　岩波書店　一九九一年

あとがき

ここ数年来、私は、現代の諸問題を思想的に包み越える道をいろいろな仕方で探る試みをしてきた。以前に書いた『古代探求』は、現代の対極にある古代に帰って、古代日本人の自然観や霊魂観、世界観や人生観を探ることによって、生命感あふれる古代人のものの見方・考え方を叙述し、〈大地と生命の永遠〉という考えを明らかにしようとするものであった。次の『生命と宇宙』という著作は、一転して、現代の生物学や物理学、宇宙論などを素材にしているが、これも、『古代探求』で得られた〈大地と生命の永遠〉という思想の別の形の展開だとも言える。そこでは、生命世界にも物質世界にも通じる生命観的世界観が語られ、〈宇宙生命の永遠〉という思想が打ち出された。『古代探求』も『生命と宇宙』も、題材は異なっているが、語ろうとする思想内容は共通している。しかも、〈大地と生命の永遠〉あるいは〈宇宙生命の永遠〉という思想は、どれも、現代を思想的に包み越える道を指し示そうとするものである。

『宗教とは何か』と題する本書は、仏教やキリスト教が成立してくる以前の古代宗教を主な素材にしているが、これも、前著と同じような意図をもっている。例えば、『古代探求』との関係で言えば、本書も、同じように、文明の最も原初的な源泉へ回帰することによって、現代の対極にある真理を明らかにするとともに、現代を包み越える道を探ろうとするものである。ただ、『古代探求』は、考察の範囲を日本の古代にのみ限定していたのに対して、今回は、これを世界に広げ、世界の多くの神話や儀礼の解釈を通して、〈生命の永遠〉という思想を展開してみた。

他方、『生命と宇宙』との関係で言えば、自然科学の考察を通して得られた〈宇宙生命の永遠〉という思想を、本書は、古代宗教の本質に見、それでもって、科学と宗教の結合をはかろうしたとも言える。なるほど、科学と宗教は相対立するものとも考えられる。科学は、どこまでも実験や観察に基づいて真理を実証し、それを矛盾のない理論体系にして、その世界観を表現しようとする。それに対して、宗教は、どこまでも主観的な信念に基づいて真理を表現し、ある意味で仮構的世界を語ろうとするものである。しかも、そこに、一貫した理論体系があるわけではない。宗教的真理は科学によって実証できるものではないし、科学的真理はしばしば宗教的信念と相反する。

しかし、科学たりとも、永遠不変のものではなく、常に変化している。『生命と宇宙』でも書いたように、今日の自然科学の新しい方向を観察するなら、自然を〈生きた自然〉としてとらえ、あらゆる世界を生命というパラダイムでとらえる生命論的世界観

を打ち立てる必要があるように思われる。そうだとすれば、それは、また、宇宙に根源的生命を見る宗教的世界観にも通じていく。今日の宇宙論一つをとってみても、基本的な考えにおいては、それは、古代の神話が語っていた宇宙論にもつながる。科学と宗教は、必ずしも、相対立するとのみは言えない。むしろ、科学と宗教に連絡路を見出し、両者を結合して、大きな統一ある世界観を構築すべきなのである。

『宗教とは何か』と題する本書は、以上のような意図をもって書かれたものである。ここで扱われる対象は、古代宗教の神話や儀礼が主であって、仏教やキリスト教など、高度宗教には、十分な言及はなされていない。対象として古代宗教を特に選んだのは、〈宇宙生命の永遠〉という思想を取り出してくるには、高度宗教よりも、この方がふさわしいという面もある。しかし、同時に、宗教論も一度仏教やキリスト教以前に帰る必要があるのではないかと考えた点も、古代宗教を取り上げた大きな理由であった。宗教論と言えば、わが国では、多くの場合、仏教やキリスト教を背景にした論が多いが、仏教やキリスト教が成立するにも、その土台となり土壌となった古代宗教を見落とすことはできない。しかも、それが、また、宗教というものの原点を明らかにしてもくれる。本書で、古代宗教の神話と儀礼の解釈を通して〈宗教とはなにか〉について考えてみたのは、このことによる。

本書で語ろうとしたことは、ある意味で単純なことである。宗教は宇宙生命への畏怖から出発し、宇宙生命への帰一によって完結する。この考えに、本書の主題は尽きるとも言える。

本書では、この主題を展開するために、まず、Ⅰの「大いなるものへの畏怖」で、古代宗教よりももう一つ以前の原始宗教にまで帰って、宗教が〈大自然への畏怖〉と〈死の自覚〉から出発するということ、つまり、宗教は自己を超える大いなるものへの畏怖の感情に始まるということを見定めた。

そして、Ⅱの「大地と生命」では、Ⅰで略叙した〈大自然への畏怖〉の問題から、特に〈大地〉の問題を取り出し、大地における生命の循環と生命の永遠の信仰が、古代宗教の地母神にまつわる神話の中に語られていることを抽出した。

また、Ⅲの「死と再生」では、Ⅰで取り上げられた〈死の自覚〉の問題を掘り下げ、古代宗教で懐かれた死の観念や冥界の観念などを取り上げながら、そこから、〈生命の永遠〉の思想を取り出した。

さらに、Ⅳの「生成と創造」では、世界の諸神話にある世界創成論を取り上げ、そこから〈混沌からの生成〉の思想を取り出し、古代宗教がもっていた最も基本的な生命論的世界観に照明を当ててみた。

Ⅴの「儀礼と象徴」では、以上のような〈生命の永遠〉〈死と再生〉〈混沌からの生成〉という生命論的世界観が、素朴な農耕牧畜儀礼から古代の密儀宗教まで、多くの古代宗教の儀礼の中に具体的に表現されていることをみた。

そして、最後に、Ⅵの「罪と悪の自覚」では、古代宗教の罪と悪の観念を類型化し

ながら、この罪と悪の自覚が、古代宗教の信仰をより深め、高度宗教を生み出す源泉となっていったことを跡づけた。宇宙生命への畏怖と宇宙生命への帰一の感情に根差した宗教的信念は、罪と悪の自覚を通して、より深められたのである。

もちろん、宗教とは何かということを明らかにするには、仏教やキリスト教など高度宗教の考察を除外して考えるわけにはいかない。仏教やキリスト教が成立してくる源泉について一瞥しておくことは必要であるが、同時に、仏教やキリスト教の長い歴史の中で生み出された多くの独創的宗教思想を尋ね、そこからより深い宗教的真実を探ることも、なされねばならないことである。今後は、このことを追究していきたいと思っている。本書は、宗教についての私なりの考察のささやかな出発点にすぎない。

平成九年（一九九七年）　盛夏

著　者